出藍文庫

6-1

東方フランス文学合同「失われた時を求めて」

近藤貴弥　編

目　次

藍もどき　レミリアまたは聖杯の一考察……五
ひととせ　恵美よ……三一
ガルゾ　露……五一
こうず　姫君と護り鍾馗……五七
海沢海綿　さかしま……七九
藍田真琴　花吹雪……一〇一
鵜飼かいゆ　カタワれの恋……一二三
久我暁　夏の憂鬱……一三五
パンプキン　キスの序奏曲……一五七
近藤貴弥　見出された時……一七九
注釈……一九六
後書き……一九八

藍もどき　レミリアまたは聖杯の一考察

人里の辻。そこに人形師が立つ。周囲には人里に住む子供たちが集まり、飴を手にしながら人形師の操る人形が演ずる劇に熱中している。それはいつもの光景だ。

「こうしてパーシヴァル卿とガラハド卿、そしてボールス卿の三人は、ついに聖杯を見つけたのでした」

人形師の明るく落ち着いた口上に、子供たちは目を輝かせて壇上の中央にある、濃い紫の鎧を着て大きな盾を背負う人形が両手で掲げる金色の酒杯に注目する。

「今日はここまでよ。次回は三人の騎士の帰還の章。お楽しみに」

ええと、方々から声があがる。苦難の末に王命を果たした三人の英雄は、既に彼らを魅了していた。いよいよ物語は終焉を迎えようとするところでの幕引きに焦らされているのだ。

「ふふ。実は、まだ物語は終わらないのよ。行きがあれだけ困難だったのだから」

人形師の思わせぶりに語りながら、設備を手早く片付け、そして空へと飛び立ってしまう。この郷では、一部の者は空を自由に行き来できる。それを知る子供たちは奇異の声をあげることはなく、しかし非難の声と、次はいつになるのかという問いを発するのだ。それを背にしながら、人形師は人里を急速に離れようとしていた。

「アリス。ちょっと顔を貸してくれ」

人形師の頭上よりの声。彼女の青いワンピースと白のポンチョ、そしてヘッドドレスや服

7 レミリアまたは聖杯の一考察

の端々にあしらわれた赤という彩りとは対照的な、白と黒のエプロンドレスに黒い山高帽といういで立ちの少女が、箒に横座りになって現れた。見た目の年齢は人形師の少女と同じくらいで、そして人形師の影のあるブロンドと対をなすような、輝きある金髪であった。

「ちょっと、いきなり何よ、魔理沙」

「パチュリーの所へ行くんだ。面倒な物を拾っちゃってさ。で、アリスの知識も必要なんじゃないかって」

人形師アリス・マーガトロイドと普通の魔法使い霧雨魔理沙。郷が現在の体制となる前からの腐れ縁。しかし知識の探求となると、この二人は共闘することもある。

「何を拾ったのよ」

「こいつだ」

魔理沙は背中に背負っていた、長さ1メートルほどの布包みを見せた。するとアリスは身構える。

「剣なんて、よくもそんな持つだけでも危なそうなものを背負ったりできるわね」

「トライアンドエラーが身上の私だって、さすがに霊夢の封じ札を貼ったよ」

それならばと、アリスは布包みを手に取り、その十字をなす柄と鍔にあたる部分の布を解いた。十字の中心には赤い宝石がはめられてあり、柄尻にも同じ宝石があしらわれている。

鍔と柄は全体に青い。使われている金属からの発色である様子だ。裏を返すと鞘から柄にわたって朱筆の封じ札がべったりと貼られてあり、もしこの剣に何らかの「魔法」が使われてあったり、剣が「付喪神」となっていたりしても、その「力」を簡単に振るうことはできない状態となっていた。

「この金属はコバルトかしら……。よくわからないわね。どこで拾ったの？」

「拾ったというか、引っこ抜いてきた。これから向かう先の、湖の畔で」

「引っこ抜いた……？」

「ああ。刺さってた」

「はぁ？」

二人は既に、話に出て来たパチュリー・ノーレッジという、郷の魔女でも知識に偏重する者の住む館に向けて空路を進んでいたが、あまりの話にアリスは止まってしまった。

「それってさぁ……」

「さーてな。あんな変なところに湖の貴婦人がいるとは思えないぜ。いるとしたら蛸入道か、はたまた人間が嫌いな河童かなんかだ」

魔理沙の口端が若干上がる。先ほどまでアリスが上演していた人形劇に登場する三人の騎士の主についての伝説。「外の世界」より幻想が集まるこの郷だからとアリスは刹那疑った

わけだが、魔理沙の指摘の通りだとも思いなおす。
「どっちにしろ、怪しいことは確かなんだ。一旦こーりんの所で鑑定してもらったんだが……。まぁ、詳しいことは図書館で話すよ」
二人の眼下にその湖と、そして紅い館が見えていた。

図書館の主人――パチュリーは、不機嫌な顔で目の前の剣を見つめていた。紫の濃淡でまとめられたガウンとワンピースが椅子の中でもそりもそりと動いている。
「これが、うちの近くの湖畔に刺さっていたって？」
「証拠が欲しいか？」
「いらんわ。お札、剥がすわよ」
言うが早いか手が早いか。パチュリーは使い魔が持って来た湯に浸されていたタオルを使い、貼られていた札を綺麗に剥がし取る。
「魔理沙。この鞘は……」
「鞘ごと地面に突っ立ってたんだ。抜いたら危ないだろうなと」
魔理沙は苦笑いで応じた。

「正解よ。『元の鞘』とも言うように、刀剣にとって鞘こそが封じ。その内にある限り、妙な力を持っていたとしても大人しくしている。香霖堂の店主が用途を読み取れなかったのは、封じの札ではなく、この鞘のため。かといって、抜き身を半妖とは言え魔術に精通しているわけではない彼に持たせては、どうなるかわかったものではない。ここに持ち込んだのは賢明だったということね」

特徴である早口で、以上のことをパチュリーはまくしたてた。そして彼女は、普段は様々な本が山と積まれ、紅茶やコーヒーのカップがこの三人が集う時には並ぶ、今は剣だけが中央にある大きな樫の真円を描くテーブルに対し、鍵となる言霊を投げかける。

「あら、そんな使い方ができるのね」

アリスがパチュリーにより発現したテーブルの真価に唸った。テーブルは、上にあるものをそこに拘束する力場を形作っていた。

次にパチュリーは魔理沙にテーブルの上へ乗るように言った。

「お、おい。私まで束縛されるだろうが」

「そうよ。この隙に本を持って行かれてはたまったものじゃない。さっさと剣を抜きなさい」

「うぇえ……。その時は頼むぜ?」

渋りながら魔理沙がテーブルの上へと、膝で乗りあがる。拘束と言っても、天板の外側へ

出られないようにするという形だとパチュリーは言う。その間に魔理沙は剣を横に持ち、立ち上がった。アリスとパチュリーに頷いて見せて、彼女は剣を抜き放つ。銀色の刀身が音もなく現れ、館内に揺れる灯火を照り返して、切っ先が輝いた。

――バリン

その時だった。テーブルに仕掛けられていた護身の魔法円が崩れ去る。

「なっ!?」

パチュリーが目を見開き、慌てて同様の、アリスも加わってもっと強力な「盾」を作り出そうとしたが、それは間に合わなかった。魔理沙の手の中にある剣の中心。その宝石が、激烈な赤い光によって周囲を包み込んだのだった。

光は、時間にすれば二十秒ほど続いただろう。それはまた唐突に消え去った。残ったのは、剣を抜いた姿勢のままで体を強張らせていた魔理沙と、腕を顔の前に出して防御姿勢をとるアリス、そして椅子に敷いていたひよこの座布団を咄嗟に頭の前に掲げたパチュリーという、なんとも間の抜けた光景であった。

「……なんともない?」

「ということはなさそうだぜ。そこで目を回してるのは、ちゃっかり巻き込まれたお嬢様だな」
「ちょっと、レミィ!?」
パチュリーが椅子を引くと、床に倒れていたこの館の主、レミリア・スカーレットの額に椅子の足があたり、ごんという鈍い音がする。その衝撃でも気が付かない様子なので、パチュリーは慌てて立ち上がり、レミリアの様子を確かめようと肩へ手を伸ばす。
――バチン
「痛ぅ……!」
一番先に触れようとした中指が裂け、血が飛び散った。淡い桜色をしたレミリアの衣服に、赤い斑が散らされる。パチュリーは怪我の状態を無表情に観察すると、ぶるんとその右手を振るってみせた。それだけで怪我は跡形なく治癒されていた。
「魔理沙……いえ、あなたでも駄目ね。おそらくは、聖の属性を強く持つ存在でなければ、今のレミィには触れられない。はぁ、なんで紛れ込んでいるのよ。……まずは、その剣を鞘に納めてみて」
パチュリーの指示に従って、魔理沙は刀身を鞘へ入れようとするが、「鉛でも詰められたようだ」と、達成することができなかった。

13 レミリアまたは聖杯の一考察

「理解。やはり呪いの剣……、いや聖別された剣か。純粋な魔の性質を持つレミィがいたから反応したというところね。そういえば、もう一人いたわね。小悪魔は……あら、大丈夫みたいね」

「一応、様子を見て来るわ。どのあたりに？」

アリスはパチュリーから使い魔のいるだろう位置を聞いて飛んだ。書架の間を暫く行くと、そこでは本を棚から出して集める、黒のチョッキにスカートと白のブラウスにネクタイという普段通りの使い魔の姿があった。

「なんだかお嬢様がまた大変なことになったとか」

アリスの姿を認めて、パチュリーの使い魔は「おそらく関係するだろう本を集めている」と言った。

「随分多岐にわたっているわね」

「聖杯探索の騎士物語は大量にありますからね」

「聖杯？」

アリスは聞き返していた。確かにパチュリーは聖の属性について言及していたが、それがどうして聖杯などという「幻想の」聖遺物と繋がるのかが不明瞭だったからだ。

「あれ、気づいてなかったんですか？　魔理沙さんの持って来た剣こそ、聖杯のひとつです

よ。まさかパチュリー様の守護法円を破るぐらい強いとは思いませんでしたけれど」
「ええ。あれが？」
小悪魔はサービスワゴンを小走りに押しだした。
「聖杯が、物によっては杯の形をしていないというのは知っていたけれど、いきなり出てくるものじゃないでしょうに」
アリスはそれについて行く。
「魔理沙さんが持ち込んで来たときからまずいかなと思ってたんですが、それでもよもやそれほどの品とは思いませんでしたよ。悪魔にとって、聖杯に分類される武具は、近しい紛い物でも忌避すべき品物ですから、見つけ次第に破壊している悪魔もいるぐらいです。お嬢様が悪戯を仕掛けようとしていたのも重なって、最悪の事態ですね」
そう言いながら、小悪魔はワゴンに載る本の順番を入れ替える。それが終わると、丁度パチュリー、魔理沙、そしてレミリアがいるテーブルであった。
レミリアには彼女の従者である十六夜咲夜というメイドが付き、介抱を行っている。咲夜は触れることができる様子だった。魔理沙はというと、剣に封じの札をした上で持って来たときの布に包み、その上からさらにべたべたと封じの札を貼り付けている。
「パーシヴァルまたは聖杯の物語？　後の伝承民話じゃない」

15 レミリアまたは聖杯の一考察

「その話が状況にもっとも近いと思いまして」

パチュリーはその本と、その下に積まれていた本を手に取り、見比べるように調べ出す。

本を高速でめくるパチュリーが、不意にその手を止めて使い魔に顔を向けた。

「パーシヴァル卿は槍の名手にして、アーサー王の円卓の騎士たちによる聖杯探索で唯一探索に成功した人物。ああ、この剣は聖杯ってことか。で、カード……ああ、ジャックか。小悪魔。それは確信かしら」

「湖畔に出現し、魔を退ける力を持つ聖杯につながる剣となるとアーサー王と円卓の騎士、そして中世の騎士たちの物語が。その中で青という連想ですと、ランスロしか思いつきませんでした」

「正解でしょうね。魔理沙。剣の柄にはめてあった宝玉は調べたのかしら」

「一応だがな。あれはルビーのようでそうでない。こーりんによれば、あれは血を加工したものだそうだ。誰のかは知らん」

「把握です。力の強い紛い物どころでなく、本物の聖杯ですね。まずいなぁ」

使い魔の顔がさらに渋くなった。その主人であるパチュリーは「知らんどころではないだろ」と、魔理沙を睨む。

「明らかに、例の人物の血液じゃない」

「聖杯なんて言葉は、ここに来てから聞いた。つまり何か。聖杯ってのは、その血を受けた杯だけじゃなく、血そのものや、その血が付いたもの全部ってことか。いくら私が勉強不足だからと言って、そこまで知ってる奴なんて少ないんじゃないかと思うぜ？」

パチュリーはふんと鼻を鳴らしながら魔理沙から視線を移し、使い魔は「仕方ないですよ」と慰める。パチュリーが視線を向けた先では、アリスが素知らぬ顔を決め込んでいた。

「どうやらそのようね。落ち着きを失くしていたわ。さて、レミィを襲っているモノを何とかしなくちゃならん。というわけで、魔理沙。人間は触ることができる様子だから、レミィの手を取りなさい」

「こうか？」

言われた通りに魔理沙は、咲夜が引っ張って来たカウチに寝かされるレミリアの右手首を恐る恐るに取り上げた。

「何か感じることは？」

「脈がない」

「それはレミィの仕様よ」

「こいつ製品だったのか。いや、吸血鬼って心臓あるんじゃなかったか？」

「バグは夜更け過ぎに仕様へと変わる。他には？」

17 レミリアまたは聖杯の一考察

「……ああ、何だって？　レミリア？　起きてるなら目ぐらい開けろ。ああ？　それじゃどうすりゃいいんだよ。……結局パチュリー任せじゃないか。あー、それならいい奴を知っている。その方が確実だぜ」

急に会話を始めた魔理沙の様子に、パチュリーはやはりと呟き、三冊目の本をワゴンに戻させる。

「レミリアの奴、意識までは失ってないぜ。咲夜もわかってただろ。言えよ」

「必要な時となるまで、口にするなと厳命されたからよ。どんなものかわからない呪いなんだからって」

紅魔館のメイドである咲夜が主人からそう言われれば口を噤むのも道理と魔理沙は頷き、そして行動を起こそうと提案した。

「要するに、レミリアが見せられている夢を何とかすりゃいいようだ。本人が中で調べたことだとさ。ということで、これから月に行く。正確にはその途中までだ」

「漠で対処できる話じゃないし、それまで待てる話でもない。今この場で対処する。対処できる者が既にいる。小悪魔は……次の資料を集めに行ったか。あいつが戻ってきたらやるわよ、夢渡り」

パチュリーの厳格な物言いに、魔理沙とアリスは猶予がそれほどにはないことをようやく

知った。アリスは思考が停止していたことを認識し、魔理沙は悪い方向へその推進力が発揮されようとしていたと自戒する。妖怪は精神的な生物である。精神が浸食されているということは消滅の危険が差し迫っていることを示す。レミリアが体を動かせない状況からそれを読み取るべきだったと二人は気づいたのだ。

それを見て取って、パチュリーは頷いて見せた。

「なまじレミィは強いから、そういう認識を持ちやすい。その強さの分、弱点も多いということを忘れがちになる」

魔理沙はアリスを連れてレミリアの夢の中へ潜り込むことに成功した。パチュリーの用いた魔術は、体はレミリアの両隣で寝ている状態とし、三人の意識を接続するというものだ。

アリスが魔理沙に付き添ったのは、人間の魔理沙が妖怪の精神の中で行動することの保険であった。いわば水先案内人である。

彼女たち二人の意識は最初、茫々とした暗闇の中に放り出されていた。どこまでも闇に塗りつぶされた中で、お互いの顔だけが認識できる。それが次第に肉体を動かすのと変わらない感覚を得て、五体を感じ取ることができるようになっていく。それまで、魔理沙は少々平

19 レミリアまたは聖杯の一考察

静を失っていた。それは意識だけの状態においてとても危険なことで、アリスが傍にあったことは、ものの始めから十分に役立ったのだ。

「ようそこ、私の中へ。案外早かったわね」

魔理沙の感覚で言えば、闇の中に声が響き、次に周囲を強めの光照らし出した。急な夜明けのような光量の変かに、思わず魔理沙は目を瞑ってしまう。

「助かったわ。一人で抜け出すにはなかなか骨が折れそうでね」

魔理沙が目を開くと、視界の中央にレミリアが椅子に座っていた。豪奢な椅子である。赤いビロード張りで金色に塗られた椅子だ。さながら玉座というところ。それにふさわしいようにか、荘厳で重々しい装飾の、柱ごとに篝火が揺れる大きな部屋となっている。レミリアの座る椅子は一段高い場所だ。

「謁見の間ということ?」

アリスが苦笑すると、レミリアはため息を吐く。

「普段、こんなところに座っていることを望んでいるわけがないじゃないの。私の執務室は知っているでしょ? あれが理想よ。自分の手の届くところに必要なものがあり、ないとなってから従者を呼ぶ。何をするにも従者が必要なんて、面倒でしかないわ」

レミリアはそう言うと、ひょいと立ち上がって二人の傍へと歩き出す。その間に服装がみ

るみると変わっていくのに、魔理沙とアリスは声をあげた。椅子では普段通りのそれだったが、二人の前まで歩くうちに煌びやかな金銀の刺繍がある、淡い桜色のドレス姿に変わってしまったのだ。額には銀のティアラまで現れ、背の羽がなければ西洋のお伽話に出て来る幼い姫そのものである。

そこで彼女はまた嘆息して、この呪いは訳が分からないと言い出した。

「飛ぼうが何しようが、部屋のこの辺りまで来ると、盛装されてしまうのよ。なんなのかしらね、これ。いつの頃の様式か、判断がつく?」

「色々混じっているわ。全て欧州だけれども、刺繍は十八世紀の。ドレスの型はとても古くて五世紀から六世紀。ティアラは十九世紀だし……失礼? ソックスは十七世紀ね」

アリスがレミリアの服装を屈みこんでまで鑑定すると、レミリア当人は余計にわからなくなったと首を傾げる。

「部屋の外には出てみたのか?」

「いいえ、出られなかったわ。声を張り上げれば、接触した相手に伝えることはできたけれども、囚われているという状況ね」

「じゃあ、まず試すことはこれだな。お手を拝借」

少し気障な仕草で魔理沙がレミリアの左腕を取り、椅子とは反対方向にある大きな扉へと

21 レミリアまたは聖杯の一考察

歩き出すや、両開きの扉は一人でに開いた。扉の先は長い直線の廊下となっていて、やはり炎によって照らされている。

「役者が揃ったということか。ならば、さっさと解き明かしてやるわ」

レミリアが口の端を上げ、牙を見せつけるように笑う。そこにアリスが追いついて、魔理沙の腰に何かを結び付けた。

「おお？　なんでこの剣があるんだ？」

「やーっぱりね。これ、案外簡単な話で終わるかも」

アリスの言葉にレミリアと魔理沙は疑問符を浮かべるしかない。

「これから向かう先は、さて、どちらかしら。忠誠を誓ったはずの王との対決か、それとも王命を果たした騎士を迎えるか」

「アーサー王の伝説、それも終端の手前の話じゃない。それだとなぜ？」

「レミリア。剣を見て」

「……ようやくわかったわ。これは劇。私たちは役者か」

「ええ。こんな大掛かりで手の込んだ回りくどい方法は聞いたことがないわね。英雄の物語を追体験するために、聖者の血玉まで持ち出すなんて」

言葉の割に、アリスは楽しそうな足取りだった。一方、話から置いてけ堀を食った魔理沙

だったが、そういうことなら得意だと胸を張る。そうして、廊下の終端、再び大きな両開き扉がある前まで三人はやって来ていた。

扉は重々しい音を響かせながら開いて行く。戸が隙間を生じさせれば、その向こう側から眩しい陽光が三人を照らした。その瞬間に、レミリアは慌てて魔理沙とアリスの後ろへと隠れ、その二人はレミリアに光が当たらないようにと体勢をとる。

「……あれ？　熱くない」

「なんだよ、驚かせるな」

「仕方ないじゃない。いきなり弱点を投げられたんじゃ、たまったものではないもの」

「本能的な防御反応だし、私たちだってあわせたけれどね。まぁ、あなたの心象世界が基だから、そこは気にしなくていいということかしら」

吸血鬼であるレミリアは日の光を浴びれば火傷を負い、そのままであれば蒸発してしまう。普段は特注の日傘によってレミリアは防いでいるのだが、どうやら「この中」ならばその問題はないようだ。

開ききった扉の先はバルコニーとなっており、城壁に囲まれた前庭がそこにあった。向こうに見える城門は解放されていて、多数の人々が、城門からこちらへ伸びる道のわきに詰めかけている。

23 レミリアまたは聖杯の一考察

その庭の様子をつぶさに見て、アリスは時代が入り乱れていると指摘した。
「これ、ベルサイユ宮よ」
「私が生まれているじゃないの。本当にアーサーに関する劇でいいのか、疑わしくなってしまった」
「いいや、アーサー王だ。それも、パーシヴァルの帰還のシーンだ。ようやく思い出したぜ。これはある作曲家による歌劇での演出だ。本人は即興曲だからと残さなかったけれどな」
「あら、魔理沙。博識なことね。それで誰なのかしら、その作曲家は」
レミリアは少し嫌味を含ませた。その知識はどうせ、図書館から盗み出した本によるものだろうという揶揄だ。
「モーツァルトね。」
しかし、返答したのはアリスだった。
「ああ。タクトを振っているのは奴だな。そして、これからパーシヴァルとしてやって来るのが、大方親玉だろう」
「その霊夢のような勘は、妖怪退治屋としてかしら」
幾分かレミリアは膨れている。それに対して、魔理沙は微笑しながら頷いた。
「これでも、長いからな。さぁ、お出ましだぜ」

三人がバルコニーの中央に歩み出ると、階下に並んでいるだろう音楽隊の演奏が始まった。
〜〜プペペポピー〜〜
そしてレミリアとアリスは体を傾がせ、魔理沙に至っては噴きだして笑ってしまう。
そんなこととはつゆ知らず、城門より旗を靡かせて駆けて来る騎士、一騎の姿があった。
その騎士は道の中央にある噴水の位置で下馬すると、悠々という足取りでバルコニーの直下までやって来た。
「王よ！　その尊顔の前にこうして再び立ち、礼をできる栄誉に浴せることを、私は最大の敬意を以て感謝いたします！」
兜を脱ぎ、膝を着いた騎士は、女だった。銀髪が輝いている。
「ああ、うん。咲夜ね」
「咲夜だなぁ」
「この分だと、マーリンはパチュリーかしら」
レミリア、魔理沙、アリスの順に呆れ声が発せられた。しかし、騎士の口上は続いている。
「王命を果たし、今ここに帰参いたしました！」
盛大な拍手が観客から沸き起こる。その中で、騎士は横に抱えていた宝箱を掲げて見せた。
「あの中身は聖杯、よね。私が持てるかしら」

25 レミリアまたは聖杯の一考察

「大丈夫だろ。この日当たりのいい場所で無事なんだから」
「じゃあ」
　レミリアはそのままバルコニーから飛び立ち、騎士の前へと降り立った。観客からどよめきがおこり、そしてそれは再び歓呼と変わる。呼びかかる声は、すなわち物語における主君の名である。
「よく戻りました。直接、受け取りましょう」
　騎士は恭しくレミリアへ箱を渡した。その時である。
「やーっぱりな」
「よく偽装したものね。近くに界隈の大物がいるというのにね」
　閃いた刃を人形の盾が受け止めていた。レミリアは一歩分身を退いており、その前に魔理沙が彼女の武器である「ミニ八卦炉」を構えて立っている。
「あらら、護衛も強いのか。面倒だなぁ」
　騎士は立ち上がった。確かに咲夜の顔である。銀色の甲冑姿は、図書館で眠るレミリアの傍らで心配しているだろう彼女がそのままに、この武装を身に着けているように見える。だが、破魔の銀は次第に赤黒く、静脈血のような色へと変じだした。
「でも、不正解。あたしは、サキュバスじゃ……」

「猫又だろ。それも、こっちに入って来たばかりのだ。八雲の狐の式に挨拶してるなら、手を出すはずがないからな」

「さすが博麗の巫女のバックアップ。ツインテールキャットも、精神浸食の特性があったわね」

レミリアがぽんと手を打った。

「いや、手がかりがあっただけだ。湖でこれを拾った時、つっつこうとしてたチルノが猫がいたと聞いたんだ」

魔理沙はそう言いながら、八卦炉に火を入れる。

「月の異変のときに夢の中でもこいつは使えるって、証明済みだからな。さっさと消えな」

「くっそ!」

咲夜の形をした存在は一目散に駆けだそうとして、その場で盛大に転んでいた。アリスの操る人形が絡み付き、拘束しているのだ。

その瞬間に、周囲の風景が一変する。紅に埋め尽くされた空間だ。魔理沙とアリスは見慣れた景色で、紅魔館の玄関ロビーだとすぐに知れる。そして転んでいたはずのそれは、ロビー中央で何かに両手首より宙吊りとされている。どう身じろぎしようにも、その高速からは逃れられない様子だ。

27 レミリアまたは聖杯の一考察

レミリアの姿もいつもの彼女の服装となり、その手にあったはずの箱は、槍へと変じていた。

「失せるがいい！」

一閃。レミリアの手から放たれた槍は正確に相手の中央を穿っていた。

「やれやれ。色々謎が残っちまったな」

身を起こした魔理沙は背伸びをしながらそう言った。続いてレミリアが起き出し、傍で渋面のままにいた従者を安心させる。そしてアリスが立ち上がり、テーブルの上に置かれたままにされていた発端の品を確かめる。

「あら？」

包みを解くと、そこには剣ではなく、血の付いたハンカチが残されていた。彼女はそれを慎重に、パチュリーが普段使っている筆記具を箸のように使って持ち上げる。

「血染めのハンカチねぇ……。あれほどの力を持っていたのだから、この血はそれなりの行者だかの血かしらね」

アリスはパチュリーが差し出したガラス瓶へとそれを入れて、「猫又の仕業だったわ」と、

瓶の蓋を閉め、封印を貼り付けるパチュリーに告げる。
「猫又？　八雲の？」
「いいや。たぶん、新入りだ。まぁ、精神を磔にされたから、もう死んでるだろうが」
魔理沙の返事にパチュリーは首をかしげる。
「レミィを陥れることができるほどの猫又なんて、郷でも名が伝わっていなければ変よ」
「たぶん、血のハンカチのせいさ」
疑問にはレミリアが解答を出した。
「その血は、本当に聖者の物だ。そう、キリストのね。知っているかしら。今、外の世界の立川というところに、彼が住んでいることを。ああ、咲夜、お茶を淹れて頂戴」
片目を瞑って見せたレミリアは、少し待っていろと、疑問符を浮かべたままの魔法使いと魔女二人を置いて、司書の使い魔と共に自室へと行き、とある本を持って戻って来た。
それは漫画本だった。何冊も続刊があるのだから人気なのだろう。各刊の表紙には、どうもありがたさがない釈尊と神の子の姿が描かれていた。
「このハンカチを手に入れて、こちらへ飛ぶことを得たのでしょうね。そして、この館に目をつけた。小賢しいことよ。さ、お茶で一息を入れたら、死体を探しましょう。面倒なアンデッドになっても困るわ」

レミリアは事もなげに言って退けたが、その真実が示すことに、魔法を操る三人とその使い魔一人は顔を見合わせるしかなかった。《了》

ひととせ　恵美よ

『人間は教育によってつくられる』

そういったのは果たして誰であったか。ともかく、私――上白沢慧音――は、長年の授業に基づいて発見した事実と考察、そして実践を経て、改定を繰り返してきた教育方法を一つ、文章として残しておこうと思う。

私は赤子を一人拾った。名前は恵美。女の子だ。

女ということで、やれ「弾幕ごっこに目覚めそう」であったり、やれ「巫女と仲よくなって妖怪と仲良くするんじゃ」という扱われ方をしそうであるが、そもそもの話をすると子供の時分は男女大きな違いはない為、問題視をしていない。故にここに記すのは、男女平等に取り扱う、児童の成長に関する教育論である。

まず乳児期である。一般の家庭においては、ただひたすらに、お乳を吸わせるだけであろうし、大きな問題はない。ただ、子供の首が座ってきた段階になると、母親が（或いは乳母が）背中に背負って仕事をし始める。子供はただひたすら、母親の仕事につき合わされる。

この年齢に必要なのは十全な意思疎通である。とりわけ乳児の段階では、反射で笑顔を作る。笑顔は人間が作り出した取り分け原初のコミュニケーションツールなのだ。

なので私は可能な限り時間を作り、話しかける。笑顔を作り、時におどけて、時に慰めながら、ただただ笑顔を絶やさぬようにする。

生き地獄ではある。だがこれが最善なのだ。二時間毎に訪れる恵美の睡眠時間を休息時間とするしかない。家事は旦那と家政婦に任せるしかない。

そうして、笑顔を作って日々の変化に関して、言葉をかける。だがその時、『より多くの語彙を』と思って多くの言葉をかける必要はない。というより、できれば平易な言葉であった方が望ましい。

子供とて、乳児とて、一個の感情を持つ人間である。

過敏というには余りにも過敏な神経を使って、外界にある物質を知覚し、己の中で科学的な研究を繰り返しているのだ。そして自らの語感を最大限に使って蓄積された経験は、言語では表現しきれない概念となって保有されている。

それを、大人が慣習化し、手癖口癖で出てくる単語によって定義づけられてはならない。あくまでも、子供自身が容易に吸収できるように、平易な言語を用いる方が良い。

だから私も、恵美には難しい言葉を避けての、頻繁な言葉がけを繰り返す。

取り分け、この時に気をつけたのが、大人の感情をそのままに吐露するのではなく、快の感情に根ざすような文章を作ることだ。

「暑くて辛い」というのは、大人の感情である。だが子供にしてみれば、不快の感情が根付いていない。となれば、暑さを、或いは、冷水の冷たさと体温調節がなされた事実を快に

根付く文章で言葉をかけ、子供が独自に抱えた概念に快の感情を植えつけていきたい。

曰く「冷たくて気持ち良いね」と言えば良い。

子供が独自に抱えた温度知覚に、取り分け難しい言葉を使う必要もなく、ただただ、快の感情を付けれるようにしていきたい。無論、恵美が悪意に晒された時には、親である私が安全の保証をなせるようにする。

日々の食事に関しても、同じとなる。

ただこの時に必要なのは、温度の冷温による快・不快ではなく、美味だと感じることである。とりわけ、子供の鋭敏な味覚を尊重しながらの『食事の快』を学ぶことになる。

ただ多くの親が、安易に咀嚼をしてそれを手にとり、子供に与える方法をとっている。かようにしているのは日頃の労働からくる疲れであろう。或いは乳母がそうしているというのであれば、怠けか、文化継承の悪しき一面であろう。

人間と野生動物は同じではない。

燕がそうするように、親が咀嚼して子供に与えてはならない。

故に私は、調理の段階にて――ある程度は同じであっても――親の食事と子の食事を分けて作るようにしている。結果としては、虫歯の本数が激減しているのを確認している。

指さしや二語文が出てくれば、いよいよ他人との会話が始まる。三語文ともなればもう流

暢な会話だ。そしてそれは、現象を知覚し、いよいよ言語化を果たす。そうなった時、子供は、外界の科学的理解のみならず、自らの意思によって外界への発信を行う。

恵美は、音を楽しむ子であった。

石を投げ、木をぶつけ、川岸に佇み、もらった太鼓を叩く子であった。

この、一見無為な行動に見えるこれが、恵美自身が行う科学実験であり、自然との対話であった。この年頃は積む行動も崩す行動も楽しむ。そうやって彼女は音を媒介として、空間認識を強く体得していった。

さて、この年齢となった時点で記しておくことがある。

まず一つ。

四つんばいでの移動。すなわちハイハイである。

多くの母親や乳母には、己の内から生じた親の愛がある。『這えば立て、立てば歩めの親心』という言葉に代表される愛情である。その愛情に従い、立った子ども歩きだした子どもを、そのままにしている。

見るだけで癒される感動があるのは否定しない。が、私の経験上、ハイハイを行っている時期は長い方が頭が良くなる傾向がある。

外の世界からやってきた人間が言うには『四肢の動きや刺激が二足歩行より多いので脳の

成長に良いのではなかろうか』ということらしい。

とにかく、ハイハイの時期は長い方が良い。

可能な限り広い場所へと遊びにいき、四つんばいで遊べる空間を作る。具体的な方法は子ども本人によって変わる為、実例を交える事は出来ないが、恵美に関しては、毬を使った遊びをした時に楽しんでいたのを覚えている。

そしてもう一つ。

排泄の訓練である。

おむつ――外の世界からきた人間に説明すると下着ではなく産着だ――にくるまれた赤ん坊は、やがて排泄の意思を表示する。

この時、母親が見事に排泄の意思を受け止められれば問題ないのだが、多忙を極める母親や乳母ではそうはいかない。多くは、赤ん坊の意思を見逃し、失禁を許す。ついに母の怒号となれば、赤ん坊には耐えがたい苦痛となる。

杉田玄白の『解体新書』などにも記されているが、突き詰めれば、排泄の我慢というのは、膀胱や大腸などの「槽」と、それを締めつける筋肉、「栓」との関係である。

「槽」が小さければ、或いは「栓」が緩ければ、水漏れはたやすく起きる。そして逆に、「槽」が大きければ、或いは「栓」が強ければ水漏れは起きない。

そこで私は、一つの提案を試みる。

数え三才と半年になるまで、あらゆる失禁を許す。その間は適宜、排泄を確認、掃除をしつつ、運動によって筋肉を鍛え、成長を待つ。頷きや一語文、二語文の会話が許された段階になった時、初めて子供用の下着へと以降する。

これによって筋肉の強化育成を果たし、「槽」と「栓」の能力を強化する。

結果として、特段大きな問題がない限り、おおよそ半年間にて排泄の訓練が終了する。

次に、食事である。

食事の快・不快に関しては前述の通りなので除外とする。この歳である、箸の類は持てない。必然と、母親が与える事が多くなるであろう。だがしかし、それだけでは食事とはいいがたい。

自らの意思によって食事経験を獲得し、快感を得なければならない。

忙しい母親である、赤子の食事にかまってなどはいられないであろう。実際、排泄訓練を重ねる時期ともなれば歯もまっとうに育ち、大人同様の食事を続けることが可能である。困難を極めるであろうが、この時の配慮先は二つ。

食器の変化と『自らの意思』である。

食器はビィドロ製の物があるなら、変更しても良いだろう。視覚に訴えれるというのはそ

れはそれで貴重な経験である。一方で、全ての食器がビィドロ製になる事は不可能である。だがこれも考え方の問題である。

必要なのは変化と刺激である。

ビィドロ製食器による量の視覚化と、そうではない食器からくる手さぐり感ともいうべき感覚。これらの双方を保証する事が肝要である。

次の『自らの意思』である。

直前と重複する文章となったのは申し訳ないが、若干の意味が変更される。

食事そのものを楽しむのが先述した「食事の快」だというのであれば、今回は「食事そのものへの衝動を実行する」という方へ変化する。

何が言いたいのかというと、「『誰かが口まで運ぶ給餌』だけであってはならない」という意味だ。

無論、食事そのものに栄養補給という客観的な効果がある以上、確かな食事をしなければならないし、その為には保護者の手による食事も必要であろう。だがそれだけ――それしかしないのならば、口悪く言えば給餌である。

そうであってはならない。

幼い子であっても、自らの食欲を満たす行動を達成して子供自身が手を伸ばす「食事」に

しなければならない。乳児ならば母親の胸を押して母乳を出やすく促している。失われたとまではいわないまでも、改めて習慣化していきたい。

とはいえ、多忙に追われるのが親というものである。

料理を玩具同然に遊びながら食べる状況は想像にたやすい。かつ、そうなれば掃除の範囲が増えて更に多忙な状況に追い込まれる。それは忍びなく思う。実際、私も恵美に泣かされたことがある。

そこで、打開案として自らに提案したのが、柔軟オブラートである。

一口の大きさに小さく分けた食べ物を子供自らの手で食べるように促すのである。親子で同じ物を食べるのが良い、という事であれば、いっそ、母親自らもまたこのようにして食べるのも良いかもしれない。

無論、あまりに小さければ、ただただ手間が増えるのみであるが、たとえば饅頭ほどの大きさともなれば話は変わる。必要であれば餃子の皮なども活用すると――多少、手のべたつきはあるだろうが――良いかもしれない。

無論、そんな手間もかけられないといった場合、掴み箸での示威くじ以外にも匙や突き匙を使っても良いだろう。かくして、私は恵美と仲良く食事をする事ができた。

これから子供は社会の一員としての生活を始めることとなる。

社会の一員として必要なのは、規則の遵守ということである。ただ一つ言えば、遵守ではなく、努力義務というあたりであろうか。

自らの内側からこんこんと湧き出る「規則を守ろう」「こういう行動を取るつもり」という心情を重要視しなければならない。

と同時に。

健康的な生活を行い、自らの『健康』を自覚し、異常事態に陥った時に報告できるようになる必要がある。ついては、遊びすぎる父親諸氏について特に留意していただきたい事がある。

子供――とりわけ、寺小屋に入る前の子供は、心身共に不安定である。

その中で数人、不安な出来事があった。

遊んでいる子供の一人が、唐突に座り込む時があった。顔色がよくなく、脈拍も弱々しい。急遽、竹林の医師に見てもらった所、奇妙な返事が帰って来た。

曰く、

『不整脈に区分される』

と。

過剰な運動が、子供の不整脈を招くらしい。

これ自体は取り立てて問題なく、十分な休息をとれば元に戻るらしい。が、不整脈そのものを頻発することが望ましいとも思えない。まして、いつ誰に後遺症が発症するかわからない。

であるならば、父親諸氏に願うことは過度な遊びの中止である。

遊びすぎず、てきぎ、休憩を挟んでほしいというのが切なる願いである。

閑話休題。

社会の一員となった時に重視される段階である。

まず前提条件を記しておく。

これまでも集団活動はあったと思われる。砂場で、或いは、どこかの家で。子供自身の友人と、或いは、子供と遊ぼうとやってきた年上の者と遊んでいた光景を見てきたであろうと思われる。

しかしそれは、今後とは一線を画する。

直前に記した子供の遊びは『個人の遊びを集合体化』したものである。子供自身が中心となり、その発展形として集団の活動があったにすぎない。誤解を恐れぬ言い方をすれば、子供全員が主人公、であったわけだ。

しかし以後、集団活動と明記した場合は『集団を組んでの行動』というのを前提に記して

いきたいと考えている。

無論、いかに『集団を組んでの活動が前提』とはいえ、相手は未熟な子供であるし、そもそもとして個人の差異を無視した集団活動など不可能である。これはいつの時代も同じである。

だが、集団活動を営もうとする精神をここから始めなければならない。

まずは集団活動そのものの存在を認識することであるが、これは日々の生活を営んでいただきたい。場所は、演劇、楽団などなどであろうか。とにかく集団活動を前提とした行動を目視し、「皆が頑張っている」などといったことを発言していただきたい。

ただし、取り立てて『集団活動を見せよう』と意識して行動する必要はない。遊びに出かけていただければ問題ないと思っている。

人はそれだけ集団活動を営んでいるのだから。

そうやって認識を積んでいただくとして、子供自身が行う集団活動の一つが、歩調である。一人で先に歩いても問題であるし、遅れても問題である。これに関しては――歩行程度で起きないとは重々承知であるが――先刻の過剰運動による不整脈の問題と照らし合わせた上でいえば、早すぎなければ問題ないだろう、とする。

これに関しては、我が家の恵美はさらなる幼少の折りから、社会活動を見せてきた為か、

年頃になり会話も語彙が増えるようになると親の私をせっつかせるようになった。私とてまだまだ子供との付き合いが楽しい。

次は日常習慣である。

が、これに関しても特に明記する事はない。極端な物の言い方をすれば『人が人として望ましい生き方』を繰り返すのみである。

希望の朝を胸に抱き、日々の変化に心を踊らせ、自らの人生によって獲得した日本語、或いは、何らかの道具を使った表現によって意思疎通をはかり、社会善を尊び、自らの責任を果たすようになってほしいと考える。

ただし、この二つの社会活動。

最も尊重されるべきは『目的を果たそうとする』ことであり『目的の達成』ではない。何かをしようとした、その精神自体が尊重されるべきであり、結果は二の次でいい。子供の失敗があった時、親兄弟や年長の者が代わりにすれば良い。問題は、目的意識が根付いているかだ。根付いているならば、その時点で、子供自身をほめる理由になる。

そういう意味で、恵美は――私の失敗談とするにはあまりにも問題があるが――騒がしい子に育ってしまった。音楽的な行動を愛する分にはいいが、その分、節度をわきまえない部分が多々ある。

取り分け、当家では未熟ながらも箸を使って食事をしてもらっているが、食事に飽きるとまあ……その……茶碗を叩いて楽器がわりにしたりする時がある。回数は減ってきているが、あまり良い仕種ではない。

なので、始めたらその場で説得を始める。

ただこの時、可能な限り冷静な説得である方が望ましい。唐突に怒りを与えられることは子供にとっては理不尽であり、ましてそれが人前であるならば恥をかかされたとも感じるであろう。

勿論、親も人間だ。感情的になることもあるだろうし、常に冷静を心がけるのも不可能だ。だが、緊急性がないなど、冷静な対処が可能な時は、冷静に務めていただきたい。大丈夫、子供だってちゃんと説明すればわかる。

一度言えば、一度直す。

習慣化づけようと思えば、できるまで説得を続ける。できた時にほめる。

幾つか方法論はあるだろうが、究極的には、これしかないのではないだろうかと思う。

ついでに、体罰にも述べておく。

事前に言っておこう。

体罰や絶叫的な説教、それ自体に効果がないとまでは言わない。だが、これらはあくまで

も方法論の一つであり、常用する事が望ましいとは到底いえない。個人的な主観で述べるならば、賛同者がいることに託つけて常用する者がいる以上、私は体罰を全否定する。

用いるならば懲罰としての体罰であり、また、公衆の面前を避けての方が望ましいだろう。可能であれば、避けていただきたい。

だが、集団活動をする上で必要なのは平穏である。

悪逆を働く者には懲罰が必要である。

ただしこれも、相応の懲罰、でならなくてはならない。親子間に限定するならば、多少甘い方が望ましいのかもしれない。ただしこれは恵美の育成を通じて得た私感であり、望ましいのは全住人均等に配られる量刑である。

幸い、恵美に限っていえば悪事を「これは悪い」と自覚して行動することはない。

知的好奇心の暴走もなく、楽器演奏の音量以外はそう悪くない生活を送っている。ただ幸か不幸か、一体誰に似たのやら。正義感の強い人間に育っている。

その強い正義感が暴走し、よく近所のいじめっ子と戦っている。過剰な暴力をふるったことで相手に頭を下げるのはともかく、正義感を認めつつ悪事に対する量刑を考えなければならない。

これが難しい。

殴るのは簡単であるが、それは躾けではないと考える。結果として「この行動は自らが尊いと感じる」価値観に変えねばならないのだ。そこを甘えて殴ってしまうと、「暴力を恐れる為」となる。

部分部分で見るならばそれでも問題ないのだが、全体にまで波及すると問題が生じる。

内罰的な精神を全否定するわけではない。ただ、内罰的な精神を前面に出して行動を取る人間は社会活動を円滑に行う事が難しい。

社会活動の円滑化を望むならばこそ、内罰的であっても外罰的であってもならない。

その点、恵美だ。

恵美がいじめっ子に対して暴力をもって挑んでいる。それを改められないのは、ひとえに私が甘いからであろう。「正義を敢行する為の手段」というのをよくよく教えていかなければならない。可能であれば、子供が日常生活を送る上で自ら体得してほしいというのは、理想論である。

次に、食事作法に話を戻す。

集団活動の一つとして相手を不快にさせないよう作法は必要である。これに関しては習慣化によって不作法を防ぐことができる。集団での生活を行い、やがて子供は「一時的な親切」ではなく「日常的な配慮」を覚えることとなる。

それでもまだ、子供は未熟ある。

何より、一個人だ。

失敗する事もある。何かの原因で零すこともある。そういう時は、先手を打って「こぼれた‼」などと大人が驚き、その後、大人が率先して掃除をする。すると、異常事態であると子供自身が学習し、掃除を促す。

最初は下手ながらも掃除をしようとするだろう。未熟であるならば、親が主体となって、或いは手伝ってやればいい。

無論、このような「できて当然の生活習慣」を獲得するのは困難を極める。

完全に獲得するのにまず、数年の時間を要するであろう。その間、様々な失敗をするであろうし、時には、子供自らが悪戯心を持って親心に反逆する時もあるだろう。だが諦めずに努力を続けていただきたい。

そしてその為の、裏技――と、外の世界は言うらしい――を一つ、授けたい。

子供に集団活動の模範的な行動をしつけたい、となった時。

有効な手段は「ほめる」という行動である。また、社会的な生物、社会的な行動であるというのを踏まえると「共感」も付け加えたい。

では具体的にどう褒めるか。

無論、相手をほめる時に具体性がある方が望ましい。その方が、何を獲得するか、何を努力したか、が明確になる。一方で、常に大げさな表現をするのは心身、そして親子の両方にも負担がかかる。

そこで、一つの発見がある。

「(子供が行った善良な) 行動を復唱する」

これだけでいい。

整理整頓ができたなら「片づけができた」だけで大方問題ないし、食事の作法が上手くなったなら「ちゃんと食べられた」という言葉をかければいい。

この僅かな言葉遣いだけで子供の欲求は満たされ、今後も行おうという意欲がわいてくる。社会活動を行う時、常にこういう言葉がけを続けることは不可能であろうが、大した苦労でもないと推測する。気軽に声をかけていただきたい。

さて、いよいよ余白も無くなってきた。

これにて締めの言葉を入れて終わりにしたいと思う。

子育ての難しさは筆舌に尽くしがたい。

ただ幾つか、家族兄弟諸氏に願うことがある。

一つは個々の性分を見極める事である。

人を歯車と見る業界もあるであろうし、社会活動を考えれば妥当であろう。だが、長さの違う釘があるように、それぞれに応じて使うのがより良い社会活動だ。その為に、個々の性分を理解しなければならない。まず、親である貴方がたが、よく理解してほしい。

一つは根気よくやる、という事だ。

しっかりと育つまで十五年近くある。一度でできることもあれば、根付いた後も一瞬で崩壊することもある。何をどうあっても勝手に育ってしまうのであるから油断ならないことは確かなのだが、じっくりと育つのを待つしかない。

最後は、親の背を見て育つ、という事だ。

良かれ悪かれ、子は親の生活を見て育つ。子供自身の努力あっての善人であろうし、親の努力を無碍にする子供もいるであろう。家庭に全ての原因があるとも言えない。両親祖父母乳母に原因があるとも言えない。全ては天の定める所であろう。

『目を離しても心を離してはならない』

その言葉が健康な子育てに通じるものであるとかたく信奉している。

これにて、この時分の項目を終了する。

上白沢慧音　〈終了〉

ガルゾ　露

京都

ゆっくりと、失われたはずの記憶が脳裏に近づきつつあるのだ。朝の光が澱んだ部屋の暗闇を払っていくように。澱みが喉を通り過ぎるにつれて、忘却も薄れてゆく。自動運転化された車の一群が横を通り過ぎる。音はない。歴史書にも書かれていない出来事を復誦しようとするときのように、喉の奥からかすれた声を絞り出した。誰にも聞こえない。聞かせる必要はない。もはや彼女がいたことをを証明するものは私の脳裏に焼き付けられた記憶しか存在しないのだ。識別するための名前は要らない。ブロンドの髪、黒い目。通りを行き交う多くの日本人がそうであったとしても、彼女はその中で泥水を被り、せせら笑っているであろう。そういう人間だ。そういう人間なのだ。

気を紛らわすために、少しの間、忘れようとしたこともある。しかし、その試みはいつもうまくいかない。工事現場の傍らを通り過ぎるときのように、揺れは私の心を動かし続ける。そうやって、ひと時の間、現実から目を逸らすことさえももはや私には許されない。この地において私にできることは、彼女の足跡を何度も何度も辿ることだけだ。それだけで、私は生涯にわたるささやかな安息を享受することができる。

私には二つの選択肢が用意されていた。一つはかすかに感じたわずかな幸せをかき集め続ける旅。もう一つは、自分の身を剣で突き刺しながら、感じることのない何かを探し続ける

旅。私はささやかであっても幸せでありたかったが、それはもうかなわぬ望みなのだ。だから私はこの地を出ようと思う。私はもう、ここには帰ってこないだろう。幸せを集めることはもうないのだ。

風祝　東風谷早苗の物語

彼女が諏訪を後にしたのは、外の世界での信仰が失われつつあったからだ。時代を経るにつれて、信仰というものは薄れていく。私たちが今、生きている時代でも同じことだ。信仰は時に人を救い、人を殺す。ただ、日本という国においては、それほど両極端ではなかっただろう。そこには救われる者も殺される者もいなかった。たとえ彼女が奇跡を起こせるとしても、私にとっても、他の大多数にとってもどうでもよいことだ。だから彼女は必要とされなくなり、必要とされる場所へと移ったのだ。彼女が生きていた証を残すために。彼女が死ぬときに見送られるように。彼女を見送る者はいたのであろう。ただ、そういったことを考えるときに、いつも同じようなことを考える。惜しむ者がいるということは幸せなのだろうか。それとも、一人を不幸にするという点で、当人も不幸なのだろうか。答えがどうであれ、私は惜しまれない人間でありたい。

諏訪

諏訪を訪れた時、かつての守矢神社の跡を尋ねたことがある。そこに何があったのか、もはや知る人はいない。文書の上に残された、文字を追っていくことしか私にはできなかった。信仰のよりどころは失われてしまっていた。もっとも、遅かれ早かれ、同じ結果になっていたのかもしれないが。私に信仰は必要なのだろうか。悲しみを癒す一つの手段として。救いになることもあるだろう。だが、私が拠り所にしたいのは、一つだけなのだ。そう考えると悲しさが、黒く塗りつぶされたような悲しさがこみ上げてきた。彼女はこの地を後にして、望むものを手に入れられたのだろうか。答えは返ってこなかった。

蓬莱人　藤原妹紅の物語

彼女は自らのことを人殺しであると言っていた。その言葉が文字通りの意味であるのか、それとも、別の意味を含んでいるのか、私には分からなかった。彼女はそれ以上、語らなかったから。不老不死は古来から人間の大きな望みである。その望みを手にした彼女がいかなる人生を歩んできたのか、私には分からなかった。そしてこれからいかなる生を歩むのかも。そして彼女は、多くの不老不死の者がそのように描かれないが、一人ではなかった。相手にいかなる感情を抱いていたとしても、彼女は一人ではなかったのだ。彼女は剣で身を突き刺

したとしても、肉体的にも精神的にも、癒えてしまうのだろう。私は彼女を羨ましいとは思わない。朽ちることは私の望みでもあるのだから。

幻想郷

最後に歩みを向けるのはここなのだと、最初から分かっていた。夢が現実へと変わる時、私は一人ではなくなるのだ。この地を訪れるのは初めてではない。きっと、この地は私の心を癒してくれるだろう。だけれども、私は癒されることは望んでいなかった。傷を負ったまま、血を流し続けることこそ、私の望みであった。その血が大地に染み渡るとき、私の心は少し晴れるのだ。だからここに居続けることはしない。そう呟いて、私は後ろを振り向いた。何処へといくのか、私は知らない。《了》

こうず　姫君と護り鍾馗

幻想郷において、仁平（にへい）ほどに鍾馗（しょうき）を描くのが巧みな者は他にいないだろう。

市井に分け入って雑多な道具を扱っている商店を訪ねれば、必ずと言って良いほど彼の絵を買うことができる。絵の中では唐風の装束を身にまとった強面の神が、災厄の偶像である子鬼を片手に捕らえて軽々持ち上げ、ぎろりと睨みを利かせている。仁平の鍾馗に特徴的なのは、膝を折り曲げ姿勢を傾げるように描かれていることだ。地面を這っていた鬼を捕らえ、もう一度立ち上がらんとしている瞬間を切り取った構図は、絵に描かれているものばかりではなくその後に続く動作を予感させる、躍動の雛形とでもいうべきものを備えているのである。

床の間の掛け軸であれ、長屋住まいの貧民が無造作に壁に張り出す病魔退散の図像であれ、金持ちが誇らしげにその背にする屏風であれ、仁平が描く鍾馗の勇ましい姿は貴賤を問わず人気があった。いわば彼の絵はある種の嗜好品であり、普及品でもあった。往来で通行人をつかまえて仁平の鍾馗を示せば、見たことがないという者の方が珍しいはずである。

魔除け、お守り、飾り物、種々の出版物の挿絵として彼の鍾馗はよく採用された。五月の節句が近づくと、武者人形と併せてよく売れた。絵描きというものは目が出ると出ぬとに関わらず、とにかく赤貧の境遇に置かれるものだという逸話が世の中には溢れている。けれども仁平について言うならば、そういったものとは無縁であった。彼の描く鍾馗は、彼が売れ

っ子であることによって、彼の富貴の守り神をも努めていたのである。

それでも、しかし、彼の心は貧しいままなのだ。

世間は仁平を優れた鍾馗の描き手と認めはしていたが、芸術家としてはまったく見ていなかったからである。

彼にはひとつの野心があった。

自らの追求する美の極致の表現をもって、世の中を震撼させてやろうという野心だ。

そのように書いてしまうといかにも物々しいが、要は一端の芸術家として名を成したいという欲である。願いの半分は鍾馗を描くことによってすでに叶っている。問題はもう半分なのだ。

鍾馗図では随一の才能を有する彼も、それ以外の作品はまるで売れなかった。いつも絵を買い取ってくれる版元に、時々は作風を変えた代物を売り込んでみることがある。ところが、何を見せても取りつく島なく首を横に振られてしまうのである。八坂の軍神が剣を振り上げた武者像を、街行く群衆の生活や動作、表情のすべてを緻密に詰め込んだ絵巻（パノラマ）を、浴衣を着て夕涼みに出ている上白沢女史の後姿を、……他にもたくさんだ。そのいずれにも

「だめですよ。売れません」

そう言われてしまう。さらに屈辱的なのは

「先生の鍾馗はこんなにも人気がある。売れるかどうか判らんものを刷るよりも、確実に手応えあるものを作る方が良いでしょう。ねえ?」

そんな商売人の考えで自分の芸術を酷評されることであった。版元には何の悪気もなかっただろうが、その言葉のひとつひとつが仁平にとっては悪罵も同然だ。芸術にかまけるよりも、ありふれた工業製品だけを作り続けろと命じられるようなものだからだ。これでは便利な日雇い人夫のようなものではないかと仁平は色めきたった。芸術家というよりは、単なる労働者というのと変わらない身分ではないかと。

加えて当世の幻想郷画壇においては、仁平にはまるで理解ができぬ愚物のような絵画ばかりが評価を集めている。人体のねじを外してめちゃくちゃに付け替えたような目の回るものだとか、山脈とその翼を分かつことのない巨大な鳥だとか、大小の幾何学模様を乱雑に組み合わせてみたりだとか、そういったものが。

そして、仁平にとっての世の駄作たちを褒めちぎる評論家のお歴々は、仁平をもっぱら『大衆向けの鍾馗描き』と思い、一言もその作品を評しない。一笑に付すということもしないのだ。価値がないというのが始めから解りきっているものを、いちいち大真面目に批評する者はないのである。

そのように俗世の富貴と美術上の貧困とに板挟みになっていた仁平ではあったが、先般、

ひとつの大仕事を任されたことがある。豊聡耳神子から、七尺の画布いっぱいに鍾馗を描いて欲しいと頼まれたのだ。

「これは好機」

仁平は大喜びした。

神子といえば大祀廟の神仙であり、大祀廟といえば多くの道士を弟子に抱える道術の総本山。そのような場所から承った仕事をし遂げたとなれば、自身の名声を高める助けになる。それに、仙道を学んで曇りなき眼を培った者ならば、仁平こそが真に評価に値する数少ない芸術家であると見抜いてくれるだろうと。

さっそく仁平は絵筆を執った。

七尺といえば、大抵の人の背丈よりもずっと大きい。その大きな画布の端から端を彼の筆は何度も経巡り、傑作と自負する鍾馗を完成させた。それはまさに血の通った、生きた鍾馗であった。依然どこかで写しを目にした、国芳や暁斎の手になる傑作群にもゆめ劣るまいと作者自身がうなずくほどに。

また、同時に彼はもうひとつの絵を仕上げていた。

道術の総本山とくれば……と思い、一羽の木鶏（きけい）を描いたのである。王の御前に引き出されてなお臆さず、驕りもせず、泰然として宙を見据える有徳の鶏の姿を。荘子に見られる紀悄

子の故事を引くことは、端的にいえば道術の士と相対することを考えての、彼なりの阿諛(あゆ)でもある。覚者だとか真人とは正反対の行動ではあったが、芸術家としての名誉を求めるという意味においてのみ、彼の求道は道士のそれと同じくらい真摯であったのだ。

探求の結果として完成を見た二作品を、彼は神子の上覧に供した。神子は自らが依頼した七尺の鍾馗を喜んで受け取ったものの、木鶏の図については、その瑞々しい凛気に溢れた龍顔(*)をたちまち曇らせてしまった。そして何かのざわめきに耳をそばだてる仕草を見せ、

「教養深い所を示したかったのだろうが、この神子に阿諛や追従、ごますりは通じんよ。欲深い、だが実に愛(う)い願いを持つ男め。きみの芸術はきみ自身の誇りだけでは成り立たぬものだ。きみの画題となってくれるような、優れた相手を探すと良い」

と言って、こちらに突き返してきたのだった。

半ば呆れたように放たれた言葉に、仁平は全身を打たれてしまった。木鶏を描くための参考として生きた鶏を何羽か買い求め、羽をむしり肉をちぎって身体の構造を調べるという血生臭い努力が、口にしてもいないのに見透かされたと思ったからだ。

人体を描くには、人体の構造について知らなければならないだろう。ある西洋の大画家は、屍の腑(*)分けの経験から人を描く術を高めたという。仁平が鶏を解体したこと自体は誰にも咎められる筋合いはない。むしろ、鶏を犠牲にしてまで描いた自身の傑作が突き返され、故に

鶏を殺したことが単なる罪悪に転化してしまうのではないかという、いかにも俗物の苦悩が彼を一瞬のうちに苛んだ。

「優れた相手とは如何に？」

思わず訊ねた仁平に、神子は答えた。

「仁平の思う美の極致を持つ者だよ。そう称する他にないだろう。きみが描きたいと真に願う者に巡り合えば、天佑を得たごとくそれが解る。否、その者に出会うことこそが天佑なのだ」

いかにも仙道の徒らしい曖昧な答えである。これには頭を抱えさせられた。欲望を叶えるための明確な手段を知りはしたが、肝心の美の極致とは何なのか。それは仁平も幾度となく夢想したが、未だ結論に至っていないものだった。

けれどもようやく運が巡ってきたのか、彼の苦悩は解決の気配を見せた。神子が手に入れた七尺の鍾馗図を羨ましがって、自らも仁平に依頼する者が現れたのである。

迷いの竹林を通ってその者の住む邸宅に向かう途中、道案内の白髪の少女には「あの女に喰われるんじゃないぞ」と散々に脅かされる羽目になった。彼女は、仁平がこれから会うことになる依頼人と浅からぬ仲であることをうかがわせた。さて、では仁平は人喰いの妖物に自ら喰われに行くのだろうか。少女は真意を明かさぬままでいたけれど、ただ「覚えとくと

良いよ。綺麗なものは、醜いものと同じくらい、化け物なんだから」とのみ答えるのだ。

やがて竹林を抜けると、目的地である依頼人の住まいへと到着した。端が霞んで見えぬほど長い長い築地塀に囲まれた屋敷の雄大さは、住む者の威勢のほどをひしひしと感じさせる。仁平は案内の少女が帰るのを見届けてから、大声で門に呼びかけた。すると白い水干を身に着けた男装の童女の群れが幾人か現れ、客人であるところの仁平を我先にと門の内側へと引っ張っていくのである。まるで若い野兎の群れを相手にしているようだ。

門を越えて眼にしたものに、仁平は驚愕した。

邸宅の大廊下はいずれの場所を通っても必ず中庭が見えるように設計されているのだが、その中庭に優曇華の花が咲いている。稀代の瑞兆と名高い聖花である。仁平はそれを、古今の事物を書き記したある地誌の中の、簡単な挿絵でしか見たことがない。古ぼけてかび臭いその地誌は、三千年に一度しか開花せぬというこの聖花の記述がただの作り話ではないかと読者に疑わせてしまうような代物だったが、その認識は改めざるを得なかった。優曇華の花は、地面や岩や木、葉の上を問わずその根を下ろし、小さく可憐な白い花弁で身を飾っている。しかもそれがひとつ、ふたつではきかず、幾百幾千も群生して、明確な境なき小花壇を成しているのだった。この庭にあっては、優曇華を咲かせる三千年の一瞬がいつまでも留め置かれているかのように。

「ここでは常に優曇華の花が咲いているのです」と、童女たちの長らしい少女が言った。

「私の名でもあります」。そう答えた彼女はどことなく誇らしげであったが、仁平はほとんど気づいていなかった。彼は優曇華のすぐ脇にある玻璃めいて美しい池に眼を落とし、光を呑んでは瑠璃の輝きを跳ね返す鯉の鱗ばかりを見つめていた。

「あなたがこれからお会いになる方は」と、聖花と同じ名の優曇華が改めて声を張る。

「畏(※)き辺りと関わりを持ったことさえもある貴いお方なのです。直答は許しを得ない限り許されません。そば近くに家司(※けいし)の役を受け持つ八意様という女性(にょしょう)が控えておりますので、彼女を介してお話を賜るように」とのことであった。仁平の緊張は高まった。絵仕事の打ち合わせというよりも、もはや貴人との謁見である。

果たして依頼人は御簾(みす)の向こうにその素顔を隠していた。優曇華の教えてくれた通りだ。

謁見の場には依頼人と家司の八意、それに、万が一にも無礼なきようひたすら縮こまって頭を下げ、額で床を削っている仁平の三人しかいない。御簾の向こうからかすかに声が聞こえてきた。鈴の転がるように清らかな響きだが、意味を取れるほどはっきりとはしていない。八意はそれをしかと聞き取り、立派に編み込んだ銀色の髪をゆったりと振るようにして、仁平へと顔を向けた。

「仁平殿。姫様は、あなたに鍾馗図を描くよう御所望です。幻想郷において他に類を見ない、

それこそ大祀廟に納めた七尺の鍾馗などより、はるかに優れた鍾馗を」

特段の驚きはない。相手が貴人というだけで、鍾馗描きの仁平にとってはありふれた依頼なのだから。

とはいえ、相手が相手である。ひざまずく仁平は媚び媚びに揉み手こそしなかったけれども、口の端に卑屈っぽい笑みを浮かべて精一杯の愛嬌を繕った。貴人、金持ちの類は気位が高い。どこでへそを曲げられるか判ったものではない。豊聡耳神子が、何かの不可思議な力で仁平の阿諛を見抜いたように。

「家司の八意様に申し上げます。ご依頼をお断りする理由はございませぬ。喜んで承ります」

その意は直ぐさま八意を通して御簾の向こうの人物――姫様と呼ばれた者――へと伝えられた。ほゥ、と、その姫が息を吐いたのが仁平にも感じられた。打ち合わせはなお続き、依頼の詳細が明かされた。

ひとつ、製作の期間は半年とし、その後に出来上がった絵を一日の遅延もなく納めるべきこと。

ひとつ、仁平の全身全霊を注ぎ込み、悪鬼怨霊もその評判を耳にしただけで震えあがるような、世に類なき傑作を作り出すこと。

ひとつ、報酬については――……。

ここで話が少し行き詰まった。要求されているのは全身全霊を賭けた傑作である。ならば、それに見合って少しばかり欲をかいてみても良いのかもしれない。何せ相手は巨大な邸宅に住まう貴人なのだ。下々に施しをすることで名を高める気概はあろう。無礼と解っていながらも、ちらと視線を上げる仁平である。真剣さを演ずるつもりであったからだ。そのとき目の端に御簾の影が引っ掛かり、向こうにある者の姿がかすかに見えた。

思わず息を呑んでしまった。決して明瞭とは言えない少女の輪郭のただなかに、清冽な光がきらりと芽吹き、こちらを見下ろしているのが解ったからだ。

途端に仁平は強い羞恥に駆られた。無様と思われるのも厭わずに、すばやく頭を下げていた。御簾の向こうの少女からは何の意思も感じられなかった。よくできた置き物を相手にするようだ。けれども美しいと思った。仁平が見た清冽な光とは、おそらく少女の眼の輝き。そこに佇んでいるだけで美しいのだと解るものでも、ときには恐怖を起こさせる。その理由が何なのかまでは気づけなかった。豊聡耳神子と相対したときのように、自身の欲を見透かされたわけでもないというのに。

身体中から汗が噴き出す気持ち悪さの中で、それでも確信を抱いた。神子の言葉を思い出したのだ。自分が真に描くべきものに出会ったとき、天佑としてそれが解ると。ならば、今

がそのときだ。少女の眼の輝きに怯んでしまったのは、この好機を逃せば二度目はないと直感したからなのであろう。

気がつくと、彼は家司の八意へと声の限りに叫んでいた。

「金も、物も、報酬としては私は何も要りませぬ。ただひとつ願いを叶えてもらえるのならば――この度の御依頼人である蓬莱山輝夜さまの御尊顔を、御簾を上げて、拝見させて頂くことでございます」

かくして仁平は、自身畢生の大作になるであろう鍾馗図の制作へと取りかかった。

まず彼がしたのは、鍾馗の大元（モデル）となるような者を探すことである。唐の玄宗が夢に見たという神の姿の実際は、後代を生きる者にとっては確かめようがない。しかし悪鬼怨霊を退けるとして永年の信仰を受けてきた神の図を、まったくの空想で描くというのは甚だ蛮勇といえた。ましてや生涯を懸けての作を手掛けよと命ぜられたのだから。仁平は方々へと眼を光らせ、自身の筆に掛けるにふさわしい人物がいないかどうかを探し求めた。

鳶職人、武術の師範、船頭、鍛冶屋……いかにも悪鬼を抑え込むにふさわしいような、隆々と盛り上がった立派な筋骨の男たちは街を歩けば何人も目に入りはしたが、いずれもふ

さわしくないように思える。あくまで人の世に出す代物を描くなら、これと思う優れた体躯の職人や武芸者を見つけ出し、彼らの姿を基にして作品を手掛けるのが良いのだろう。だがこの仕事で相対するのは、その邸宅の中に須臾を永遠と名づけて飼っているにも等しい姫君なのである。優曇華の聖花を幾重にも植え愛でる、尋常の世の者ではない貴人だ。そのような者に捧げる絵を描くのだから、神秘ならざる者の姿を写し取り、以てこれを神秘と称するのは愚行である。

こんなことなら、どのような姿形の鍾馗を輝夜が所望しているのか、もっと詳細に尋ねるべきであった。芸道の心得なき人は、天才の至芸とて花と同じであるということを知らぬ。土や水や肥やしがなければ花が美しく咲かないように、ただ傑作を作れと言われても難しい。二度とは訪れないであろう貴人との関わりを失いたくないがために、相手方の曖昧な要求を諾々と呑んでしまった己がばかだった。

適当な店に入って飯を食った後、仁平は自身の画房へ戻ろうと、とぼとぼ歩き始めた。

大勢の悲鳴が聞こえてきたのは、そのときだ。

辺りは繁華街にもほど近いせいか、派手な着物に袖を通した男女が脂粉の香りを漂わせながら歩いていたり、酔客が昼間から道端でへたり込んだりしているのを見かけることがある。そんな雅と猥の混じった街の中で、二人の男が取っ組み合いの大喧嘩をしているのだ。一方

は痩身ながらよく日に焼けた若い男だった。鋭い眼光で相手を睨み据え罵言を吠え立てる様は、一見して堅気の人間でないのを予感させる。一人目より大きな体躯をしたもう一人の男は見せつけるように着物の袖をまくっており、その腕には刺青にも似た青黒い鱗がびっしりと並んでいた。加えて、腰の辺りからは蜥蜴じみた尻尾がその先端を躍らせている。いったい何が原因か知れぬが、人間と妖怪、それもやくざ者同士の喧嘩。二人の男は互いを引きずり回し押し倒し、殴り蹴られ、周りの店先に転がり込んでは棚を引き倒し、地面に落ちた商品を投げつけ、騒ぎを拡大させていく。

巻き込まれる前にさっさと逃げようと野次馬たちの間を泳ぎ回っていた仁平だったが、しかし、ここでがけぬ幸運に恵まれたのである。

人々の悲鳴を切り裂いて、今度は二人の男の悲鳴が耳をつんざく。驚いて振り返ると、今の今まで殴り合っていた人間の男と妖怪の男が、腰を抜かして地面にへたり込んでいる。彼らはただ一人の少女に威圧され、そうなっていたのだ。銀の髪をした少女はその手に長短二振りの刀を握り、それぞれの切っ先を男たちへと向けている。やがて彼らはさっきまで死力を尽くす勢いで殴り合っていたにも関わらず、両方ともすごすごと逃げ去ってしまった。少女はしばらくその様子を見送っていたものの、やがて刀を鞘に納めると地面に屈みこむ。彼女の細指は、潰れた練りきり菓子の上をさまよっていた。あの男たちの喧嘩に巻き込まれ、

買ったばかりの大事な菓子を踏み潰されてしまったのだろう。金魚をかたどっていたはずの菓子は、今は鰭も尻尾も無残にちぎれ、傷口から餡子を吐き散らしているのだった。

彼女が頬に赤みを宿していたのは、大事な菓子を潰された怒りか、それとも大勢の見ている前で武器を振りかざしたことへの恥ずかしさだろうか。いずれにもせよ観衆からはまばらな拍手が贈られる。一瞬にして喧嘩騒ぎを治めて見せた、彼女の正義を称えての。

急いでその場から立ち去ろうとする少女を、仁平は必死に追った。これもまた天佑だと彼は思った。鍾馗を描くのに必要なのは、その姿の参考になるべき筋骨隆々の大男ではない。伝えられる髭面の神の姿とは似ても似つかなくとも、正義を行うその佇まいこそが真に鍾馗の本質を捉えているのだ。

仁平の呼びかけに少女は振り向いた。だめになってしまった菓子の代わりを買ってやるからと訴えたのだ。名前を問うと、彼女は魂魄妖夢であると答えた。

画題とすべき正義の姿を垣間見たことで、仁平の鍾馗は完成を見た。

半年もの錬成を経てついに輝夜の面前にもたらされたそれは、御簾の向こうの姫君も、家司として仕える八意をも、感嘆させるに十分な作品だった。

大きさは三尺に少し余る程度。かつて大祀廟に奉られたものより一回りも二回りも小兵である。しかしその主題においては、むしろ仁平自身の思想がさらによく顕れていたと言っても良い。どっしりと腰を落として両脚に力を込めた鍾馗は、一方の手を差し伸ばして悪鬼の進行を制止せんと試みつつ、もう一方の手ではわが背に負った剣を油断なく抜き放つ構えだった。特徴的なのは、鍾馗が制すべき悪鬼の姿がどこにも描かれていないことで、爛々と義憤に燃える眼が果たして一個の巨悪とのみ対峙しているのか、あるいは千軍万馬の邪悪の群れに挑まんと敵を睥睨しているのか、どちらとも取れる曖昧な筆致ではあった。その曖昧さこそが、いかなる悪鬼怨霊をも迎え撃たんとする気概と正義の象徴として、仁平の鍾馗を幻想郷に無二の作品たらしめていたのである。

「姫様は、仁平殿に問うておられます。画業の真髄とは何であるかと」

輝夜も八意もしばし押し黙り、目の前に示されたこの傑作に対して息を呑むばかりであったが、やがて姫が家司を通して語り始めた。仁平は答えた。

「絵とは何も、目に映ったそれそのものを描き取るばかりではございませぬ。むしろ、ものを見て心の中に湧き上がった事々をこそ正しく描かねばならぬのです。つまり、人の心そのもの、思いそのものを描いております。私はこの鍾馗を描くに、一人の力自慢や武辺者をも参考には致しませんでした。それらは例え強くとも、むくつけき粗野の者に過ぎませぬ。そ

れならば、身内に正義を宿した者の方がよりふさわしいのです。その者が華奢な少女であってもです」

だからこそ傑作は人の心を動かす。その作品を見た者が、自分の思いまでも写し取られて返されたように畏れるからだ。それがまさに、鍾馗という神の姿とは似ても似つかぬはずの、魂魄妖夢が二刀を振りかざす姿を見た瞬間に到達した、彼なりの真実であった。

御簾の向こうで、輝夜がうなずく気配があった。

彼女はまた永琳に何事かを伝えると、深い息とともに威儀を正したようである。

「この鍾馗図を、姫様はお気に召したとのことです。わが宝のひとつとしたいと」

「は、は。ありがたき幸せ」

「では次に。報酬を支払わねばなりませぬ。姫様の御顔をあなたにお見せしなければ」

仁平の胸の高鳴りがいや増した。謹んで賜りまする、という意味のことを言おうとしたが、舌がもつれて言葉にならない。八意は傍らに控えていた従者に、姫君の姿を覆い隠している御簾を上げるよう命じた。彼我の空間を隔てていた帳はゆっくりと取り払われ、幾度焦がれたか知れない美の題材がついに現れようとしていた。

「仁平、此度（こたび）のことはご苦労でした。この帳を上げる程度のことを報酬に望むなど、無欲な男もいたものと思うわ」

着物の柄も、黒い髪の艶も、肌の白さも。蓬莱山輝夜のそのすべてが露わになった。仁平は確かに――それを見た。見てしまったのだ。

仁平が輝夜の顔を見て何を思ったのか。それを知る者は一人としていない。

仁平自身が自分の見たものを誰にも語らなかったからである。姫君の顔が本当に美しかったのか、それとも醜かったのか。喜んでいたか、悲しんでいたか。あるいは善であり人であるか、悪であり魔であるかを。

真相を誰も知らないながらに、詳らかになった事実だけがその一端を我々へと教えてくれる。天狗たちの新聞、あるいは人の噂に上る幾つかの話では、仁平が蓬莱山輝夜へと献上した鍾馗図は、その日のうちに紙の上の絵がどろどろに溶けてしまったというのである。奇妙な事態であった。塗り重ねられた塗料は完全に乾ききっていたにも関わらず、まるで絵に描かれた正義の神が、自死の手段として溶けることを選んだかのようなのだ。天狗は、そのいささか煽情的な筆致の記事の中で藤原妹紅の言を紹介している。

「仁平の描いた鍾馗が犠牲になって、輝夜から彼を護ってくれたのさ」

仁平はその後も絵描きを続けた。

ただし、以前のように鍾馗図にのみ特別の才能を有する偏屈画家ではなくなった。鍾馗を描くことは、彼の修行の道程でしかなかったのだ。仁平は画業の真理に到達し、そして本当の天才となった。輝夜の顔をその眼にしたことがすべてのきっかけだった。いま彼は自ら畢生の大作と恃む作品に取りかかっている。画題は、あの蓬莱山輝夜である。もう彼は鍾馗図を書くことなど頭の端にも残っていなかった。手元の金は減り生活は貧しくなった。今では次回作を描いてくれることを健気に待ち望んでいる、版元からの援助を日々の糧にしているばかりだ。

彼の画房を尋ねる者は、誰でも製作中の代物に圧倒される。

何しろ縦が二尺余り、横が一尺半ほどの長方形の画布に描きこまれているのは、首のない少女の姿なのだ。人の胴と首が切断されているのを描いているのではない。絵の中心に配されているのは少女の首から下の姿だけで、本来あるべき顔の部分については、画布の途切れと共に描かれずに終わっているのである。つまり、画布の上端に少女の首の中ほどまでが描かれ、そのさらに上に顔があるであろうことを見る者に想像させているだけである。

絵の中の少女は、雑多といえるまでに咲き乱れる色彩の渦に取り巻かれている。その渦

自体は明瞭に何かを具象しているわけではない。ただ絵筆に塗料を含ませ、無秩序に叩きつけて色を乗せただけだ。少なくとも、ただ見ただけならそのように感じ取れる。明暗と濃淡を網羅した豊かな色彩の渦の中に、顔のない少女が秩序の代表者のようにして鎮座している。そんな絵であった。

解釈についてはいろいろな説が唱えられた。あえて少女自身の顔を描くことなく、かつ抽象化して描かれた花を周囲に配置することで、地上の文物で測れぬ少女の崇高な美しさを表現しているという者もある。あるいはこの少女とは架空の存在であり、まとまりのない心象の海原において、唯一の確固たる美として中枢に根づいた作者自身の理想であるとみなす向きもある。どうであれこの『姫君』は一見して不可解なものを――端的にいえば不気味さと恐怖とを見る者に催させる。それは確かなことである。託された意図を云々する以前に、首のない人間の像が華やかに飾られている様はひたすら異様であった。そして、この絵を描いている間というもの、仁平は人の持つあらゆる苦痛を忘れたように楽しげな顔をしている。だが、それ以外の瞬間はといえば、魂とか心をどこかに置き忘れてきたかと問いたくなるほど、ぼうっと呆けている。絵筆を握っている間だけ、束の間、仁平は自分が人であることを思い出すのである。

77 姫君と護り鍾馗

世の人が仁平の発狂を半ば確信し始めた頃、あの蓬莱山輝夜だけは、しかし冷徹なのだった。彼女はかつての鍾馗描きの男の噂を聞いて、こんな意味のことを言ったという。

「絵に世界のすべてを表そうとしている時点で失敗作ね。それは、すべてを描こうとするあまり何も描けていないに等しい。芸術の美とは、本質に対してそれを網羅するのではなく、そこからより純粋に行われた抽出だもの。その妙手の次第こそが天才。つまり、心の中の感動を写実的に描くの」

彼女がそれを語るとき、眼には常に一枚の絵を愛おしんでいた。

絵の具がどろどろに溶け落ちて何が描かれていたのか今では判別も困難になった、一枚の鍾馗図を。《了》

海沢海綿　さかしま

――執着は害悪である。

固執は魂にへばりつく垢のようなものだ。

拘泥は理性を飲み尽くす汚泥そのものだ。

紅い館、その一角にある図書室。部屋の全てを本で埋め尽くした、紙の腐る匂いで覆われた、陽の帳も届かないその場所の、片隅にある安楽椅子に背中を預けながら、パチュリー・ノーレッジは、ただ虚空を見ていた。

――目の前に広がる情景。何冊あるのか、何種類の言語で綴られているのか、何について記されているのか、その一切を覚えている。故に、それは執着である。執着とは、魂の固着である。理性とはいつだって、処女の紙に記されなければならない。既に記述のある紙に、新たなる詩文を描く事は出来ない。ましてや、バラバラになった辞書をかき集めるような、そんな虚業を繰り返す事に他ならない。故に、固執は罪であり、執心は鎖である。

緩やかに、息を吐く。

「それで？」

魔女の前にある机に載せられたカップを手に取ると、アリス・マーガトロイドはその中身を静かに口にした。

「私に何の用なの？」

「私はね、気が付いたのだよ、人形遣い」

厭に持って回った言い方をすると思ってはいても、頬の一動にも出さず、カップの中に満ちた紅茶をただ飲み下す。

「執着と言うものは、理性にとって贅肉にしかならない」

歌劇の一幕を演じてでもいるかのように、魔女は右手を軽く掲げながら、低くしわがれた声で囁いた。痩せた白樺の枝にも似た指先には、指の節が嫌に目立っている。かぐや姫の珠の枝をなんとなく思い出してた。

「それでは、何も知り得ないと言う事だよ」

「そう」

「こんな謎かけを知っているかね？　ある壺があって、石と砂と水をその中に詰めなければならない。どういった順番で入れるべきか、と言う話だ」

「先に石を入れて、次に砂を、最後に水を、だったかしら？」

「そう。先に砂と水を入れてしまえば、石はその中に入れる事は出来ない。壺の中と同じ体積になるように、三分の一ずつになるようにしてあっても、砂と水を先にいれた段階で、石はその形に変わりはしないから、全てを入れ切る事は出来ない」

「それが執着？」

からからと魔女が笑う。
「やはり、話が通じるのが早いな、人形遣い」
「ありがとう。でも、分からないわ」
「何が？」
「その話を、私が此処で聞いている意味が、よ」
「そう。そうだね。その通りだ。私は、何も語っていないのだから、知る由もないだろう」
「ええ、理解が早くて、助かるわ」
きぃと椅子が啼く。
「しかし、人は何が執着なのか、何が信念なのかを分離することが出来ない。人の魂は泥水で出来ている訳でもなく、砂糖水で出来ている訳でもなく、真鍮の様に綯い交じりになっているものだ」
いつもより、紅茶の味が渋い。茶葉と湯の分量が適切ではないのだろう。抽出時間にも問題がある。メイド長が淹れたとは思えず、いつも視界の隅にいる使い魔の姿もない。否、この屋敷は、こんなにも静かだっただろうか。
「けれど、理性だけは正確だ。それだけは、唯一何なのかを確立できる。明瞭に、明確に、明示することが出来る」

魔女は、先ほどからこちらを見ない。見ているのは、ただ図書館の、虚空ばかりを見つめていた。カップの中へと、何杯目かの紅茶を注ぐ。

「けれど、何が理性であるのか、何が執着であるのかを明確に切り分けなければならない」

「明確なものではないの？」

「獣の肉と骨は明確な差異はあるが、その境目で切り分けなければ、永遠に固着したままだよ、人形遣い。故に、肉を焼き払い、純然たる骨にしなければならないのだよ」

「なるほど？」

「だからね、私は、再現する事にしたのだ」

「へぇ、何を？」

「私と、私の世界をだよ。全てを正確に、再現された私の庭の中で、私は理性だけを掬い上げる。そうする事で、私は執着を捨てられる」

「執着を捨てて、その先に何を見るの？」

「私は、知るために、長く生きているのだよ？」

からからと、笑う。

「私は、そう、知るばかりだ。それこそが知性であり、理性であり、叡知である。そこに感性は要らない、感情は要らない、信念も理念も必要ない。ただ知ってさえいればいい」

「それは、良く分かったわ。それで、貴方が私をここに呼んだ理由はさっぱりだけども」
「そう。そうだったね」
きぃと安楽椅子から、ゆっくりと立ち上がる。
「人形遣い、君に見て欲しいものがあってね」
「見るだけでいいの？」
「ああ、そうか。見るだけでは駄目だ。一つ、意見を伺おうと思ってね」
「意見？」
魔女の歩くに合わせて、アリスは立ち上がり、ついていく。
「そう、まず見て貰う方が先だ。否、説明するのが先だろうか？」
振り向かずに、そう言葉を捨てていた。

つまり、世界の再現とはミニチュアの構築と言っていい。では、世界のミニチュアとは何か。まず必要なのは、土地の再現。ただ考慮するべきは、幻想郷全体なのか、この紅魔館なのか、この図書館そのものか。そもそも、世界の認識とは何かという話である。魔術の原理からすれば、四元素、五行、ヤルダバオトの意志を汲み取るべきか、テトラグラマトンの意

図を把握するべきか。そもそも、神の定義を何処に置こうか。

故に、私は最初にオルガンを作り上げた。神を知るには、神を讃える歌の分析が必要だと言う見解だった。故に自動演奏のオルガン装置を前にし、あらゆる讃美歌を演奏させ、それを部屋に満たす事で、見いだせるものが何かを考える。けれど、そこで気がついた。あらゆる歌の中に、私は一切の神を知ることが出来なかったのだ。原因は、直ぐに明確になった。そもそも私の中に神と言う装置の概念がなかったのである。否、概念がないと言うのは適当ではない。世界の構造は原初より神の構築から始めるべきである。故に、神を最初に設定する事で世界を認識させられる。だが、それは地域、国境、人種などの、境界によって細分化されていく。魔術の基本は、世界への干渉である。川の流れに掉さすのと同じ、風の中に火を灯すのと同じ。つまり、神と言うものを認識している。だが、世界を構築するのは、神と言うイコンと敬拝する感情に基づく。そう、神を再現しても、敬拝する意思がなければ、乃至は叛逆する意思が必要である。反発する意思。神を殺す意志。

ああ、そうか。

つまり、神を明らかにする場合、神以外の部分を表現する事で知り得るとも言える。なれば、うってつけのものがあった。敬愛するべき悪魔の娘がいたじゃないか。彼女が讃美歌を聞くことで、どう反応するのか。ああ、だが、果たして、彼女が対峙する神聖存在と世界を

今構築している装置とオルガンが響かせるそれが、完全に同一であるかどうか。その証明から始める必要がある。そうなると、悪魔の娘が何であるかを考えなければならない。そもそも、悪魔の娘、永遠に紅い月とは何であるのか。吸血鬼と言う種族は何であるのか。そもそも、彼女自身がどう構築されているのかを知らなければならない。だとすれば、彼女自身を解体し、再構築する必要がある。彼女と彼女の妹を考える。性質も持っている異能も異なり、容姿にも相違がある。けれど、同一の吸血鬼である。同種族でありながらも、個性が二つ以上存在していると言う事、即ち三つ以上、四つ以上存在している可能性もまた示唆している。それが故に、二つの差異と共通項を割り出さなければならない。

ならば。

吸血鬼たちへの尋問と解体は大凡三百二十六時間四十五分に及んだ。それで大まかには理解出来たが、再生を行わなければ完全とは言えないだろう。彼女たちの体重の差異、身長の差異、身体の差異、精神性の差異、何を恐怖するのか、何を喜ぶのか、何を悲しむのか、何を憤るのか。思い浮かぶ限りの事を全て行った。最終的な結論として、彼女たちもまた、脳髄によって世界を認識している事と、魂と脳髄とは別の機構として存在している事。故に、

魂が不在の脳髄を解体し、分析する事で、ある程度の思考パターンは理解出来た。後は魂によって起動した脳髄が表す信号操作だけが分かればいい。

魂は分離し、別に管理してある。脳神経の作用は、実はオルガン装置に組み込むことが出来る。一つの信号を一つの鍵に宛がう事で、その組み合わせと組み換えにより、魂を再現する事が出来る。故に魂を解体する必要と、オルガンに組み込むための、脳髄の神経信号の回路図が必要な訳だ。それを作るには情報自体は充分であった。故に、作業時間自体はかかったが、思考時間が限りなく短くて済むため、思っているよりは早く終わったと言える。

ああ、そうか。

神の再現実験を行っているのである。

なれば、彼女たちの魂の再現と神の演奏を同時に行う事で世界の再現に繋がるのではないだろうか。となれば、鍵盤の配置と彼女たち自身の操作を別に分けなければならない。それは、回路図の作成よりもずっと面倒であった。シーケンスの釣り合いを取らなければならない。当てのないパズルを解いているような気分だった。途中まで組み上げた時に、そこで私は自分自身が執着に囚われている事に気づく。そう、別に同時再生などしなくていいのである。別にまた作ればいい。別個で作った後で、接続すればいいのだ。一つに組み上げるという執念。世界を一つきりの装置で構築しようと言う傲慢さが、こうして、理性的な問題の解

決を拒んでいたのだ。そう、やはり執着は殺さなければならない。あれは、理性にとって、知性にとって、純然たる叡知にとって害悪でしかないのだ。

結局、オルガンは六台に及んだ。二つの魂にとっての共通して見出している神への感情と別に感じているそれを同時に再現し、神の存在を積分解析することが出来る。私はそう考えたのだ。そして、同時に演奏を実施し、神を見出そうとした。けれど、結果から言えば、それは徒労に終わった。否、完全なる無駄ではないと言う人もいるだろう。だが、完全なる再現が出来なければ、何の意味もないのだ。確かに二人の吸血鬼にとっての神を見出す事は出来た。だが、それを観測した、神を認識するもの、神を認識しないもののスペクトルが必要なのだ。そう、全ての視点によって、神を再現しなければならない。そうなれば、もっと、サンプルケースが必要であろう。

次に私は、門番とメイド長、使い魔とゴブリン、妖精メイドを解体した。だが、ここで一つ気が付いたのは、妖精と言うものはあくまでも蝋燭の炎と同義で、所詮は世界の揺らぎそのものでしかないのである。そうだとするなら、確かに妖精がそこに存在している事で世界の概略を見る事は出来るが、オルガン装置にする事は出来ない。そう、オルガン装置の多重奏によって、聞くことが出来る音の輪郭そのものが妖精と言う現象なのだ。そうなれば、妖精の解体はあくまでも輪郭を追うだけでしかなく、無意義ではないが、そこまでの価値はな

いと判断できる。後で照合するために必要ではあるが、構築そのものには不要だ。参照係数としては必要だろうか。そこは演算の結果、不要だと言う結論が出ている。

オルガンの台数は二十四台に及んだ。結果としては、やはり無意味であった。そう、館にいる存在は、あくまでも一部でしかない。この郷を、世界を構築するためには、何処までが必要か。確かに、全てを解体すれば、事は足りるだろう。だが、そこまでする必要があるだろうか。私は再度計算を行った。最低限にして、最大限に世界を再生することが出来る魂の数はどれほどであるのか。計算結果としては、後十二人ほどである。だが、条件があった。魔法が使える事、魔法が使えない事、怪異を認識している事、怪異を認識していない事。諸々の条件を揃えなければならない。複合的な解析でなければならない。それに実際に解体していかなければ分からない事もあるのは、今までの経験上理解している。

霧雨魔理沙が来館したのは丁度算出が終わって二日後の事であった。

彼女はしきりと館に誰もいない事をいぶかしんでいたが、その理由は良く分からない。ただ、余りにしつこく聞くので、全員を解体した事、解体しオルガンに組み込んである事、そして、彼女自身も解体する事を告げた。計算上、彼女の視点はとても重要である。魔術を理解してはいても、神を認識していない。神の名を知ってはいても、神そのものへの畏怖はない。とても、重要な存在である。

彼女は理解出来なかったようだ。
友人たち、この屋敷にいる人間は全員理解してくれたのに。
彼女はオルガンとして再度再現される事を酷く恐怖していた。
何も変わらないのに、だ。
その執着。肉体である事、今持っている肉体そのものへの執着が、彼女から知性を奪っているのだ。酷く嘆かわしく、そして醜いと思った。だが、友人である吸血鬼は言っていた。人間は、自分自身の姿と言うのに酷く固執するものだと。吸血鬼にとって、魂の在り方そのものは自分自身の死と直結するため、生理的な嫌悪はあるが、肉体の損壊や変質など、何を疎ましく思う必要があると、そう笑っていた。ましてや、オルガンは永遠である。補修し続ければ、永遠にそこにあり続けるのだ。新陳代謝よりもずっと有能である。ならばと快く解体されるに至ったと言うのに。メイド長でさえだ。門番に至っては、自ら腹を裂いても見せたのだ。筋肉のつき方、存在の在り方を再現するのに、私の解体方法が不完全であると見抜いて、自らの体で実践をし、私に学習させてくれたのだ。とてもありがたい話であり、誇り高い話である。その事を、きちんと彼女には説明を行った。故に、何も恐れる必要などないのだと再三告げたのに、彼女は恐怖と嫌悪感を露わにして、私を罵った。別段罵られたところで何を感じる事もないのだが、このまま拒絶されては、肝心な作業が滞ってしまう。

なので、予め薬を盛っておいた。

ちゃんと許可を取って、解体したかった。

だが、メイド長にもこれは言われていた。恐らく、人間は拒むだろうと。メイド長も人間ではないのかと言ったのだが、そもそも価値基準が友人である吸血鬼が最重要事項となっている為、何の抵抗もなかったのだけれど。理解が難しい。霧雨魔理沙という人間は。故に、知的好奇心が湧いた事は否定しない。そして、それが如何に卑しい感情であるのかも理解していた。喜びによって解体してはならない。それは、執着である。故に、一層慎重に解体を行った。何を喜ぶのか、何が胎の中に詰まっているのか、何に彼女が固執しているのか。もっと言えば、身体的な存在固定を望むと言う事は、何処までを自分自身と認識しているのかを理解する必要があった。故に、指先から一サウ単位で刻んでいき、それを目の前に並べ、積み上げていくことで彼女自身と私両方が自分自身が何処から分別されるのかを相互に認識しあう必要がある。果たして何処からが分離された肉片で、何処までが自分自身であるのかを、彼女自身が思い知り、そして、私自身が思い知る必要がる。無論その過程で、肉体が壊死してはならない為、魔法による麻酔と防腐を完全にした。これは門番から肉体の構造について学習していたお蔭で、完全な処置が出来たのだ。だが、問題が発生した。どうにも、霧雨魔理沙が狂ったのである。肉体の三分の一を削り取り、目の前で再構築している時に、意

識が拡散し始めたのである。要するに、何処までが自分で、何処からが自分ではないのかを考えた瞬間に、目の前で削られた自分の肉体が齎す実感を伴ってしまい、自我が崩壊してしまったのだった。そうなると、大変困る。

なので、今までの脳髄の解体を行った経験により、一度開頭手術を行い、脳機能を元に戻す事で、再度認識するように処置を行った。これは三回ほど巧くいっていた。そう、逆を言うと霧雨魔理沙は四回狂ったのだ。それも、元に戻す度に、次の狂気のピークが短くなっていったのである。四度目など、修復した二時間後には既に狂ってしまっていた。人間の精神はこんなにも脆弱なのか、それとも肉体と言うものを彼女が、如何に重要視しているのかと私は深く落胆せざるを得なかった。なんという存在であろう。これが、本当に高度な知性を持った存在の頂点であると言うのか。人間とは、なんと愚かなものであるのか。

だが、これでは理解が出来ない。

霧雨魔理沙という存在は貴重なのだ。

どうあっても、狂ってもらっては困る。

だが、肉体の有無を認識してもらわなければ困るが、肉体がなければ狂ってしまうのだ。矛盾している。だが、結論はそうでしかない。だが、逆を言うと肉体がないと狂ってしまうという現象を理解する事は出来た。ある意味では、有意義であるとはいえる。

そこを元として、ある程度の回路図を引くことは出来た。それを元に、また解体時の経験を元に他の人間の解体を行った。里の人間、家族を一つ解体したのである。年齢別の、同じ環境に住んでいる人間のサンプルが必要であった為、家族単位で行うのが妥当であった。

これも、狂気にすぐに至った。

霧雨魔理沙のケースよりもずっと早い時間であった。母親が一番長く保っていて、子供がその次であった。父親が一番最初に使い物にならなくなった。どうやら、男は狂い易いらしい。別に性別で精神の差異があるのは理解したが、どうやら男の方が現状を維持する事に固執する傾向にあるのらしい。一つ学習する結果にはなったが、世界の再現にはいまだに至らない。それに、二度の施術で皆使い物にならなくなってしまうのだ。これでは、肝心なデータは得られていない。故に、五つほど世帯を解体してみたが、結果は同じだった。しかし、狂気に至った場合の回路図自体は作り、オルガン装置にはしてある。これはこれで、必要なデータではあったのだ。

オルガン装置は百二十一台になった。

霧雨魔理沙のものは作っていない。

魔法が使える人間と言うのは、そう多くはないのだ。

正常な状態での世界認識を再現させなければならない。

これは固執ではないとその時は思っていた。

肝心なサンプルがないのだと。

次に解体したのは、天狗である。

霧雨魔理沙がいない事に不審がったものが告げ口をしたのらしい。天狗を解体するのは想定外であったし、必要なデータであるとも思えなかった。何故なら、説明をした時に、彼女もまた理解は示したが、共感までには至らず、その上で、どうにも敵だとみなされてしまったのだ。これは非常に困る。誰とも敵対する気はないのだ。ただ、世界を再生したいだけなのだから。故に、彼女には実際に、そんなに悪い事ではないと理解して貰おうと、解体を行い、再構築したのである。天狗は、狂わなかったが、嫌悪感しか口にしなかった。それと、無意味に自分自身であることに誇りを持っている、否、固執しているために、最後まで受け入れなかったとも言っておこう。天狗と言う種族は所詮はその程度の存在だ。社会的ではあるが理性的ではない。そもそも社会組織に固執し、依存している段階で、程度は知れていると言えるのかもしれない。

それはそれとして、再現度が上がるのであれば、問題はない。

その後、妖怪を三体、解体する事で、必要な個体数は一つとなった。

そう、霧雨魔理沙だけなのだ。

「それで？」
「君に意見を貰いたくてね」
魔女はそう言うと、扉を開けた。
そこにあったもの。
アリスは一つ眉を顰めるばかり。
「趣味が良いとは言えないわね」
人骨を削りだして組み込んだ、奇形の花の様な一台のオルガン。恐らく無数のオルガンを魔女にとっては効率的な手段で結合させているのだろうが、実際に弾くことなど出来ないだろう。たった一人の人間では。自動装置でもあるのだろうが、血と肉の匂いで汚れた視界では、アリスには探す事は出来なかった。唯一の救いは、腐敗臭がしなかったことだろう。恐らく、魔術によって防腐されているのか、周囲にまかれた香水のお蔭なのだろう。
「それは必要な情報かい？」
「美意識も世界を構築する要素の一つよ」
「そう……それもそうね。考慮させてもらうわ」

「それで？」
「そう肉体と言うものを、どう捉えるのかは、君が一番知っていると思ってね」
部屋の隅。
そこで、魔理沙が狂っていた。
両腕は既になく。
右足だけしかない。
だらりと背中を部屋の壁に預け、ただ虚空を見ているばかり。
ああ、きっと、何処からが自分なのかが分からなくなってしまったのだろう。アリスは、何とはなしにそう思った。だからこそ、幾ら再生させても意味がないのだ。
「ねぇ、パチュリー」
「なんだい？」
「貴方が必要なのは、神を認識しない、魔法を使う視点を持つ者、なのよね？」
「そうだとも」
「なら、魔理沙なんかに頼まなくてもいいのでは？」
「例えば？」
ゆっくりと、振り返って。

「貴方自身よ、パチュリー。貴方がオルガンになればいいの」
そう言うと。
しばらく、無言のままで。
そして。
魔女は大笑いをした。
「そうだ。そうだね！　そうだとも！　ああ、君に相談して正解だ！　ああそうだ、そうだとも！　ああ、でも」
「なんとなく、貴方のやっている事は理解出来たわ。この図面を見る限り。同じ事を貴方にすればいいのね？」
「そうだよ」
笑う魔女の四肢を、人形遣いは魔法の糸で拘束していた。

「では、パチュリー。最初の質問よ。今から歯を抜いていくから、痛みを痛みだと認識しなくなったら言ってちょうだい。大丈夫、これでも、神経の再生は私も得意なの。何度だって歯を再生して、折り砕いてあげるわ」

霧雨魔理沙が目を覚ましたのは、否、正常な意識で目を覚ましたのは、紅い屋敷に訪れてから八か月後の事であった。ただ、場所は彼女の家ではなく。

「あら、もう目が覚めたの？」

人形遣いの家であったが。

「ああ、アリスか……私は」

そこで、何かに気が付いたように自分自身の腕を見る。

ちゃんと、そこに自分の指と足がある。

動く。

自分と繋がった肉体がそこにある。

「ああ、そうか」

「何を納得しているの？」

「いや、ちょっとした、怖い夢を見ただけだよ」

「へぇ？　気になるわ。どんな夢？」

「痛みもなく体を解体される夢だよ。自分がどこまでが自分なのかを理解しろって言われな

がらさ、気が狂いそうだった」
「そう」
素っ気なく、人形遣いは言う。
「あのね、魔理沙」
「うん？」
「私もね、知りたいことがあるのよ。魂って何なのか、そして人形が命を得ると言う事が、どういう事なのかを」
「うん？」
「だから、貴方が教えてね」
そう言う。
何の話だろう。
ただ。
自分の手足が、何の弾力もなく。否、自分の体全部が、まるで、陶磁器の人形で出来ているかのような、そんな錯覚さえ覚える程に、ぎこちなく。
そして。
目の前には。

ぐずぐずに積み上がった、醜く、腐った肉塊が転がっていて。

「腐った肉の塊とその人形の体、どっちにも貴方の魂があるのだけど、どっちが、より自分だって認識できるかしら？」

後ろで。

けたたましいオルガンの音色が鳴り響いていたが、そんな事はさておき、そこで、霧雨魔理沙は、四十八回目の狂気に落ちていた。《了》

藍田真琴　花吹雪

神社を目指して飛んでいる途中だった。雲も無い夕焼けに染まる空から、突然使い古された油のような黒い雨が降り始めた。ぽとぽとと重量のある音を立てながら、赤く染まる光景をみるみる黒く塗りつぶしていく。腐った肉のような、ひどいにおいが鼻をついた。

私は噛まれた肩に手を置いた。傷には包帯を巻いていたけど、この黒い雨は、傷口に触れさせないほうがいい気がした。何が混じっているのか、まるで検討がつかない。

でも、今日はまだましだ。昨日は突然歯車が降りはじめたのだ。屋根に固いものがぶつかる音が始終天井から聞こえて、神社の屋根に穴が開くかもしれないな、と思った。里では、畑仕事をしていた農家や行商をしていた商人たちが、たくさん死んだみたいだった。

肩は、さっきよりも腫れていて熱を持っていた。ずきずきする痛みの波も次第に強くなる。

今日のばけものは、かなり手ごわかった。いつものように突然里の通りの空に出現した境界から現れたそいつは、不定形なまっくろの霧のようなやつで、さまざまけだものたちに姿を変えながら襲い掛かってきたのだ。あらゆる私の攻撃を受け付けず、近くにいた里の人間はあっけなく食い殺された。騒ぎを聞いて駆け付けた私も肩を噛まれてしまったけど、空を勢いよく飛んで発生させた風を利用してなんとか消し飛ばすことができたのだ。

……やっぱり、里で傷薬をもらっておくべきだったな。と後悔する。手こずってしまったためにすっかり遅くなってしまったため、神社にひとり残した紫が心配だったから、他の里

のひとに遺体をお願いして早々に帰ることにしたのだ。

神社に戻ると、紫はいつもの座椅子に座りながら、ぼんやりと何もない方向を見つめていた。私はほっとした。からだが泥のように崩れていたり、この黒い雨の中、庭に出ていたりしないかと、不安だったのだ。

……紫がおかしくなりはじめたのは、いつ頃だろう。

まず、藍や橙が、無表情で聞いたことのない言語をつぶやきはじめた。まるで時計がきしむような声だった。しばらくすると、ふたりとも、姿を現さなくなった。

紫も。話す言葉に聞き取れない言語が、少しずつ混じり始めた。それに、いつもの声じゃない声を発するようになった。おばあさんのようなしゃがれ声だったり、反対に、赤ちゃんみたいな泣き声だったり。何も無い方向に向って話すようになったり、ずっと何もない一点を見つめていることもあった。

しばらくすると。姿もおかしくなるようになった。どろどろに溶けていて、いつもの座椅子の上をびちょびちょに濡らしていたときには、びっくりした。でも、しばらくすると、いつの間にか元の姿に戻っていた。

そのころから、紫と意思の疎通がまるでできなくなっていた。うつろな顔をしたまま、何を言っても反応しないのだ。ただ、意味もなくうろうろしたり、たまに声を上げたりするば

かりだった。

そんな状態だから、ごはんだって食べないし、眠るのも、座ったままだったり、庭に倒れたままだったりした。

でも。不思議なことに、紫はどんどんきれいになっていった。いや、紫はもともときれいだったのだ。私の前では、いつもぐうたらしていたり、眠そうな顔をしていたから、気づかなかっただけだ。

紫のぼんやりと見開いた黄金色の瞳は、まるで死人みたいに感情が無いのにとても透き通っていて、部屋の明かりに反射し、同じく黄金色の髪といっしょにきらきら輝いていた。

紫、と私がつぶやくと、ふいに瞳が、こちらを見たような気がして、どきり、とした。それはただ刺激に対しての反応で、私を見ているわけじゃないのはわかっていたのだけど。

また、からだの確認をさせてね、と私は一応断りの言葉を言う。当然反応は無いけど、紫の服を脱がせはじめる。虫くらいならいいけど、からだの一部がもっと狂暴なけものになっていると、さすがに危ないから。

何も食べてないのに、紫の肌はすべすべで、染みひとつなかった。今の紫のからだは世界で一番きれいだと思う。

ふとももや、おなかや、胸など、いろんなところを触ると、そのたび感触が違うし、掴ん

だりすると、押し返してくれる。たまに、きれいな声をあげてくれる。私はだんだん夢中になる。

私は紫に触りながら、黒い雨が降り続ける外を見る。

紫は、紫自身と同じ、うつくしいものが大好きだった。戦闘にうつくしさを求める弾幕ごっこだって、いかにも紫が好きそうな決闘法だったし。そんな紫が愛していた幻想郷も、とてもうつくしい世界だった。住んでいる妖怪たちだって、かわいらしい姿の、きれいな子ばかりだった。

私もそのひとりだったのだろうか。紫はよく私の髪や頬を撫でてくれた。霊夢はきれいね、とよく言ってくれた。霊夢の弾幕も、いちばんきれいだって、言ってくれた。

そんな紫の理想郷が。みにくいばけものどもに荒らされ。黒く塗りつぶされているのを知ったなら。とても悲しむだろうか。もしかすると幻想郷を捨てて、再びどこかにうつくしい世界を作るかもしれない。

そのときに私はいるのだろうか。たぶん私がきれいなままでいたら、連れていってくれるかもしれない。

紫の手から、桃色の花びらが散った。紫の人差し指が、桜の花になっている。昔はよくみんなでお花見をしたことを思い出す。その淡い色の花はかわいくて、とてもきれいだった。

朝になっても、傷の痛みは、まるで引かなかった。やはり昨日、薬をもらうべきだったのかもしれない。

今日は眠っていよう。そう思い、そのまま紫といっしょに布団で眠っていると。急に鋭い視線を感じた。

私は慌てて目を開ける。発熱のせいで、神社を守る結界が弱くなっているのだ。ばけものが侵入してきたかもしれない。

ふたつの大きく見開いた瞳が、私を見下ろしていた。アリスだった。いつからそこに立っていたのだろう。

今日も仲良く紫と寝ていたのね。いい身分じゃないの。とアリスは言った。

アリスは下着姿だった。前からおかしかったけど。だんだんひどくなっているみたいだった。

見開いた瞳の下が黒くむくんでいることや、あのきれいな金髪がぼさぼさになっているのがとても残念だったけど。むきだしのほっそりした手足は血管が透けてみえるほど病的に白くて、相変わらず、とてもきれいだった。下着だけなので、血がにじんだぼろぼろの白いシ

ユミーズを押し上げているおおきな胸の形や、ショーツに包まれた形のいいお尻まで、くっきりみえる。アリスはからだは細いのに、胸やお尻はとてもおおきかった。まるで作り物みたいに整った顔とあいまって、よくできたやらしいお人形さんみたいだった。

……今。私を見下ろす瞳は。充血して真っ赤になり、むきだしの怒りに染まっていた。

みにくくて、いやな目だと思った。昔はこんな目つきなんて、したことなかったのに。

昨日も里でばけものがやってきたんでしょ。そんな危険な状況で魔理沙がまだ見つからないのに。あなたは焦りもせずに、そうやってぬくぬくできるのね。

……しょうがないじゃない。怪我をして、調子が悪いの。

だったら、ひとりで眠ればいいじゃない。

アリスは私と紫の布団をはいでしまった。それから紫の姿をみると、舌打ちをした。

ほら、やっぱり、やらしいことをしていたんだ。

してないよ。紫がおかしな動きをしないように、いっしょに眠っているだけじゃない。

じゃあ、紫がどうなろうと、別にいいんだよね。おっぱいとか、ちぎっちゃってもさ。

……魔理沙が行方不明になってから、アリスはだんだんおかしくなっていったけど。やはり、今日はいちだんとひどい。また、紫にひどいことをしてくるかもしれない。

アリス、あんまりひどいことすると、許さないよ。

そんなに大切なんだ。魔理沙なんかよりもさ。

アリス。魔理沙がいなくなったことが悲しいのはわかるけど。私に八つ当たりしないでよ。

紫がいれば、あなたはどうだっていいものね。

……紫に何かあれば。ここはおしまいなんだよ。

どうせここはもうおしまいよ。他に行き場所がある連中はみんな去っていったじゃない。

……魔理沙だって。もうどこかに去ったのよ。

そのときには、絶対霊夢に何か言うはずよ。何も言わないなんてことはないわ。ねえ。隠しているんでしょ。私に知られると面倒だからね。私だって魔理沙から避けられていたことはわかっているもの。でも、しょうがないじゃない。私だって、どうしようもないんだもの。

何度繰り返したのだろう。このやりとりを。

魔理沙と最後に会ったのはもうずっと前だし。そのときだって、どこに行くかだなんて、何も言わなかったわ。

私は内心げんなりしていた。確かに魔理沙はここを離れると言っていた。そのことを、アリスには言わないでくれと。でも、どこに行くだなんて一言も言わなかったのは事実だし。魔理沙がああ言った以上、アリスに言うことはできなかった。

なのに、アリスはいつまでも同じことを繰り返すのだった。どうしようもないことはどう

しようもないのに。

嘘よ。魔理沙は何か言っていたはずよ。

そう叫んだあと、急にアリスはあざ笑うように口元をゆがめた。最近のアリスはこんなふうに、泣いたと思うと、すぐ笑ったりする。次に何をするか全く想像がつかなかった。

いや。あなたのことだから、気づかなかったかもね。霊夢は、冷たいからね。というより、他人に興味が無いんだものね。

魔理沙が私のことをどう思っているのかだなんて、私にはわからないもの。

……それは魔理沙の好きにすることだ。だから、そのことを責められても私にはどうにもならないのだ。

そうね。あなたは何もわからないものね。私が今怒っていることも、理解できないものね。

あなたのおもちゃ、壊してあげる。そうすれば、私の気持ちもわかるでしょう。そう叫ぶと、白い頬をかすかに赤く染めながら、アリスは紫の首をぎゅうっと絞めつけた。きれいな瞳は気味悪くぎらぎらと輝いている。お人形さんみたいな顔が、いまや、とてもみにくくゆがんでいる。

ちょっと。やめてよ。本当に、許さないよ。

だったら私を殺してよ。とアリスは叫んだ。私をにらみつけるゆがんだ瞳から、大粒の涙

があふれていた。

もういや。こんな思いをするのは。いっそのこと死んでしまえばいい。みんなみんな……。

首を絞められた紫は、うっすらと瞳を開けると、苦しそうに、うめき声をもらしはじめた。このままでは、紫が死んでしまう。

……きれいなままでいればよかったのに。

私は護身用の退魔針を肩から引き抜くと。アリスのこめかみに突き立てた。魔女であるアリスは、今や弱って人間よりももろく、針はアリスの頭に深々と突き刺さった。

アリスはうめき声をあげると、両腕の支えを失い、ゆらりと横に崩れ落ちた。しばらく痙攣していたけど、そのうちに動かなくなった。

糸が切れて呆けたような顔になったアリスは、また再びきれいな顔になった。

アリスはまるで眠っているように、腐ったり変なにおいもさせず、肌もつやつやしていて、いつまでもきれいなままだった。もしかして、ほんとうに死んでないのかもしれない。

私は暇にあかせて、アリスに私の服や、紫の服を着せてやったりした。私の服を着せると、胸やお尻がとてもきつそうだったけど、アリスのからだのやらしいところが強調されて、好

きだった。紫のドレスを着せてやると、開いた胸元から、はちきれんばかりの胸がこぼれおちそうだった。

そうして着替えさせたアリスを、座っている紫の隣に並べてやった。紫が上体を崩して隣のアリスの上に倒れこんだりするときの、ふたりが折り重なって横たわる姿は、ちょっとどきりとするほど、きれいだった。私は眠りについた紫の隣にアリスを並べて、その間に入って眠るようになった。まるで花に埋もれて眠っているみたいで、私は好きだった。

肩の傷はまるで治らなかった。そのうち肌の表面が溶けて、嫌なにおいがしてきた。

さすがに我慢できなくなり、私はよろよろと里に行くことにした。

里には壁ができていて、門が固く閉じられている。たび重なるばけものの襲撃に備えて、里の人間たちが建てたのだ。ばけものは何も無い空から突然出現するし、空からやってくれば意味は無いので、逆に逃げ場を失っているだけの気がするけど、里の偉い人がそう決めたらしい。何かに囲まれていると、少しは安心するのかもしれない。

有事の際以外は門から入ってほしいと言われているので、しょうがなく私が門を叩き、声を張り上げていると、ようやく門の上から門番が姿を現した。

私よ。薬をもらいたいの。

門番は私を一瞥すると、またいったん姿をひっこめてしまった。

それからやっと重々しく門が開くと。そこには数人の男たちが立っていた。みんな嫌な目つきで、私を見ていた。

両手を縛らせてほしい、とひとりが言った。どうして？　と聞くと、念のためだ、と言う。化ける妖怪がいたんだ。確認させてもらいたいんだ。

私は仕方なく両手を後ろに縛らせてやった。ずいぶん乱暴だったので、途中、痛い、と言ってしまった。

やっと門の中に入れてもらったけど、そのまま私は周りの男たちに掴まれて、門の近くに建てられた狭い小屋の中まで引っ張られてしまった。

ひとりが鍵を掛けると、私を取り囲んでいる男たちの、目の前にいる初老の男が話し始めた。扉の覗き窓からの逆光で、男の顔は見えなかった。

私の顔を見て、思い出さないか。

私は、よく見えないからわからない、と言った。すると男は鼻で笑うと、やはり思い出さないだろうな、と言った。

お前にとって我々人間など妖怪の餌になる存在であって、豚や鶏のように区別がつかない

のだろう？　私は、この前お前に見殺しにされた息子の親だよ。

私は見殺しになんてしていない、と言った。やるだけのことはやったんだ。

息子が妖怪に殺されたあの日だって、そそくさと帰っていったじゃないか。そうしてあの神社で妖怪と寝ていたのだろう？　お前にとって息子の命など、それほどの重みしかなかったのだ。そんな人間から精一杯やったと言われても、信用できるものか。

思えばあの神社にはいつも妖怪だらけだったな、と別の男が話し始めた。妖怪退治を生業とするのに、不思議だとは思っていたんだ。だがそれも、裏で妖怪と通じているからだったんだな。異変解決だなんて自作自演をしているだけだったんだろう？

そうじゃない、という私の言葉を遮るように別の男が、

最近じゃ、お前は妖怪の死体を着飾り、それとも一緒に寝ているそうじゃないか。まともじゃないよ。そんな人間の言葉が信用できると思うのか？

身体検査させてもらうよ、とひとりが言うと、私の服をつかんでたくしあげた。私が黙っていると、

人間と寝たことはなさそうだな。妖怪と情を通わせているが、人間とは交われないのだろうな。いいからだをしているのに、あわれなものだ。

最後に、まともな人間らしい営みを知るのも悪くないだろうよ。そう誰かが言うと。た

くさんの手が、いっせいに群がってきた。

……何か悪いことをしたのかな。目隠しをされて、手足を縛りつけられた状態で、股の痛みに耐えながら、私は思った。

私は、特に何もしていない。ただ、からだの調子が悪いから、しばらく妖怪退治ができなかっただけだ。調子が戻ったら、また復帰するつもりだったのに。

股や胸が痛むたびに、私のなかに。どろどろしたものが溜まっていく。まっくろい、泥のようなものだ。

どんどん私はみにくくなっているのだ。里の人間たちや、アリスと同じように。そうなれば、もう紫が戻っても、きれいねって言われなくなるかもしれない。見捨てられるかもしれない。それが何よりも、つらかった。

……どれくらい経ったのだろうか。扉の開く重い音がして、びくり、と私は目覚めてしまう。また、いじめられるのだろうか。縛られたからだが、思わず震えてしまう。

ふいに目隠しを外されると。知った顔が私をのぞきこんでいた。魔理沙だった。
ずいぶんな恰好だね。どれくらい、やられちゃったの？
久しぶりに見た魔理沙の笑顔だったけど、正直、いやな笑顔だな、と思った。
魔理沙は、こんな、ゆがんだ笑顔なんてしなかったのに。もっときれいな、向日葵みたいな笑顔だったのに。
紫も、悲しむよね。霊夢が、こんなになっちゃったなんてさ。
……ねえ。私のこと、きたないと思う？
魔理沙は。急に尋ねられて、困惑しているようだった。私は、自分の中に澱が溜まっていくのを自覚していた。だから、なんとなく尋ねてしまったけど。今の魔理沙には、聞かないほうがよかったかもしれない。だって魔理沙も、明らかに澱んでいるから。
私の姿をしばらく眺めていた魔理沙は、少し怖い目をしていた。それから喉を鳴らすと、よくわからないけど、霊夢は、霊夢だと思うよ、と少しかすれた声で言った。それから、少し躊躇ったあと、
ねえ。胸とかスカートとかさ、戻してあげようか。その、恥ずかしくない？
私は、別にいいよ、と言った。どうせ、めくりあげるひとはめくりあげるだろうし。魔理沙には見られてもどうだっていいから。

……でも。朝になれば、もっとひどいめにあうと思うよ、と魔理沙は言った。

みんな、こんな世界になってしまったのは、全部霊夢が悪いんだってことにしようとしているんだ。みんな誰かを悪者にしないと、心が保てなくなっているんだ。霊夢はあんなにがんばっていたのにね。ほんとうにひどいやつらだよね。

それから、少し間を置いて、

霊夢は、前に言ったよね。ほら、私がいっしょにここを出よう、って言ったときだよ。博麗の巫女だから、私は神社にいる、って言ったよね。でも、そんな努力も全部無駄なんだって、わかっただろう?

魔理沙は、私をじっ、と見つめながら、

ねえ霊夢。私はもう外の世界に住んでいるんだ。ここより人がとても多いし、建物も多いけど、いい場所だよ。きっと霊夢も気に入るよ。ねえ霊夢。私といっしょに行こう。ねえ。

……魔理沙。昔はこんな顔をしていなかった。もっと、きれいな顔をしていた。

外の世界は大変なの、と私は聞くと。魔理沙は、大変なこともあるけど、ここよりましだよ、と言った。

向こうじゃ、生活するのにとてもお金がかかるんだ。それが、ちょっと大変でね。でも、お金の稼ぎかたもわかってきたから、もう大丈夫。霊夢だって、きっとすぐに慣れるよ。

……奥歯に引っかかるような、ぎこちない笑顔。昔の魔理沙が、一度も見せなかった表情。

……紫は。

その名前を口にした瞬間。魔理沙の笑みがこわばった。

紫は。どうするの。

……連れていくわけには、いかない。言ったとおり、向こうじゃ、いるだけでお金がたくさんかかるんだ。お金が無いと、ほんとうにみじめな生活になるんだよ。それに紫はここが好きなんだろ。きっと外に行きたくないはずさ。

……こんな見え透いた嘘を、言わなかったのに。

……ねえ魔理沙。神社に行って、紫を守ってほしいの。みんなが悪者にしたいのは、私だけじゃないでしょ。きっと紫にも、ひどいことをするつもりよ。

魔理沙は、しばらく押し黙ったあと、

……紫。紫。なんで紫ばっかりなんだ！

そう吐き捨てる魔理沙の顔は。怒りでゆがんでいた。

ここがこんなことになったのは、紫のせいじゃないか。おかしくなるならひとりでおかしくなればいいのに、みんなを道連れにしやがって。霊夢だって巻き込まれたそのひとりじゃないか。なんであいつなんかを大切にするんだよ。そんなにあいつが好きなのか。

好きかどうかと問われると、私は紫は好きだった。あんなにきれいなひとは、いないから。でも、それを伝えると、魔理沙は一瞬泣きそうになったあと、すぐに怒りに目を尖らせた。

じゃあ、私は嫌いなんだな。私は紫みたいにきれいじゃないからな。どうなんだよ、霊夢！

嫌いじゃないけど、好きでもない、と私は答えた。

……昔の魔理沙は好きだった。でも、今の魔理沙は、きれいでなくなっているから。

私の回答を聞いた魔理沙は。しばらく黙っていたけど。

そうか。やっぱり私なんか、どうでもいいってことだね。と、笑った。

じゃあ、私も教えてあげる。私はね、霊夢のこと、大っ嫌いだよ。そうやって、私の心をかき乱してばかりいてさ。なのに霊夢は、私のことなんか、どうでもいいって顔をしてるんだ。ずっとずっと。本当にむかつく。

魔理沙は。声を立てて笑う。

だから、霊夢が神社でどんな生活をしているか、全部里の人間たちに教えてやったんだ。最後に渡したお守り、今でもどこかに転がっているんだろうね。霊夢のことだから、捨てもせず、付けもせずにいるんだろうね。音だけだけど、外の世界でも、結構聴こえたよ。毎日毎日、紫の声とかまでね。気が狂いそうだったけど、止めることもできなかった。忘れたか

ったけど、できなかったんだ。私のこと、気持ち悪いって思った？　ひどいやつだって思った？　でも、霊夢が悪いんだ。こんなに私を惑わし、苦しめておきながら、何とも思ってないだなんてさ。

魔理沙は、むきだしになっている私の胸を、強く掴んできた。

今だって。平気な顔をして。こんなものをみせつけてきて。私を惑わしてくるんだ。本当に、むかつく。

魔理沙の顔は。ひどくゆがんでいた。どろどろの澱が、溜まってしまっているのだ。もう、あのきれいだった魔理沙は、どこにもいなくなってしまった。

次に懐から刃物を取り出すと、その鋭い切っ先をもうひとつの胸に押し当てた。

私を惑わすこんなものなんて。えぐりとってやろうか。

私は何も言わず、押し黙っていると、魔理沙は刃物を捨てて、私の胸に顔をうずめてきた。

ほんとうにむかつく。くそ、くそ……。

……なんでみんな。どうでもいいことばかり考えて。みにくくなってしまうんだろう。

私はただ、きれいなものが好きで、とっておきたかっただけなのに。

大雨が屋根を叩く音と、風が吹き荒れる音で、目が覚めた。ずいぶんと大きな音で、何かがきしみ、倒れる音が混じった。そのたびに、振動でからだが揺れた。外は今まで体験したことのないような暴風雨のようだった。

紫に。何かあったのかもしれない。

アリスも壊されてしまったのだろうか。きれいなふたりのからだがばらばらになるのを想像すると、心がざわつき、どろどろしたものが溜まっていくのを感じた。

私もきたなくなってきているのだ。もうじき、紫に褒められた私はいなくなってしまうのだ。とても残念だった。

私のからだには、ずっしりと重いものがもたれかかっている。魔理沙だった。

昨夜、ずっと私の名前を呼びながら、からだをいじくったり、キスしてきた。あまりにしつこいので、私は途中で眠ってしまったのだ。魔理沙も、眠ってしまっているのだろうか。

重いよ、と私が言っても、反応が無い。私がどかそうとして自然に手を出したときに、手足のいましめが解いてあることに気づいた。

魔理沙は、目を半開きにさせて、口元も少し開いていた。その口元には、泡が少しこびりついている。でも、さっきまでのゆがんだ顔じゃなくて、とてもすっきりとした顔だった。

魔理沙、と私が肩を揺すると、そのままずるり、と私のからだからずり落ちて、どさり、

と床に転がった。その手から瓶がこぼれおちて、白い錠剤が床に散らばった。

そのまま魔理沙は、ぴくりとも動かなかった。

……魔理沙。最初から、こうするつもりだったのかな。どうして、こんなことを。

魔理沙の顔をもう一度見る。きれいだと思った。戻ってくれたんだって思った。私が好きだった、向日葵のような魔理沙が。

……私は気づいた。魔理沙はきっと、理解したのだ。そして私に、教えてくれたんだ。元のきれいなままに戻るには、こうするしかないんだって。この世界をきれいなままとっておくには、妖怪退治じゃない。みんな、花になってしまえばいいんだって。紫やアリスみたいに、純粋なうつくしさだけの存在になればいいんだって。

魔理沙の服を脱がす。あちこちに、痣のようなものや爪を立てられたような傷がついていたので、見てはいけないものを見てしまった気がした。でも、そのやせたからだを。私は、きれいだと思った。紫やアリスとはまた違った、はかないうつくしさがあった。

たくさんの濡れた足音が、こちらに近づいてくる。みんなきっと、ゆがんでみにくい顔をしているのだろう。そんなことを考えると、私の中でまっくろの澱がどんどん溜まっていく

のを感じる。早くしないといけない。魔理沙に教えてもらった、正しいやりかたを実行しないといけない。

そうすれば。みんなをきれいにしてあげられるし。だんだんみにくくなる私も、きっときれいなままでいられるはずだ。そう思うと、急に晴れやかな気分になった。そして、やっぱりこのやりかたが正しいことを確信した。

私は魔理沙を抱きながら、彼女が持っていた刃物を掴む。昔、魔理沙たちと遅いお花見をしたときに見た、突風で青空に舞い散る桜吹雪を思い出しながら、扉が開くのを、待っていた。《了》

鵜飼かいゆ　カタワれの恋

「私は本来孤独であれと定められた存在でありました。物心がつく前から頭の中に届いてくる他者の思考に悩まされておりました。私はひたすら他者の存在を疎みました。ただただ、自分の生まれを怨みました。それを救ってくれたのは、他でもない妹でした。彼女がいなければ、私はとうに朽ち果てていたかも分かりません。だからこそ私は」

……破り捨てられた便箋に書き殴られていた文章（読み取れた部分のみ抜粋）

ある朝、古明地さとりは地球が眼球であるとの考察に至った。根拠は特にはないが、形状が孰れも球体であるのだから同一だろうと認定した。

丸いものがさとりを視ている。

常に。天から。地から。胸の底から。脳の奥から。読心が制御できなくなったような気持ち悪さに包まれながら、さとりは不意にむかつきだした腹を撫でさすりながらベッドより起き上がり身支度にとりかかった。洗面台に配置された石鹸が、角がとれて丸みをおびて、球体に近付いているということに気付いて、嘆息しながら眼球めいた白を手に取って洗顔の役を果たさせる。服を着替えて、ペットたちの様子を見てから、朝食用に昨日から仕込んでおいた野菜スープを食べる。

125 カタワれの恋

普段通りの古明地さとりの日常である。

にも関わらずどうしようもなく据わりが悪い。椅子に座っていても尻が落ち着かず、すぐに立ち上がってしまう。

どうしたものだろう。発育の悪い尻をスカート越しにさすりながら、さとりは思案して、意識を他者に向ければ少しは気が紛れるだろうと思い立った。書斎を兼ねた執務室に向かい、普段より二時間ほど早くおやつの準備をして、廊下を歩いていた火焔猫燐をミルクで釣って相手にした。

「調子はいかがですか」

「ぼちぼちですよ」

ミルクを美味そうに舐めながら、呑気に答える。

「ところでお燐、私達はずぅっと監視されているのよ。世界によって。眼球によって」

さとりの言葉に、今は黒猫の容をとっているお燐は、うにゃあと鳴いて、さとりの胸元に揺れる第三の眼に赤い眼を向けた。人語に翻訳された彼女の思考が波長に変換されて知覚される。例にもよってさとりの言葉はお燐に伝わりきっていないようだったが、最低限のポイントは無事に届いてくれたらしい。

「そんなの元から知ってることではありませんか。上からは八雲、下からは閻魔。それに周

囲には地上の人妖ども。あたい達が誰にも認識されてないことなんてありませんよ」

視ているというならさとり様だって、とまで考えたお燐は目の前の主人に無礼を《述べて》いることに気付くと、ぶるりとかぶりを振って思考を打ち止め、失礼しましたと出て行った。

そこまで神経過敏にならなくても、と思いながら、さとりは独りきりになった部屋の中で、空になったカップに紅茶のお代わりを注いだ。お燐が舐めていたミルク皿も空になっている。そそくさと立ち去ったように見せかけて、あの娘はちゃっかりとしている。

眼。

さとりは自分の眉の下に在るふたつの眼球を目蓋越しにつるりと撫でる。

覚りという妖怪は眼球によって収集する情報量がおそらく他の種族よりも多い。そも種としてのアイデンティティが心臓に接続されている第三の眼による知覚から対象の思考を読み取ることができるという時点で、覚りという存在自体が視覚によって成り立つものだと規定されているとも言える。

さとりは自分の胸の下に手を滑らせ、第三の眼と呼ばれる器官をつるりと撫でる。

例えば、顔に付いている方か胸の辺りに揺れている方か、いずれかの眼を潰されたら覚りは覚りではなくなる。

分かりやすいケースを出すのならば、さとりの妹のように。
そこまで思考して、はたとさとりは膝を打つ。
「そうですね、そうしましょう」
だからこいしを殺してしまおうと、さとりは思い立った。

「……随分すらすらと筆が進むと思っておりましたが」
四季映姫・ヤマザナドゥは皺が刻まれた眉間を二、三度揉んでから、一度書面から顔を上げた。心なし胃が軋んでいるような気もする。
心労を抱く閻魔の目線の先には、古明地さとりがいるとぼんやり認識できる髪の桃色と服の空色が、仕切りの役目を果たす磨りガラスにおぼろげに滲んでいる。
「貴女は少し、自分を客観視しすぎている」
その言葉の意味を認識した途端、さとりは首を傾げたようで、色彩の配置が少し動いた。
「はて、私は閻魔様に示された通りに懺悔を綴っただけのつもりですが」
「反省が見られない動機が見られない。貴女が積極的な共感や同情を必要としない覚りという種族であることを足し引きしたとしてもこれは些か異常です」

「異常」

くす、と笑い声が滲む。笑っているのだろうと推測はできるが、どんな笑顔を浮かべているか映姫には分からない。古明地さとりは思考を自己完結するせいで表情を余り表に出さないが、付き合いが長い相手なら分かる程度に喜怒哀楽は出していたし、映姫もそれを幾度となく見ていたというのに、想像がつかない。イメージができない。

「何が可笑しいのでしょうか」

「私の異常は貴女が証明してくれるということですか、ならば閻魔様、貴女達が断ずる白と黒の差異は、いったい誰が証明するのでしょうね？」

「それこそ、貴女にはもう、理解できることはないことですよ」

「そうでしたか、それではどうも、分かりませんね」

さとりはまた、笑ったようだった。

古明地こいしという妖怪は、表情豊かでいて本来ならば表情筋を動かす動機である感情という概念が殆ど存在しない。それ故に、感情はあれど表情を面によって補填する面霊気と仲良くなったのだと言うものがいるほどに、第三の眼を潰してからの彼女の存在は不安定に危

うい。危ういとは思えどもさとりからの干渉はできないままだ。
心を閉ざしているがために。
心が読めないがために。
それでも不定期に地霊殿に来てはさとりを聞き役にして一方的に喋り倒して、また放浪に出るという行事を執り行ってくれるだけ、まだマシな関係なのかもしれないと思っているが。
「こいし、おりませんか」
五回に四回は負ける賭けに打って出ながら、さとりは茶葉を入れ替え、新しいカップに紅茶を紅茶を注ぐ。
「すごーい、なんで私がいるって分かったの？」
今日は五回に一回の方の日だったらしく、瞬きをしている間にさとりの対面には、こいしがすまし顔を浮かべて紅茶を嗜んでいた。丁度いいと思いながら、自分のカップにお代わりを注ぐ。
「地上の様子はいかがですか？」
「うーん、まぁ、普通だよねー。ああでも、変な事件があったみたい」
「変な事件」
「うん」

ティーポットの傍に置いていたクッキーに手を伸ばしながら、こいしは姉の鸚鵡返しに頷く。片面が膨らんでいるせいで、背中合わせに二枚抓む格好にすると、歪な球体に見える。こうしてまた、世界に球が充ちていく。さとりを監視するモノが増えていく。

「川の魚がね、川原に打ち捨てられてたんだよ、いっぱい。そしたらね、目が無かったの」

「魚のでしょうか」

「そうだよ」

鴉がつついちゃったのかなぁ、呑気に言いながら、こいしは半球型に膨らんだクッキーを紅茶に浸し、もくもくと口に放る。

「違うと思いますよ」

「うーん？　なんで？」

「見られるのが怖いから、眼を奪ったのですよ」

「それは違うと思うなぁ。見られるのが怖いまでは分かるよ。でも犯人は、潰したんじゃなくて持ち去ったんだよ？　寧ろ見られたいんじゃないかなぁ」

部屋にいっぱいディスプレイしてたりして。怖い怖い。

全く恐怖など無さそうな笑顔で、こいしは言う。

「お姉ちゃんも気を付けてね、眼ドロボー」

「めどろぼー？」
「眼を盗み取るんだから眼ドロボーでしょ？」
「私は大丈夫ですよ。そんな不埒者がここまでたどり着けると思いますか？」
「そりゃあそうだけどね、念には念を入れたっていいんじゃない？　これでも私は弱いお姉ちゃんのことを心配しているんだよ」
「弱いは余計です」
「弱いよー。私にだってそんなに勝てないじゃん」
「全敗はしてませんが」
「そういうハングリー精神ないところがダメー」
心が読めない癖に心を傷つけようとする言葉を聞き流しながら、さとりは目線をこいしの顔からその眼球へとずらす。
「ところでこいし、ご存知ですか？」
「何が？」
「世界は眼球で構成されている、いえ、世界そのものが眼球なのですよ」
「お姉ちゃん、何を言っているの？」
「こいし、貴女なら、かつて覚りだった貴女なら分かるはずです」

「いやいや、全然何言ってんのか分かんないよ！」
「だから私は貴女を殺さなければならないのです」
こいしは表情だけは不思議そうに感じているようなものを作って、
「ねぇー、お燐、お空？　他のみんなー、誰でもいいやー。あのねー、お姉ちゃんが」
「こいし」
テーブルを乗り越えてこいしに接近する。がしゃんがしゃんと音を立ててティーセットが床に落下して粉々に砕けていく音が耳に届くが、見ていないから実存は確認できない。
「お姉ちゃん、何、やめて」
「分からないなら分からないままでいいのです」
それからの記憶は曖昧にできている。
気が付いた時には、こいしの死体を見つめて第三の眼を踏みつけていた、それだけで。

映姫は読み終えた書面を裏返し、右の掌で顔を覆う。古明地さとりが犯したのは同族殺しであり近親殺しである。行為と結果は完全に結び付き、灰色が挟まるスキマは存在しない。しかし、致命的にさとりの言動には動機が欠けている。

「貴女は有罪。それは紛れもない事実です」
「そうですか」
凪いだ声でさとりは言う。
「ここからは閻魔としてではなく、長らく貴女と知己であった私個人からの質問です。貴女はどうして、古明地こいしを殺害したのですか?」
「ですから、こいしを、我が妹を眼球から解き放とうとしたからです」
「貴女が書いたエッセイめいた文書には、覚りでなくなったが故に古明地こいしを殺害したように読み取れますが?」
「ええ、ですから、第三の眼から解き放たれた妹を、視られるばかりの世界の軛から解こうとしただけですのよ」
「理解に苦しむと言っているのです」
「理解などされなくて結構ですよ。どうせ私は、天国へ行けないのですから」

《了》

久我暁　夏の憂鬱

「また模擬戦をするの？　魔理沙」

狼を思わせる研ぎすまされた金瞳をこちらに向けて、魔法使いの少女魔理沙は、もったいぶって頷くと、「そのとおりよ」と億劫に吐き捨てた。そうでなければ貴女のところに来るわけないじゃないの、と言いたげだった。

つぎはぎだらけの紫のローブに、魔力弾の火花で先がチリチリになった魔法帽を被ってきている時点で、彼女がどういうつもりかなんてことは明白だった。そもそも幻想郷の端っこにある博麗神社にこうしてやってきている時点で分かりそうなものではないか。

彼女は、鬱陶しそうな顔で自分に尋ねてきた巫女の少女の方に向かって、細長い足を大股に運んで進み出た。仁王立ちしている彼女のローブの裾からは、眩しい白い足が僅かに覗かせていた。

魔理沙からの挑戦的な視線を受け流すようにして、霊夢は彼女の様子をうかがっていた。悩ましく首を振るたびに、顔の横にあるお下げが十文字に組んだ両腕の上で揺れていた。改めてまじまじと顔を見つめると、昔のことが思い出されてくる。初めて会ったときから微妙な間柄だった。幻想郷で起こる異変を解決するのは、博麗の巫女である自分の役目であるのに、必要もないのに首を突っ込んでくる。あの夢幻の世界での異変の時などは、お互いに相手を潰そうと、本気でやり合ったこともある。

魔理沙は霊夢のことを好敵手として見ているだろう。では自分はどう思っているのか。霊夢はそう自問自答する。少なくとも彼女を好敵手と思ったことは一度もない。面倒くさい相手だとは思うが、それはあくまでも乱入者としての評価であり、対抗者としてではない。

友人、なのだろうか。それとも、知人、なのだろうか。それとも、――。ただ一つ分かっていることは、彼女を自分の手の内にいれておきたい。信頼のできる相手、自分だけに約束された相手にしておきたい。そういう欲求が霊夢の心内に芽生え始めていた。靄が掛かったような頭の中で、唯一はっきりしていることだった。そんな風にして、霊夢は見るとはなしにこの腐れ縁の相手を眺め続けていた。

それでもいつの日か、魔理沙と訣別する日が来る。霊夢が博麗の巫女であり、この幻想郷のシステムに組み込まれている以上、彼女とは決定的な差が生まれてしまう。今は巫女としては未熟だからこそ、彼女と共に歩むことができているが、遠くもない将来、そんな日がやってくるはずだった。魔理沙は、種族魔法使いどころか、か弱い人間の魔法使いである。そんな彼女が、世界と肩を並べようとすること自体おこがましいのかもしれない。しかし、だからこそ愛おしかった。得がたい存在だとも思っていた。

けれど、少なくともこの幻想郷に愛された巫女の力を前にして、彼女は打ちひしがれるに違いない。その時、魔理沙はどうするのだろう。もしかしたら、こんなヤクザな道は捨てて

しまうかもしれない。普通の里の女として夫を持ち、子をなし、そして死んでいく。彼女がそういう平凡な人生を選んだとしても、自分には責める権利などありはしない。霊夢はそう思っていた。もちろん、彼女の願いは別のところにあって、無理と分かっていても魔理沙に自分と共に歩んでほしいと願っていた。決定的な差があって、それが埋められないことが分かっていながら、それでも立ち向かってほしい。そう願わないではいられなかった。

だけど今は、まだ二人とも子供であり、何も考えずに共に歩めるこの時を楽しみたい。そう思ったのだった。

「分かったわよ、魔理沙。相手をして上げるわよ」と霊夢は面倒くさそうに吐き捨てた。

魔理沙はニヤリと口をつり上げただけで、箒にまたがると、魔力光の粒子をまき散らしながら蒼穹へと飛翔する。それは、一条の流れ星のように霊夢には思われた。彼女は、眩しげに空を見上げながら、お祓い棒を構えるのだった。

じきに魔理沙の第一撃がやってくる。それをどういなそうか、そして、次は自分はどう打ち込もうか。そんなことを考えているうちに、霊夢はさっきまで頭の中にあったもやもやをいつの間にか忘れているのだった。そうやって、いつものように日が暮れていくのだった。

＊　＊

秋が近づいているせいだろうか、霊夢はなんとはなしに気がふさがることが多かった。日課の境内の掃除にも何となく身が入らない。箒を持ったままぼんやりと空を眺めていることが多くなっていた。その日も朝方から薄曇りのすっきりしない天気で、雨が降る前に掃除を済ませようと外に出たのだが、すぐにやる気がなくなってしまい、賽銭箱にもたれかかるようにしてぐったりとしていた。

「ご機嫌よう、お嬢さん」

霊夢を我に返したその声は、不可思議な声だった。凛と澄んでいるようで、ヒキガエルのようにしゃがれても聞こえた。彼女はそのまま縁側に寝転んだまま、ちょうど鳥居をくぐり抜けて、カツカツとハイヒールの音を石畳に響かせて歩いてくる真っ黒な服の貴婦人の方に体を向けた。

「ねえ、お嬢さん。貴女、この神社の巫女さんかしら？　お参りをしてもよろしくて？」
参拝客など滅多に訪れない神社に現れた久方ぶりの来客である。霊夢は飛び上がるように起き上がって、近づいていった。立ったときに、寝癖で乱れまくった頭の方に黒服の婦人の視線を感じ、彼女はばつの悪い顔をした。その婦人は微笑ましそうに顔を緩めると、気遣うような調子で尋ねてきた。
「ごめんなさいね、巫女さん。せっかくお休みのところをお邪魔してしまったかしら？」
「いいえ、かまわないわ。退屈しすぎて寝ていただけだから」
「お参りに来る人が少ないのかしら？」
霊夢は思わず自嘲の笑いが込み上げてきてしまった。すると、黒服の婦人は不思議そうな顔をする。
「あら、何か可笑しいことを言いまして？　こんなに立派な神社なのに、そんな顔をしてはいけませんわ。それとも貴女は見習いで、どこかに神社の主がいるのかしら。確かに小さなお嬢さんにしか見えませんからね」
そういう割に、婦人の瞳はしっかりと霊夢をこの神社の主と認めているような態度だった。
「ごめんなさい。褒めてくれるのは嬉しいけど、ここは閑古鳥が鳴く神社なのよ。私も巫女としては……半人前だからね」

「そうだったの、ごめんなさいね」と、黒服の婦人は、申し訳なさそうな顔をした。
霊夢は婦人の称賛の言葉に霊夢は居心地の悪さを覚えていた。そういった言葉だけではない、大人の女性の前に立ったときに感じる気詰まりで、息苦しくなってさえいた。
「じゃあ、ここには誰も来ないのかしら？」
黒服の婦人は、子供っぽさを感じさせるきょとんとした視線を霊夢に向けた。
「魔理沙は来るわよ」
「魔理沙って、どなた？　お友達かしら？」
「友達……、うーん、友達っていうか、何なのかしら、あいつ」
「お友達ではないのかしら？」
「世間一般にはそうかもしれないけど……。そうね、腐れ縁の面倒な奴よ」
「貴女と同じで巫女なのかしら？」
「違うわ。魔理沙は里の商家の娘で、魔法使い見習いよ」
「魔法使い見習い……」と黒服の婦人は繰り返した。彼女は、何か言いたげだったがそれ以上何も言わなかった。ただ、暫く間を置いてから、付け足して言った。
「さて、お待ちかねの彼女がやってきましたわよ」と、朱色の鳥居の向こう、未だ霊夢の眼からは何も見えない、空を見晴るかして指さすと、彼女はそう言った。

「ではご機嫌よう、楽園の素敵な巫女さん。お名前は？」
「霊夢よ」と反射的に答えてしまっていた。
黒服の婦人は握手の手などは差し出さなかったが、二度三度と確かめるように頷いて、霊夢に挨拶した。それはまるで、秘密を確かめる共犯者のような態度だった。そのとき、ボンネット帽子からこぼれた光を見て、彼女は初めて気づいた。目の前の女性の髪が、魔理沙に負けないほどに黄金色に輝いていることに。
魔理沙が箒にまたがって境内に降り立ったときには、黒服の婦人の姿は参道の向こうに消えかけていた。

＊　＊

人里からの帰り道、荷物を放り投げて、大きな楡の木の影に霊夢は腰を下ろした。
「まったく、用があるなら自分で来なさいよ。何で、私がわざわざ人里まで行かないといけないのよ」

稗田家の当主から、火急の用があるので来てくれと呼び出され、霊夢はわざわざ徒歩で赴いていたのだった。確かに、神社から人里まではそれほど距離があるわけではない。それこそ空を飛べばあっという間に着く。玄爺の背中を借りるのも申し訳なくて、彼女は歩いて行くことにしたのである。それこそ行きの間は良かった。野分を思わせる涼しい風が吹き、巫女服の袖がひらひらと揺らしていた。霊夢は、まるで季節外れの紋白蝶のような気分で、散策気分で歩みを進めたものだった。

ところが帰りには全てが嫌になり果てていた。真夏が戻ってきたかのような炎熱の中、霊夢は家路を戻ることになったのである。彼女は地面の黄色くなっている草を軽くむしり取ると、手のひらでもてあそんでいた。口の中は砂混じりの風を受けたせいか、じゃりじゃりと嫌な感触だけが残っていた。彼女がしばしの休息を得ようと瞳を閉じたときだった。

「レモネードソーダを差し上げるにはやぶさかでなくてよ、霊夢」と鈴が鳴るような声が呼びかけてきた。

眼を開けると霊夢は、自分の目の前に、まるで絵画の中から抜け出てきたような女が立っているのを見た。ひょっこりと木の幹から顔を出している。その顔は整っており、大理石のように真っ白な肌に、血のように赤い口紅が引かれている。その色に負けないほど妖しい光をたたえた紅玉の瞳はじっと彼女を見つめていた。親しげというよりは、どこか馴れ馴れし

さを感じさせる微笑を浮かべている。

霊夢は、それが先だって神社を訪れた黒服の婦人であることに気づいた。飛び起きると、身だしなみを確かめてからお辞儀をした。婦人はさしていた日傘を閉じると、彼女の頭のてっぺんから足下までじろりと眺めた。

「霊夢、貴女はいつも寝ていらっしゃるのね。もしかして眠り病だったりするのかしら?」

瞬間馬鹿にされたと感じたのだろう、霊夢のほほにかっと熱い血が上ったかと思うと、薄赤く上気させた。

「そんなわけはないわ。ただ、人里から歩いてきたから疲れただけよ」と霊夢は少し怒ったような調子で言った。

「そんなに大きな声でがなり立てなくても聞こえますわよ」と黒服の婦人が言った。「わたくしはとても臆病なんですから、そんな声を出されたら、震えてしまいますわよ」

そらぞらしい調子の言葉と、瞳の奥のぞっとするような冷たい光に、霊夢の心の中はささくれ立っていた。彼女は咄嗟に地べたの荷物に手をかけると、そそくさと立ち去ろうとする霊夢の手を取ると、婦人は獣道から外れて森の中へ誘うのだった。

「そういえば、名前を言っていなかったわね。私は小泉菫と申しますのよ」と今思い出したかのように彼女はそう名乗った。

「博麗霊夢よ」と霊夢は面倒くさそうに返事をした。

菫は知っているわよと言いたげな身振りを見せると、どうでもよさそうに「そうなんですわね」と答えただけだった。

霊夢は菫と並んで歩いていた。森の中を歩いているはずなのに、そこは見覚えのない場所だった。木々に囲まれ薄暗いはずの場所なのに、そこは明るかった。彼女の、まっすぐな美しい黒髪の上に燦々と太陽の光が降り注いでいた。

「藍子や！　レモネードソーダを用意しなさい」と菫が下働きの女に指示を出していた。

霊夢は家の中に入った。外は日本家屋だったが、中はいかにもな洋間の作りだった。馴染みのない景色の広がりに息が詰まるような気分を感じていた。雨戸を閉め切っているせいだろうか、外からの光がほとんど差し込んでいない。ランタンの仄かな灯りがぼんやりと部屋の中を照らしていた。風通しは悪いはずなのに、部屋の中はひんやりとしており、どことなく息苦しさが感じられた。霊夢は、それを我慢するように、グラスを傾けるが、酸っぱいレモンの味など全く感じなかった。しかし、飲み物を飲んだことで幾分か落ち着いたのか、ようやく周囲の薄暗さにも眼が慣れてきた。壁紙の白と紫、カーテンの黒と金色の刺繍が見分けられた。ちょうど、先ほどまで給仕をしていたはずの女が、盆を持って下がっていく後ろ姿に気づくことができた。この暑いのにもこもこの毛皮を身につけているように見えた。

「美味しいわね、これ」と霊夢は全く味が感じられないながら、とりあえずそう言った。
「そう言っていただけると嬉しいわ、霊夢」
菫は少し離れたソファに身体を横たえるようにして座っていた。二人の間には、香炉から立ち上っている香の煙が漂っていた。松脂と安息香の香りが霊夢の鼻をくすぐる。
「具合は良くなったかしら、霊夢」と菫は気遣うような口調でそう言うのだが、霊夢にはまったく心が伝わってこなかった。
「おかげさまで。……まさか本当にあんたは親切心だけで私をうちに上げたわけ?」と不審さを隠さずに霊夢は尋ねた。
「ええ、そうでしてよ。ほかに何か理由があるとでも?」
逆に菫から問い返されて霊夢は答えに窮す。
「もし、貴女が嫌でなければ、これからもこうして私の家を訪ねてくれると嬉しいわ」
この酷暑の昼下がり、レモネードソーダをご馳走になって以来、霊夢は足繁く小泉邸に通っていた。勿論、魔理沙には秘密で。話しても良かったのだが、何となく後ろめたかったのだ。そもそも、菫と魔理沙が友好的な関係を築けるとはとても思えなかった。ただそれだけでなく、親友に秘密を抱えている、その昏い楽しさも話すことを遮らせていたのである。
そして、菫の元に通っていることを霊夢は別に苦労せずに魔理沙に隠すことができた。し

かし、霊夢に対する友誼に燃えた彼女が、わざわざお節介をすることは予想できたので、できる限り隙は見せないつもりだった。

だが、普段は素っ気ない霊夢が、ここのところ柔らかい態度で接してくることに魔理沙は気づいていた。いわゆる恋人を裏切ったときに見せる親切さと同じものが、霊夢の中に潜んでおり、かえって身辺に疑惑の影を漂わせてしまっていたのである。そのことに霊夢は気づいておらず、魔理沙もまたただの友人である以上、二人の関係に変化は見られなかった。

ここしばらくは、魔理沙との模擬戦を早めに切り上げると、霊夢は小泉邸へ通い詰めていたのである。無愛想な霊夢の訪問を、菫は快く迎えてくれた。薄暗い部屋に招かれて、特に何をするでもなく過ごすひととき。それは彼女にとって心地よいものだった。

菫は魔理沙にはない妖しい魅力を湛えていた。それはきっと魔理沙が大人になっても得ることはできないであろう。毒婦というのはこういう女のことを言うのだろうか、霊夢はそう思ったことがある。人を魅了し、堕落させ、そして破滅に追い込む魅力。菫から感じるのはそういった危うい美しさだった。それが分かっていてもなお、霊夢は彼女の家に通うことをやめられないでいた。

そんな穏やかな日に影が差したのは、菫の言葉からだった。

「霊夢、貴女は何を望んでいるのかしら？」

突然の言葉に霊夢は驚いた。そういった言葉を掛けられたのは初めてだったからだ。しかし、言った当の本人である菫はゆっくりと煙草をくゆらせて、思わせぶりに窓の向こうへ視線を向けていた。

霊夢は発言の意図が分からずに、ただ、菫をじっと見つめるだけだった。年齢すら分からない。見た目は女盛りで、とても美しく見える。だけど、その横顔には深い年輪を思わせる影が常に差している。それ以上に、心の底が全く読めなかった。

「貴女の心が知りたいだけよ」と、急に横から声がして霊夢は心臓が止まるかと思うほど驚いた。考え込んでいたとはいえ、菫から視線を切ったつもりはなかった。しかし、気づいた瞬間横に座っているのである。これで驚かない方がおかしいだろう。

そんな霊夢の反応を見て、菫は悪戯っ子のような微笑みを浮かべていた。甘ったるい香水の香りが彼女からして、霊夢は頭の中がぼうっとしてきていた。

「別に、何も、ないわよ」

「本当に？」

涼風に揺れる白い花々――玉簾というらしい――から眼をそらさずに、菫は再びその手を霊夢の手の上に重ねると、彼女の思惑など一切気にもせずに、自分の利己的な欲求のために、ギュッと握りしめた。

ほっそりとしていながら、力強い手に捕らわれると、霊夢はまるで自分の全てをさらけ出してしまったような気分に陥る。
「……私は一人で空を飛びたいのよ」と、これまでずっと抱え込んでいた言葉がつい漏れてしまっていた。
「ところでどうして貴女が飛べないのか分かるかしら?」と菫が尋ねてきた。
「どうせ、修行不足とでも言いたいんでしょ」
「違うわよ。……ある意味そうかもしれないけれど。貴女が考えているものとは違うわ」
そう言った菫の口元には嫌らしい媚笑が浮かんでいた。
「じゃあ何なのよ」
「貴女には空を飛ぶ力が備わっているわ。だって巫女なんですもの。……だけど、今は無理よ」と菫はかぶりを振った。
もったいぶった態度に霊夢は苛立ったように「なんでよ?」と叫んだ。
「だって、貴女を地上に繋ぎ止めている鎖があるから」と、菫は言った。
そして菫は、「貴女を縛っている縁を解きほどいてあげるわ……」と言うと、ずずっと霊夢の方へ身体を寄せた。
菫は片手で霊夢の手首を押さえ、もう一方の手で彼女の襟に手をかけると、一気にはだ

けさせる。そして、自分の熱い手の中に、霊夢の裸の手を握りしめた。
「ちょっと、やめなさいよ！」と霊夢は、菫の手をふりほどこうともがきながら叫んだ。テーブルの上に乗っていた皿が落ちて、足下で嫌な音を立てて砕ける。霊夢は菫に怒りのこもった眼差しを向けるが、彼女は身動き一つせずにじっと見据えていた。そして、振り払われたその手は、霊夢を誘うように開かれたまま膝の上に置かれている。
菫の意図は明らかだった。思わず拒絶してしまったものの、だからといってその場からすぐに立ち去るということはできなかった。さりとてそれ以上進むこともできず、霊夢は蛇にらまれた蛙のように、行動することができないでいた。彼女は頭をたれ、暫く悩んでから顔を上げると、もう一度菫の瞳を見た。そこには官能の色が揺蕩っていた。
霊夢は一つ息を吸い込むと、鉛のように重い体を起こして、その肌をむき出した手を、菫の開かれた手に戻したのだった。
霊夢は夢を見ていた。ふわふわとどこまでも高く飛んでいく。何ものにも遮らず、ただ空へ飛翔する夢。その心地よさに陶酔し、彼女は全身をその快さに委ねていた。
次に、霊夢が目覚めたのは天蓋付きのベッドの中だった。素肌に当たるシーツの肌触りが心地良い。視線を上げると、上体を起こしていた菫と目が合った。タオルケットで胸の辺りは隠しているが、すらりと伸びている腕や足は精巧な白磁のようだった。

「おはよう、霊夢。よく眠れたかしら？」と、何事もなかったかのように菫は話しかけてくる。しかし霊夢は、昨夜のことを思い出して無言で顔を朱に染め上げるのだった。

「可愛かったわよ。初めてだったのかしら？」

小鳥の囀りのように菫が楽しげに話せば話すほど、霊夢は心が沈んでいくように思われた。それは失ってはならない何かを失ってしまったせいだろうか。それとも、本当に捧げたい相手ではなかったからだろうか。そもそも何を失ってしまったか、彼女自身分かってはいないのだ。たあだ、時がたつにつれ、霊夢の心には喪失感の嵐が吹き荒れ始めていた。

「どうしたのかしら霊夢？」と、菫がいぶかしげに顔をのぞき込んできた。

目の前で輝くばかりの金糸が揺れた瞬間、霊夢ははたと魔理沙のことを思い出していた。そして、自分が取り返しのつかない道に踏み込んでしまっていることにようやく気づいた。

小泉邸から外に出ると、すでに日はかなり高くなっていた。雲一つない青空で、忌々しいほどに太陽が照りつけてきていた。鬱陶しそうに黄色い太陽を睨み付けると、霊夢はそそくさと神社への家路についた。彼女自身不思議になるほどその歩みは軽かった。足取りだけではない、身体全体が軽くて、このまま飛べるんじゃないか、そう思うほどだった。だがその一方で、神社が近づいてくるごとに妙な胸騒ぎを感じていた。最後の階段を上るときなどは、段を一つ踏むたびに、怖気が立つような感じを覚えていた。

「昨日はお楽しみだったようね、霊夢」

階段を上りきり、石畳に足をかけた瞬間に霊夢は声をかけられた。彼女の視線の先には、微動だにせずに自分を見据えている魔理沙の姿があった。夏の終わりの太陽が最後の力を振り絞り、彼女の金色の髪をきらきらと輝かせていた。ざわざわと木々を揺らす風は徐々に秋の匂いを感じさせる涼しさを帯びている。

「何の、ことかしら?」と霊夢は即座に返事をすることはできた。

「別に隠す必要はないわよ。あの黒服の婦人のところでしょう?」

霊夢は太陽の輝きと、頬を撫でていく涼風が急に憎らしくなっていた。

「なんの……、何のことかしら、魔理沙? よくわからないわ」

魔理沙はその言葉に真面目に答えるほど愚かではなかった。

「霊夢は知らないかもしれないけど、あの女の使いが私のところにやってきたのよ。そして、私に洗いざらい話してくれたわ」

霊夢は魔理沙の告白に打ちのめされてしまっていた。しかしそれ以上に、なぜ堇は魔理沙に自分たちの関係をばらさせたのか分からなかった。

「そう、じゃあ魔理沙は知っているのね。ところで、何の話を聞いたのかしら?」

「霊夢のことについてよ。ここ最近の話。でも、少し前から変だとは思っていたわ……」

それだけ言って魔理沙は口を噤んだ。霊夢は、金色の瞳の下、快活な彼女の頬の辺りに、涙が流れたくっきりとした痕跡を見つけて、少し憂鬱な気持ちになった。

「そうだったのね……」と、霊夢は言った。「じゃあ、話は早いわね。でも、別に――」と話しかけようとしたところで、魔理沙に遮られた。

「私に霊夢たちの恋愛物語を聞かせようというつもり？　それには及ばないわ。だいたいそのことは知ってるって言ったでしょ」

魔理沙の厳しい言葉の調子に、霊夢は自分がこれから話す言葉に、一切の自責の念が欠けていたことに気づいてしまった。

『私は何を言うつもりだったのかしら。全てを知っている魔理沙に。身体の関係は持ったけれど、気持ちは渡していないなどと、馬鹿みたいな言い訳をしてどうするのよ。それ以上に、こんな時に気持ちを伝えるなんてことができるはずないじゃない』

思考の袋小路に迷い込んで黙り込んでしまった霊夢を一瞥すると、魔理沙はどこか吹っ切れた表情で霊夢に背を向けた。

「霊夢が本気だったら、私から言うことは何もないわ。……じゃあね、さよなら」

それだけ言って、そのまま箒にまたがると神社を後にしようとした。

「ちょっと、魔理沙、待ちなさいよ！」

呼び止めたところで、掛ける言葉はないのだが、霊夢は思わずそう言ってしまっていた。そして、そのまま駆け出すと、魔理沙の手を掴もうとする。しかし、今まさに風を切って飛び立とうとする彼女を捕まえることは不可能だった。

そう、不可能なはずだった。

その時、霊夢の手は魔理沙の手を掴んでいた。彼女の足は空を踏みしめていた。

「え？　霊夢、どうして飛べるの？」

手を掴まれたことよりも、霊夢が飛んでいることに驚いたのだろう、魔理沙は振り返ると呆然と彼女を見つめていた。

だが、尋ねられたところで、霊夢もその答えを見つけることはできていなかった。ただ、その事実を噛みしめるように感じるだけだった。

そこではたと菫の言葉を思い出した。そして、本当にどう答えを返すべきかにも気づいていた。何ものにも囚われず空を行けるようになった霊夢は、その姿を見せるために、そして問われた言葉に、答えを差し出すために、彼女の元へと向かった。

人里から博麗神社に抜ける参道の途中、楡の大木のそばから藪の中に入っていけば、見えるはずだった。あの暑い夏の日に初めて訪れた時から幾度となく訪ねたそこは、今や跡形もなく、ただの草むらでしかなかった。霊夢は周囲をきょろきょろと見回す。この夏の終わり

を過ごした場所の、僅かな面影を探してまわるのだが、全く見当たらなかった。初めから何もなかったかのように消えてしまっていた。

＊　＊

霊夢が空を一人で飛べるようになった次の日、魔理沙が神社を訪れた。紫色のやぼったいローブではなく、ちょっとお洒落な黒と白のエプロンドレス。いかにもな魔女の帽子をかぶった彼女は、さばさばとした表情で霊夢の前に立った。

「よう、霊夢。私は家に出ることにしたぜ」

聞き慣れない男っぽい言葉で話す魔理沙。話し方だけではない、明らかに目の前に立っている彼女から受ける印象は変わっていた。それまでの、良いところのお嬢さんが湛えている甘ったるい空気は消え去り、無法者たちに共通する荒んだ雰囲気を漂わせていた。

『ああ、そういう道を選んだのね』と霊夢は、変わり果ててしまった友人の姿を見て感傷を覚えてしまう。かつてのかわいい魔理沙と会うことはもはや二度とないだろう。しかし、そ

れがどうしたというのだ。今の彼女は、自分が望んだ通りの道を歩んでくれている。

「霊夢、私はいつかお前を――」

魔理沙は何か言いかけたところで口を噤んだ。そして、魔女の帽子を目深にかぶり直すと、後ろ手に挨拶をしながら境内を後にした。

もう霊夢は玄爺の背を借りなくても、自由に空を飛ぶことができる。けれど、その代わり失ったもののいかに大きいことか。彼女を地上に繋ぎ止めていた縁は全て断ち切られてしまっていた。

だが、彼女は不思議なほどに寂しさを感じていなかった。《了》

パンプキン　キスの序奏曲

バラバラになったフランドールがあったので、メイドたちは大急ぎで片付けを始めました。その頃、フランドールは蛇口に歯磨き粉を近づけていました。「うなぎを掴まえるには歯磨き粉がよいですよ」と聞いたからです。なるほど、水道管に歯磨き粉をつけると水道管からうなぎが顔を見せました。

フランドールの足下ではくるくると魔方陣が回っていて、魔方陣を見た水道管もくるくると回っていました。そうするとうなぎもくるくると回って、水道管はくるくるくるくると回って、壁の奥へと逃げていきました。

フランドールは水道管の逃げそうな所へと向かっていきました。庭の水場へと行ったのではないかと思ったのです。たしかに、庭の蛇口はとても愛らしい笑顔の子で、水道管なら誰だって会いたくなることでしょう。

外は太陽がきらきらとしていたので、フランドールは大急ぎで太陽の光をねじ曲げました。掴まえた光を右に曲げたり、左に曲げたりすると、太陽が酔っ払ったかのように回り出しました。回り出す太陽が出す光は光線ではなく粒となって、蛇口に黄色い水銀のような染みを残しました。

「ひどい」

蛇口が言いました。よく磨かれた真鍮で作られた顔は蛇口にとっても自慢だったのです。

蛇口の近くではこうもりたちが踊っていました。こうもりの耳で聞くと、太陽の粒が地面を叩く音は、ジャック・ディジョネットの叩くドラムのように素敵な音でした。

「ごめんなさい」

フランドールは申し訳なくなって、しょんぼりとしながら戻っていきました。背中では蛇口が臍を曲げていて、向こうではメイドたちがほうきとちりとりでバラバラになったフランドールを片付けていました。

うなぎ入りの水道管もしょんぼりしていました。せっかく、逢い引きに来ていたのに……染みの付いた蛇口は少しも魅力的ではなかったためです。

「あなたも、謝っておいてね」

フランドールの目の前にフランドールがいたので、くるくると魔方陣を浮かべたフランドールは魔方陣のついていないフランドールに向かって言いました。

ずっと喉が渇いていました。だから、水道に向かっていたのです。出来ればうなぎを捕まえて、うなぎのゼリー寄せと一緒に飲みたかったのですが……水道管は逃げ出してしまい、うなぎもどこにいるのかわかりません。しかたないやと、カクテルでも飲もうと思いました。

「フランドール様」

メイドがいました。フランドールの足下ではくるくると魔方陣が回っています。フォーオ

ブアカインドは出したままでした。
「何か、飲み物をもらえないかな」
「もちろんです。そうですね、ブルー・イン・グリーン風はどうでしょう？」
メイドの目の前にはカクテルメロトロンがありました。とても緻密な設計で作られた道具で、曲を奏でるとカクテルが出来るのです。カクテルメロトロンには鍵盤ごとにリキュールとテープが備え付けられていて、叩くとリキュールと音が出るようになっています。
「マイルス・デイビスは飽きちゃった」
「では、少し新鮮な味付けもありますよ。マイシャです」
「何度も飲んだよ。マイルス風は全部飲んだんじゃないかなあ……」
「いいえ、これはエリカ・バドゥが添えられているのですよ」
メイドがテープを叩くと、アンチモンをつけ込んだリキュールが流れて、エリカ・バドゥの歌声が流れました。
「それは面白そうだね」
「ええ」
メイドが鍵盤を叩き始めると、アンチモンの匂いにつられて水道管がやってきました。アンチモンはめっきに役立つので、水道管にとっては大好物なのです。

161 キスの序奏曲

「あれ」

メイドは首を捻りました。

「プリペアド・ピアノのテープなんてつけてないはずですが……」

かちかち、かちかちと打楽器のような音がしました。降り降ろされたハンマーはテープを鳴らせませんでした。

「あ、水道管！」

フランドールはカクテルメロトロンの中に水道管がいるのを見つけました。水道管の中にうなぎがいます。あんまりにも回っていたためでしょう、うなぎはよく煮込まれて、しっかりスライスされていました。冷やせば見た目にも美味しそうなゼリー寄せが出来るはずです。

「ううん。やっぱりアンチモンはよくないのかもしれませんね。水道管がきちゃうなんて」

「いいんだよ、ずっと捜してたの。お姉様と一緒に食べよう。あとで、部屋まで運んできてくれる？」

「もちろんです」

メイドが頷くと、こうもりが入ってきました。部屋全部がこうもりになって、こうもりたちが集まるとレミリアになりました。

「あらお姉様。うなぎを食べましょうよ」
「うなぎは素敵ね。でも、ちゃんとあなたを片付けなきゃ。さっき、フランがずっと蛇口に謝ってたわよ」
「いけない！　うなぎを捜すために魔法を使ってたんだ」
フランドールは大急ぎで庭に向かいます。空から落ちてくる光よりももっと早い速度で蛇口に近づいて、フランドールを壊しました。フランドールが戻る頃には、魔方陣は消えていました。うなぎも冷めていました。
レミリアとフランドールは愉快そうにうなぎを食べていました。回りの空気は少し、不満そうな顔でした。うなぎのゼリー寄せという物は醜い料理で、この世界の全部は、綺麗な物以外は消えてしまえばいいと思っているからです。
だから、うなぎのゼリー寄せが消えると、空気は思わず曲線を描きました。目に見えるほどに空気は喜んでいました。いえ、すぐに顔をしかめていました。目の前に、汚い毛に覆われたこうもりがいたからです。
こうもりは大慌てで逃げ出しました。フランドールはレミリアの話が面白くて、震えるようにして笑っていました。金色の髪の毛が一本抜けて、発光ダイオードの光を受けて透き通った光を放っていました。それがあんまりにも綺麗だったので、天の上の神さまは重力を説

得して、天へと引きあげました。独りぼっちの髪の毛がさみしそうだったので、神さまはレミリアの髪の毛も天へと引きあげました。こうもりは一人で逃げていました。こうもりも、髪の毛も、レミリアであったものではあるのですが――こうもりは醜く、髪の毛の光は美しかったためです。こうもりが逃げていると、どこか暗い場所に入りました。石に潰されたフランドールを見ました。フランドールの死体は腐っていて、死んでから時間が経っているように思えました。それか、腐ってしまったから石に潰されたのでしょうか？　こうもりの回りの壁は腹立たしそうに迫ってきて、こうもりを押しつぶそうとしました。そうすると、腐ったから潰されたのだと思えました。

それから先に、部屋がありました。「こんな所に部屋はあったのだろうか？」とこうもりは不思議に思いました。実際、この部屋は世界の全部と同じように、五分前に出来たものではあるのですが。

部屋の中に、肖像画が見えました。ティエリ・アンリ（Thierry Henry）がレッドブルを飲む姿が描かれていました。その下にはちゃんと彼の名前が書いてありました。

「こんばんは」

肖像画の下には椅子と机とこの上なく美しい物がありました――フランドールがいました。

「こんばんは」

とても醜いもの――こうもりも挨拶を返します。
「あなたはお姉様なのかな」
「どうでしょう？　あなたはフランドールさんですよね」
レミリアの爪切りの中に溜まった爪を「レミリア」と呼ぶのならば、こうもりはレミリアですし、フランドールはフランドールです。この辺りは哲学なので、フランドールにもこうもりにもよくわかりません。
「私は、フランドールかな。でも、魔方陣は出せないし、四人にもなれないし、ちょっとお札が当たると粉々になっちゃう」
そう呟いたフランドールの手の中にはジャン＝ソール・パルトルの本がありました。
「私は、レミリアさんではないと思いますよ」
こうもりは首を振りました。アンリは頷いていました。
「ところで、フランドールさん、その本はどんな本なのでしょう？」
「北京の秋っていう名前の本なの」
「そうすると、北京や秋について書かれているのですかね」
「ううん、北京とも秋とも文字ともネオンとも関係のないことが書いてあるの。ええと、量子重力の変換解釈学について書いてあるんだ」

量子重力の変換解釈学というものが何かは、こうもりにはよくわかりませんでした。

「むつかしそうな内容ですね」

フランドールにもよくわかっていませんし、パルトルはそれよりももっとわかっていません。でも、パルトルはそういうものこそが哲学だと思っています。だから、パルトルならこうもりがレミリアかどうか、数式で答えを出してくれるでしょう。あいにく、ここにパルトルはいません。世界は五分前に作られましたが、五分前にも十分前にも世界のどこにもパルトルはいませんでした。

もちろん、何もおかしくはありません。机の上に「醜いやつらは皆殺し」という本がありました。ヴァーノン・サリヴァンという人が書いた本です。あらゆる世界のあらゆる場所にヴァーノン・サリヴァンなんて人はいませんでしたが、それでも本はあるのですから。

「むつかしいけれど……むつかしくもないの。だって、何にも意味がわからないから。ねえ、それよりあなたのお名前はなんと言うのかしら？」

「名前は……」

ないですね、とこうもりは言いかけましたが、よくよく考えれば、なければつければいいのだと思いなおしました。

「ヘンリー（Henry）って言う名前はどうでしょう？」

「今つけたのかしら？」

「ええ」

「だったら、私はアンリ（Henri）さんの方が好きかな……ううん、女の子の方が素敵だと思う。アンリエット（Henriette）さんはどうかな？」

それならヘンリエット（Henriette）の方がよいなとこうもりは思いました。アンリエットだと、どうも無駄があるような気がしたのです。

「わかりました。じゃあ、私はアンリエットです」

とはいえ、自分の全部が無駄なものだとはわかっているので、アンリエットの方がふさわしいと思い直しました。

それから、アンリエットとフランドールはほとんど何もしていませんでした。いくつか本はあったのですが、どれもよくわからない本ばかりでしたし、フランドールはともかく、アンリエットの大きさでは本を掴むことも出来ませんでした。

二人が何もしていなくても、世界は何かをしています。銃を逆さまに吊していると、下から銃が生えてきます。生えてきた銃の先端からは青い薔薇が顔を出してきます。銃というのはこの上なく無駄なものですが、青い薔薇には使い道があって、青い薔薇からはEau Parfumée（Eau Parfumée）匂いのする水が取れます。緑茶に、いくらかのオレンジを絞ったかのような爽やかな匂いが

します。これは本当に重要で、フランドールはいつも匂いのする水をアンリエットに拭きかけていました。これだけは欠かせなかったのです。なぜかと言えば、世界にとって醜いものというのは常に不機嫌を生み出すものだからです。アンリエットの全身の毛には毛じらみがいつでもわいています。毛じらみでもこんなにも醜いところにはいられないと思って、ひっきりなしに飛び出てきます。飛び出た毛じらみたちがお互いを見てしまうと、お互いの醜さに耐えられずに死んでしまいます。そうすると床は毛じらみの死体で山が出来てしまいます。

幸い、匂いのする水をかけておくと、その匂いに満足して、毛じらみたちも眠ります。

もっとも、それではキリがないと思って、二人は神さまを呼ぼうとしました。いろんな神さまに頼んでみましたが、どうもたくさんのお金がないと神さまは来てくれないようでした。1ドゥブルゾンも持っていない二人は神さまを呼べませんでした。

仕方がないので、二人は神さまを作ることにしました。二人は理性を崇拝することにしました。理性の効き目は確かなもので、毛じらみは全ていなくなりましたし、アンリエットはとても可愛い女の子になりました。レミリアの姿になりました。

「ありがとうございます」

二人は言いました。理性はにっこりと笑って答えました。

「そんなにむつかしいことではないのですよ。みんな、当たり前のようにやっていることじ

ゃないですか。どんなに醜いものでも、あなたたちは可愛らしい女の子にしてしまうでしょう？　醜い化け物を、あなたたちは愛しているでしょう？」

「醜いものは、あんまり愛せないんじゃないでしょうか」

「だから、綺麗に直すのです。茶色の肌の神さまは白い肌にしましたし、おぞましい鬼は桃色の髪の女の子にするのです。気狂いの女の子は、愛らしい妹にするのです――それと、女の子は全部、白い肌にするのですよ」

理性の言葉を聞くと、二人は頷くしか出来ませんでした。二人とも、醜い女の子や黒い肌の人を見たことがないのです。なぜって、世界にそんなものは存在しないからです。

もっとも、理性はそこが不満なのでしょう。理性はトランペットを取り出すと、デューク・エリントンが作ったブラック・ビューティという曲を奏でました。十二音技法を用いて編曲されたその音はとても緻密で、退屈で、理性的でした。

だから、最後にボリス・ヴィアン風に吹こうとしたのがよくありませんでした。理性はまるでつまらない映画を見た後のように顔をしかめると、心臓を押さえてうずくまりました。心臓を抑えてうずくまるさまは醜く、それを見たトランペットは思わず先端から弾を撃ち始めました。らっぱ銃の精度はあまりよくないので、五発撃って五発とも外れてしまいました。トランペットはミニエー銃を持ってきました。トランペットはボリス・ヴィアンの制作した

レコードをかけ始めました。マイルス・デイビスがドライブウェイのスリルを奏でていました。理性はエレベーターに乗せられて死刑台へと上りました。サイクロトロンで加速されたかのように勢いよくライフリングを回った銃弾が、理性の頭と心臓と右腕と左腕と右足と左足を打ち抜きました。理性は死んでしまいました。トランペットは満足したかのようにチェット・ベイカー風のささやき声で歌を歌っていました。同時に、雷が鳴り響きました。

「大丈夫ですよ」

理性は言いました。雷は壁に当たって、とても複雑な化学反応を起こして、壁は理性になりました。複雑な化学反応のおかげで、理性と全く同じ原子の配列が生まれたのです。

フランドールはびっくりして、

「死んだんじゃなかったのでしょうか」

「でも、私は理性ですよ。あなたがフランドールなら、私も理性です」

フランドールは人に恋をしました。フランドールは人を憎みました。フランドールは気狂いでした。フランドールは素直な子でした。フランドールの胸は大きいものでした。フランドールの胸は小さなものでした。何百何千何万ものフランドールがいました。その全ては現実です――なぜって、それは書いた人が想像したものだからです。なぜって、それは全部綺麗なものだからです。百億人のフランドールがいれば、百億回の人生があります。その全部

は、デューク・エリントンの音楽やクロエのかばんのように美しいものです。

フランドールにとっても、アンリエットにとっても、理性にとっても、ミニエー銃にとっても、この世界は現実です。それは全て美しいものなのです。なぜって、美しくもないものは全て消え去ってしまうからです。

「ハリール・ジブラーンは言いました。我々は美を発見するためだけに生きている、その他全てはそれを待つ――」

理性が話し続けていたので、トランペットは殺人槍を持ってきました。ミニエー銃は心臓抜きを持ってきました。理性が話し終えるより先に、理性は心臓を抜かれて殺されました。

「もう、やめてよ」

フランドールは悲しくなって、そうするとトランペットもミニエー銃も消えてしまいました。美しくないものは全て消えてしまうからです。時には、美しくないものも世界には混ざるのですが、そう言ったものは美しいものを美しいと思わせるためだけに存在するので、やがては消えてしまうのです。

だから、もう世界のほとんどはなくなってしまって、フランドールとアンリエットだけが残されました。あとは一枚だけ壁があって、ロベール・ドローネーの作品のように歪にねじ曲がったエッフェル塔が描かれていました。こうもりに見える限りのあらゆる色の絵の具が

エッフェル塔の上に飛沫のように付いていて、その上に４２という数字が描かれていました。それは美しくないものの全てを詰め込んだ一枚の絵でした。

もう一つあるとすれば、それは時間です。時間が流れました。朝も昼も夜も時計もないので、どの程度の時間が流れたのかはわからないのですが、時間は流れていました。

「お姉様」

フランドールは言いました。

「私はアンリエットですよ」

「でも、お姉様だ」

フランドールがあんまりにも息苦しそうに言うので、アンリエットは思わず頷きました。

「そうですね、私はいつかレミリアの一部で、あなたも、フランドールの一部でした。だから、私たちはきっと姉妹なんでしょう」

アンリエットにはどうしてもそうは思えません。レミリアが無数に分裂した中の一欠片だからと言って、自分がレミリアだと言うのはあんまりにもおこがましいと思いました。それでも、アンリエットは頷きます。そうすると、フランドールがにっこりと笑うからです。

にっこりと笑いながらも、ぜいぜいとフランドールは息をしていました。ああ、私はこうもりなのだなとアンリエットは思ってしまいました。フランドールの息を聞いていると、肺

の中に何かがあるとわかってしまいました。それは睡蓮の花です。睡蓮の花で肺がいっぱいになれば、なにものだって死んでしまいます。

ただただもう、この世界には美しいものしか残らないので、死ぬとしてもそのような死に方になります。エッフェル塔の屋上にパルトルがいました。心臓抜きで胸を貫かれて、四角形の心臓がぱくぱくと音をたてていました。四角い心臓はエッフェル塔から浮かび上がり、フランドールの目の前に降り立つと紅いベッドになりました。キュプラで作られた天蓋が朝も昼も夜もない世界に穏やかな暗闇をもたらしました。

アンリエットは苦しそうに息をするフランドールを持ち上げて、ベッドの上へと寝かせました。フランドールが苦しそうになるたびに、その目は美しく感じられるように思えてしまいました。

「ありがとう」

そう言うと、フランドールはすぐに眠りに落ちました。

世界の全てはとても静謐でした。無響室のように静謐でした。どくんどくんどくんどくんとアンリエットの心臓が音をたてていました。フランドールの胸に耳をあてると、さらさらさらさらと睡蓮の花が泳いでいました。体の中から出る音以外何も聞こえない、静謐な世界でした。

173 キスの序奏曲

「私たちは、なんのために生まれてきたのだろう」

アンリエットは呟きました。その音は頭の中にだけ響いていました。この世に存在するあらゆる宗教と科学と同じように、アンリエットの頭はその答えを教えてはくれませんでした。エッフェル塔の下ではさまざまなことが起きていました。巨大な大砲が月に向けられていました。勢いよく飛んだ砲弾が月の左目にぶつかると、中から人間が降りてきました。

月の裏側にもロケットが降り立ちました。レミリアや咲夜や眼鏡をかけたメイドや色んな人が乗っていました。遙か下の所では、一人きりのフランドールが月を見上げていました。自分であるか、自分そっくりなレミリアを見て、なぜだかアンリエットは悲しい気分になってしまいました。どのくらいの時間、悲しい気分をしていたのかはわかりませんが――ずっとずっと悲しい気分でいると、エッフェル塔の向こうからコランという人が来ました。その手元には手帳がありました。不幸が起きる一日前に、それを予告するのが彼の仕事なのです。

だから、明日にはフランドールが死ぬのだとわかりました。明日には、と思った瞬間、目の前に時計とカレンダーがあることに気が付きました。もちろん、どちらも五分前に作られたのです。純粋で美しく濾過された世界にものが増えていきます。そうすると、ますますフランドールが死んでしまうのだと感じられてしまいました。

「……おはよう」

フランドールはいつの間にか目を覚ましていました。
「おはようございます」
アンリエットは答えて、それから、
「キスをしましょう」
と続けました。もし、精一杯にキスをすれば肺の中の睡蓮を自分に移せるのではないかと思ったのです。
「ええ」
フランドールは笑って、二人はキスをしました。世界の全部は二人以外全て消え去って、静寂が鳴り響いていました。デューク・エリントンに編曲された静寂はヌーベル・オルレアン風の色彩を帯びていて、本当に美しいものでした。
キスをしたとしても、睡蓮は消え去りはしません。移ることもありません。だから、それは本当に無駄なことなのです。アンリエットは唇を離しました。
「アンリエットと言う名前はやっぱり無駄な綴りな気がします。〝H〟なんてなくても読めるのに」
でも、とアンリエットは思います。無駄であったとしても、嫌いではないように感じられました。その目はずっとフランドールを見ていました。この上なく美しい目を。

175 キスの序奏曲

「お姉様」

フランドールは言いました。もう息なんてきっと出来ないような声で言って、笑っていました。

「お姉様、私は、このキスだけでも存在した意味はあると思えたな」

世界にはものが溢れていきました。そこは部屋になって、壁にはティエリ・アンリの肖像画が掛けられていて、二人を見つめていました。

壁に火が付きました。アンリの肖像画が燃えていきます。〝Ｈｅｎｒｙ〟と言う名前は〝Ｈ〟が燃えてしまって、〝ｅｎｒｙ〟となっていました。アッシュ（Ｈ）が消えたとしても、特別に読む上で不便ではありませんでした。Ｈの文字は灰（ａｓｈ）になりました。

「お姉様を見ながら灰になるのは、一人で月を見ているよりも、きっと素敵だよ」

火が回って、世界の全部が灰になっていきます。アンリエットは醜いこうもりに戻ってしまいました。炎に身を焼かれながらも、フランドールに口づけをしました。もう「きいきい」と鳴くしか出来なくても、お別れを言いました。灰になっても、フランドールの目は本当に美しいように思えました。燃えさかるエッフェル塔の向こうにトロッコがありました。トロッコは途中で二股に道が分かれていました。

右手にはフランドールがいて、左手にもフランドールがいました。

右手のフランドールはお姉様と一緒に着飾っていました。二人は笑顔を浮かべつつ、パーティーの主役を演じていました。左手のフランドールは、暗い中で一人でした。向こうには二匹のうさぎがいて、フランドールの影に怯えて大慌てで逃げていきました。フランドールはずっと一人でした。

「Il y a seulement deux choses : c'est l'amour, de toutes les façons, avec de jolies filles, et la musique de la Nouvelle-Orléans ou de Duke Ellington. Le reste devrait disparaître, car le reste est laid——」

トロッコが言いました。それは〝日々の泡〟という本の序文です。可愛い女の子との恋愛、それとデューク・エリントンの音楽以外の全ては消えてしまいます。だって、醜いからです。後ろにある全ては泡のように溶けていきました。トロッコも消え去っていきました。デューク・エリントンに編曲された静寂があらゆるものを飲み込んでいきました。

アンリエットは飛び出すと、逃げるようにしながら飛んでいきました。左に向かって飛んでいきました。

くるくると魔方陣を回せるフランドールや、こうもりになってもまた女の子になれるレミリアにとっては、アンリエットや魔方陣のないフランドールなんてのは意味が無いものかもしれません。アンリエットにとっての〝Henrietta〟よりも、もっと意味が無いのかもしれません。

それでも、アンリエットの中には確かに〝H〟があるように、フランドールという名前の中には、アンリエットとのキスが確かに存在しているのです。それは頭の中で生み出された――つまりは、何よりも強固な現実です。

精一杯に飛んで行くと、アンリエットの目の前にはフランドールがいました。

「どちらさまですか？」

フランドールが問いかけました。「きいきい」とアンリエットは言いました。その言葉が伝わったのかは、アンリエットにはよくわかりませんでした。困惑したかのように見つめてくるフランドールの濁った目を見て、このままかみ殺されれば幸福だと思いました。そうすれば、醜い自分は世界から消え去ることが出来るからです。それでも、アンリエットは美しいものを見ることは死ぬことよりも素敵だと思えました。

L'écume des jours

うたかたの日々の中で、確かに見たように。あの美しいフランドールの目のように。美しい目を見たいと願いました。《了》

近藤貴弥　見出された時

枝垂れた柳に雨が降り、葉の先を伝い、丸い雫となって池に波紋を広げる。雨はそのまま川の底へと沈み、橋の下を流れ、海へと運ばれていく。橋の上を行く人間達は皆、傘をさし、上へ歩みを進めたり、下へ向かう。皆、どこかへ急いでいるようで、誰も足を止めることはない。傘の内から枝垂れ柳に視線が移ることがあっても、その葉の先に流れる雫までは届かず、海の方を振り返ることもなかった。

稗田阿求は目覚めたと同時に、頭の奥に痛みが走り、顔を顰めた。何か考えようとしたが、見上げた天井がいつもより高く、白く、それまで自分が寝起きしている寝床と違うことに気付いた。汗ばんだ身体を起こし周りを見てみると、足元の方には黒檀の机があり、徳利が何本か置いてある。枕の方には床の間もあり、一輪の花が挿してある。開け放たれた障子の向こうには、広縁があり、藤原妹紅が椅子に腰掛け、窓の向こうを眺めている。妹紅の前の小さな机には、急須や二人分の湯呑みが置いてある。

阿求は何か思い出そうとした時、頭の痛みが激しくなった。徳利の中を飲んだのは阿求自身であっただろうか、妹紅だったような気もするが思い出せない。そもそも、ここはどこなのだろうか。どうして、ここに居るのだろうか。阿求は頭痛に耐え、どこまで思い出せるのかと記憶を探ってみたが、ここに来るまでのことが思い出せない。昨日は屋敷に居たのだが、そこから先のことが思い出せない。

181 見出された時

永遠亭に床の間もなければ広縁もない。阿求の屋敷も同じだ。幻想郷に床の間と広縁が同じ所にある家を、阿求は知らない。

妹紅が居るということは、妹紅と一緒に来たということだろう。少なくともこうして同じ所に居るということは、妹紅は何か知っているに違いない。

「ここは……？」

阿求の声に気付いたのか、妹紅はこちらを振り向いた。妹紅の目の周りに隈が浮かんでいた。けれども、妹紅の目は普段と変わらない優しい色を帯びている。

「外の世界よ」

阿求は妹紅の言葉を否定しようとしたが、窓の向こうには阿求が見たことのない景色が広がっていた。阿求は布団から出て、広縁の窓に歩み寄る。

海原は穏やかだった。白波が岩肌にぶつかり、飛沫が飛ぶ。窓を開けると、冷たい風が阿求の身体を包む。波の音が遠くから聞こえてくる。

「身体に障るわ」

妹紅はそう言って、窓を閉めた。妹紅はそのまま阿求を椅子に腰掛けさせ、急須に残っていた茶を淹れる。阿求は冷たくなった茶を飲みながら、妹紅の言葉を待った。何も知らない阿求は自然と妹紅が何か話してくれるだろうと思っていたが、妹紅は阿求が切り出すのを待

っているように、先程と同じように海を眺めている。

向こうの机に広がっている徳利、頭痛、妹紅の優しさ。これは昨夜、阿求が何かしたと物語っているには十分な証拠だった。恥を認め、妹紅に教えてほしいと言うべきなのだろうか。しかし、たとえそうだとしても、何故、外の世界に居るのか分からない。

妹紅に外の世界へ行ってみたいと話したことはある。しかしその時の言葉は、本当に外の世界に行きたいがために口にしたのではなく、「幻想郷縁起」の編纂が中々終わらず、息抜きがしたいということであったことは、妹紅も知っている。知っていなければ、「幻想郷縁起」の編纂が終わったら、と答えることもなければ、阿求が頬を膨らませることもなかった。

妹紅が阿求に黙って、阿求を外の世界に連れて行くことを計画していたとしても、阿求がここに来るまでの道のりを覚えていないのはおかしい。阿求の知らない間に何かあったことは明白だった。

「何かあったんでしょうか？」

「何もなかったのよ」

「でしたら、どうしてこんな所に？」

「忘れたの？　約束したじゃない」

「そんなこと……」

183 見出された時

「思い出せないのは不安？」
「今までなかったことですから」
今まで思い出せないことは時々あった。覚えている事柄が莫大なため、思い出そうとする記憶の手掛かりが脳に溢れ、整理に手間取ってしまい、思い出すのに時間がかかってしまう。今回の思い出そうとしている記憶の手掛かりが少なく、妹紅と関係している記憶を洗い出しても、現状と一致しない。
何か知っているであろう妹紅は何故、何も教えてくれないのだろうか。妹紅にとって、阿求が思い出すことがまずい何かがあるのだろうか。早急に思い出さなければならない思いに駆られるが、この部屋を見渡しても思い出せない。窓から外を眺めても、海原が広がっているだけである。外に出れば、何か分かるかもしれないが、外に出るのが恐ろしい。ここは阿求の知っている幻想郷ではなく、外の世界なのである。何かあった時、阿求の身を守ってくれる者はいない。
唯一、守ってくれるであろう妹紅と一緒に出掛けることも考えたが、今の妹紅は信用できなかった。もし、阿求が全てを正確に思い出せば、妹紅の手を引き、外の世界がどうなっているのか探索に出たことだろう。沢山のことを見聞きし、幻想郷に戻った時に一冊の本にすることも有り得ただろう。

妹紅を信用できないと思った阿求だが、阿求をここに連れてきたのは妹紅であり、記憶の手掛かりは妹紅しかない。妹紅が信用できない今、妹紅の口から語られる言葉を信用していいのだろうか。妹紅の言葉を受け、空白の日時が、妹紅の都合の良いように形作られていく可能性はある。妹紅がそんなことをするわけないと思っているのだが、ならば何故、阿求の尤もな疑問に答えてくれないのだろうか。妹紅からでは言いにくい何かが、昨夜あったのだろうか。

机の上にある徳利や頭痛や気怠さや微かな吐き気から、酒に酔い、粗相をしたのは起きた時から分かっていたことなのだが、それでもそれほどまでに沈黙を貫く必要はないのではないだろうか。覚えていない阿求がそう思うだけで、一部始終を見ていた妹紅はそんなことないのかもしれない。阿求は恥を忍び、訊いた。恥の中には、妹紅の言葉を皮切りに思い出すことがあるだろうという期待も混じっていた。

「私、何かしたんでしょうか?」

妹紅は阿求の顔を見て、そこに恥以外の感情が帯びているのを確認すると柔らかい調子で教えてくれた。

「ええ。色々なことを話してくれたわ」

「どんなことだったのでしょうか?」

185 見出された時

平静を努める阿求だったが、妹紅の目の隈を見ると恐ろしかった。柔らかい声音で教えてくれる妹紅は、阿求が眠っている間、眠らなかったことだろう。その原因が阿求にあるというのに、妹紅は一切、阿求を責める気や怒りをぶつける気もなかった。阿求の心身を気遣うように、見守ってくれている。恐ろしいぐらい優しいのだ。一体、昨夜の阿求は妹紅に何を話したのだろうか。

「楽しかったこと、『幻想郷縁起』の編纂は大変だったこと、でもそれでも楽しいことは見付けられたこと……沢山の思い出を話してくれたわ」

「ここに着いてからのことは？」

妹紅の言うことは、幻想郷でも話せることだった。外の世界に来てまで、昨夜の阿求は何故、そんなことを妹紅に話しているのだろうか。妹紅と話したくて、そんなことを口にして、本当のことを話す準備をしていたのではないだろうか。

「それは私の口から言えないわね……」

妹紅は露骨に阿求の視線から逃れるように、海を見た。妹紅の頬に生じた朱に、阿求は追及を拒まれたような気がした。気がしたのではなく、それ以上、訊くのが途端に忍びなくなった。阿求は自分の予想が当たったようで妹紅と同じように頬が熱くなった。自分の記憶が思い出せないのは気持ちの悪いが、妹紅を辱めるのと同時に、自分自身を辱めるのは、阿求

一人だけの気持ちの悪さを上回るものだった。

海は絶えず波を起こし、飛沫を上げる。波の動きを見ると、騒がしい胸や熱い頬が不思議と落ち着く。頭の底、胸の底から冷たいものが生まれ、波の動きと呼応するかのようにゆっくりと全身に広がっていく。海を見たことのない阿求がそんな落ち着きを感じるのはおかしなことだったが、阿求は御阿礼の子として九代目である。先代や先々代の思いが長い時を隔てても、どこかに残っているのだろう。しかし、海という限定されたものになると、その思いを有しているのは、海を見ていくつかの和歌を書き留めた阿礼や阿一の二人しかいない。

彼等のことを思うと、阿求は今朝見た夢のことを思い出した。柳から落ちた雫は今頃、もう大海原を旅しているところだろうか。雫はどうなるのだろうか。海の底に沈み、いつしか雫だったことすらも忘れて、深海という暗い所に閉じ込められてしまうのだろうか。あるいは、人間の家庭に辿り着くのだろうか。自然の内に落ちるか、人間の内に辿り着くか、どちらであれ、もう雫という名前も丸い形も見付けられないことだろう。名前だけではなく、この雫が遠い地から旅を続けてきたことすら知られることはない。

そんなことを思い出していると、阿求の目の前に広がる海がぐっと近付いているように感じる。打ち上げられた飛沫が再び海の内に落ちるのすら、鮮やかだった。いつの間にか雲の切れ間から陽の光が降り注ぎ、白波が一層白く、岩に飛び散る波の一粒一粒まで見て取れる。

187 見出された時

その一粒に、不安げな表情をしている阿求自身すら見えた。
阿求はまるで自分がまだ夢の中にいるかのような浮遊感を味わい、妹紅に縋るようにこういう言葉を投げた。
「なんだか、まだ夢を見ているようです」
妹紅は茶を啜り、阿求を見た。鶏の鳴き声が部屋に響いた。
「夢、なのかもしれないわね」
妹紅はそう言って、阿求の頬に触れた。阿求の頬に触れる妹紅の顔に慈しむようなものが広がり、阿求が声をかけようとした時、妹紅に頬を引っ張られ軽い痛みが走った。
「現実だったわね」
「痛いです」
「安心した？」
手を離し笑う妹紅に、阿求は疑問を懐いた。阿求の言葉を聞き、妹紅は阿求に現実を認識させるような行為に出たが、あの沈黙の間に妹紅はもっと別のことを考えていたように思う。頬の痛みが現実だと教えてくれたが、この痛みすら夢の中の出来事なのかもしれない。阿求は夢の中で夢を見て、まだ夢を見ている。妹紅は勘付かれないように、阿求に現実だと錯覚させている。

いつから、阿求は夢の中の夢にいるのだろうか。阿求のこの思考すら夢の中の一部であり、現実ではまだ眠っているだけなのではないだろうか。しかし、阿求は目覚めても夢のことを全て覚えている。この考えも目覚めれば、夢の中の夢とまとめられることなく、つぶさに思い出せる。妹紅もそのことを知らないわけではない。となれば、何故、妹紅はそんなことを考えているのだろうか。もし仮に、この今が夢であったとしても、妹紅の目の下の隈を、夢の一言で片付けてはならないような気がした。夢の中であろうと、妹紅が寝られない日を過ごしたのは明らかだった。

阿求の記憶から抜け落ち、妹紅に何かを伝えた昨夜のことを思い出せれば、妹紅が寝られなかった意味も分かるかもしれない。阿求は今、生涯を通じて初めてのことを経験している。本来、御阿礼の子が忘れるということはしない。全てを記憶し、記録して、後世に伝える役目があるためだ。その九代目である阿求が、忘却を体験している。阿求と妹紅は昨夜、一体何を話し、今日という日を迎えたのであろうか。分からないことだったが、阿求は心の端で、思い出せないことに対する諦めから、こういうことを思っていた。忘れなければならない出来事だったのかもしれない、と。そう思うと、何故、忘れなければならない出来事だったのか、という疑問がすぐに生じる。

阿求の頭はいつしか深くまで考えることができるようになっており、頭の痛みは治まって

189 見出された時

いた。阿求は複雑に絡み合う思考を落ち着かせるように、冷たくなった茶に口を付けた。

阿求が目覚めた時、今と同じようにこの机に二人分の湯呑みが置いてあった。昨夜、阿求と妹紅は今と同じようにこうして話をしたことを意味している。昨夜、何度かこうして妹紅を見上げたことがあっただろうか。苦悩に満ちた瞳に、阿求はどういう言葉をかけたのであろうか。妹紅にどういう言葉をかけられたのであろうか。一夜明け、言えなかったようなことを、妹紅は口にして、阿求は耳にしている。

昨夜という時間が、強く現在に作用している。現在が現実である確証はなく、同時に昨夜という時間が夢であるという確証もない。しかし、阿求は夢を見ている。夢を見るということによって、眠っていたことを保証し、昨日という日が存在していたことを教えてくれる。夢や眠りというものが、忘却の際に役立つとは思ってもいなかった。阿求は「幻想郷縁起」の編纂が終わる頃から、眠るという行為が苦しくなることがあった。一度眠ると、もう二度と目覚めなくなってしまうのではないかという不安が、阿求から眠りを奪う。眠れない日が続いたが、眠れる日もあったが、それは阿求にとって眠れる日ではなく、絶えず緊張と戦う夜であり、身体が急に緊張を覚え、唐突に目覚める時が何度も続いた。

そういう日々が続いていたことを思い返すと、こうして夢を見られるほど眠れた日は随分久し振りのようであった。心地良いもののはずが、忘却というものがついてくるとなれば、

何も心地良いものではない。何故、昨夜は眠ってしまったのだろうか、という後悔すら生じてくる。

この夢のような世界から目覚めた時、阿求は一体どこで目覚めるだろうか。幻想郷であろうか、外の世界であろうか。屋敷であろうか、永遠亭であろうか。あるいは、永遠に目覚めないのであろうか。もしかすれば、阿求は阿求の知らない間に息を引き取っているのではないだろうか。そう考えると、妹紅が眠れなかったのも、話せなかったのも分かる。阿求がすでに亡くなっているとなれば、この胸の鼓動はどういうことなのであろうか、この肌の温もりはどういうことなのであろうか、足の裏に覚える床の冷たさはどういうことなのであろうか。亡くなっているとは思えず、夢とも思えない。最初に考えていた通り、ここは現実であり、外の世界であり、阿求は生きている。茶を飲むと少し苦い。

阿求はその時、ほとんど無意識の間に胸底からこういうことを言った。

「私、もうすぐ死にます」

驚いたのは妹紅だけではなかった。阿求も妹紅と同じように目を瞠った。そういうことを考えていたわけではなかった。唇は阿求の思いを裏切るかのように、そういう言葉を口にしていた。そして、妹紅がどう答えるかも、阿求は知っていた。昨夜も同じ言葉を聞いたのだから。

「そうね」

「幻想郷縁起」の編纂が終わりに近付いた頃、阿求は自らの命が長くないことを自覚した。阿礼は長寿であったが、初代御阿礼の子である阿一は短命であった。短い一生の間で、沢山のことを見聞きし、記録し、後世に伝えるように生き、次代の御阿礼の子には何もすることがなければこの書の編纂を続けてほしい、と書き残している。

今では、御阿礼の子が一生をかけて、「幻想郷縁起」の編纂しなければならないとなっているが、阿一はそうは考えておらず、自らの一生の内に何かすることがないかと考えた時に、この書を書き進めていた。人間の世が少しでも良くなるために。「幻想郷縁起」が存在するから御阿礼の子が存在するのではなく、御阿礼の子が存在するからこそ「幻想郷縁起」が存在する。しかし、「幻想郷縁起」の編纂を終えた時、阿求は何かしたいことはなかった。充足感に満たされ、新たに何かしたいという思いが芽生えてこなかった。充足感だけではなく、自らの生の残りが短いからこその諦めもあったのかもしれない。

阿求はそれからの日々をどのようにして生を終えるのか、と考えることが増えた。幻想郷の中で一生を終える気はなかった。阿礼も阿一も外の世界で生き、死んだ。阿求も彼等と同じように、外の世界で死にたかったのである。名残惜しむように、幻想郷の景色が煌めくように見えたのは丁度、その頃からである。外の世界のことを考えると、幻想郷の木々や空や

空気がそれまでと全然違い、澄んで見えた。自然が姿を変えたのではなく、阿求の五感が死に近付き、研ぎ澄まされてようだった。

海に身を投げる勇気もなければ、毒薬を仰ぐ勇気もない。短命であるこの身を、自らの意志で更に縮めたくない。刻一刻と迫る死を味わい、満足に死にたかった。今こうして死を思うと、昨夜の熱い涙が込み上げてくる。頬に流れる涙を拭うと、妹紅が優しく抱き留めてくれる。柔らかい胸に包まれると、折角固めた決心が鈍くなる。

妹紅は優しい人だった。絶えず、阿求の側で見守り、支えてくれる人だった。阿求だけではない、御阿礼の子の記録に妹紅の名前を見なかったことはない。不老不死の人だった、自らの生に諦めながら、御阿礼の子達の前では笑顔でいられる強い人だった。この人と一緒だったら、阿求は大丈夫だろうと思った。

「死にたくないんです……でも、でも、私」

「大丈夫よ、大丈夫。大丈夫だから」

死を恐れているからこそ流れた涙ではない。妹紅と別れるという逃れられない運命から逃れたいがために止めどなく溢れてくる涙だった。

妹紅は阿求を止めなかった。老いることも死ぬこともない妹紅の血を飲めば、阿求も妹紅のようになれるかもしれないと考えたのは阿求も妹紅も同じだった。しかし妹紅の血を飲ま

なかった。
「私は稗田阿求として生きて、稗田阿求として死にます」
「私もその方が嬉しいわ」
「でも、でもね、妹紅さん、もう少しだけ生きたいんです」
「生きたいだけ生きればいいわ。阿求の人生なんだから」
阿求は妹紅の手を強く握った。どれほど生きられるのかは、阿求にも妹紅にも分からない。この手を絡められたまま息を引き取ることを許されれば、どれほど幸福だろうか。この胸の中で永遠の眠りに就ければ、離れ離れにならないだろうか。
「私が死んだら、その亡骸を抱きかかえて、海にお願いします」
「……皆、海が好きね」
「海は静かですから」
阿求は泣き疲れたのか、そのまま妹紅の胸の中で眠った。妹紅が焦ったように声をかけたが、返ってくるのは寝息だけだった。
妹紅は阿求を抱きかかえ、そのまま布団に眠らせる。阿求は今、夢を見ているだろうか。かつて言っていた、雫の夢でも見ているのだろうか。妹紅は広縁から阿求の呼吸が途絶えないのか、阿求が目覚めるまで見守り続けた。《了》

注釈

頁

五八　※鍾馗：中国の民間信仰から発したとされる魔除けの神。唐の玄宗帝の病気を快癒させたことから信仰の対象になったという伝説を持つ。

六一　※木鶏：荘子の『達生篇』に起源を持つ故事成語。紀悄子という鶏を育てる名人が、闘鶏において最強なのは木彫りの鶏のように何ものにも動じなくなった鶏だと説く。どんな事柄にも惑わされることなく周囲の模範となるという、老荘思想の理想を表現した挿話とされる。

六二　※龍顔：天子、すなわち皇帝や天皇の顔を敬って言う表現。

六五　※腑分け：『解剖』のより古い表現。

※畏き辺り：宮中や皇室などを婉曲的に言う表現。天皇そのものを指す場合もある。

※家司：一定以上の高貴な身分の家に設置され、家政の運営を担当した役職。

後書き

この度は、東方フランス文学合同「失われた時を求めて」をお買い上げいただき、まことにありがとうございます。昨年の例大祭が終わった直後に原稿を募集し、約一年、こうして一冊の合同誌として、皆様の手に渡り、非常に嬉しく思います。寄稿していただいた皆様のお陰です。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。重ねて、表紙絵を描いてくださった、うーみん氏にもお礼申し上げます。

こうしてここを書いている時、〆切一時間前とかなので、手短に。

掲載作品の元ネタ及びオマージュ先は以下の通りです。

藍もどき氏　「アーサー王伝説の叙事詩」（著：クレティアン・ド・トロワ）

ひととせ氏　「エミール」（著：ジャン＝ジャック・ルソー）

ガルゾ氏　「さりながら」（著：フィリップ・フォレスト）

こうず氏　「知られざる傑作」（著：オノレ・ド・バルザック）

海沢海綿氏　「さかしま」（著：ジョリス＝カルル・ユイスマンス）

藍田真琴氏　「異邦人」（著：アルベール・カミュ）

鵜飼かいゆ氏　「眼球譚」（著：ジョルジュ・バタイユ）

久我暁氏　「青い麦」（著：シドニー＝ガブリエル・コレット）

パンプキン氏「うたかたの日々」（著：ボリス・ヴィアン）
近藤貴弥氏「失われた時を求めて」（著：マルセル・プルースト）、「アンドロマック」（著：ジャン・ラシーヌ）

二〇一七年四月中旬　近藤貴弥

東方フランス文学合同「失われた時を求めて」

発行日　2017 年 5 月 7 日　初版

原作　東方 Project（上海アリス幻樂団）

印刷　ちょ古っ都製本工房

発行者　近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先　stkk7.920521@gmail.com

表紙絵　うーみん（狼疾人）

執筆者

藍もどき（東方天翔記 CPU ダービー処）

ひととせ（四季堂本舗）

ガルゾ（よろづの葉）

こうず

海沢海綿（ゐた・せくすありす）

藍田真琴

鵜飼かいゆ（Alya）

久我暁（青猫幻想団）

パンプキン

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。